

四葉真夜の息子～最も
自由なる者

空陸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【2062年の悪夢】 四葉家でそう呼ばれる事件が起きた。真夜が大漢の崑崙方院の魔法師に誘拐される。自身の身に迫る非人道的な人体実験、輪姦、凌辱…。真夜は恐怖と絶望の淵に身を置いていた。そんな最中、四葉家当主の元蔵らと共に海を渡り、真つ先に真夜を救出した一人の少年がいた。鬼神と化した十五才の少年のお陰で真夜は無事帰還を果たす。これは真夜の執念と愛で勝ち取った、【最も自由なる者】と世界から最も畏怖される事になる息子の物語。

目次

真夜の念願く愛の子	1
愛の子の誕生く英作の心中	4
母親の覚悟く産まれた息子の名は…	8
四葉家当主の決意く真夜の思惑の始まり	13
二人の女性く二人の母性	19
深夜の計画く交渉人	23
深夜の成果と想いく桜井穂波の生い立ち	33
深夜の懐妊く穂波の決断	39
深夜の告白く穂波の涙	47
真夜の告白く決戦に必要なピース	54
英作の失態く真夜の揺るぎない覚悟	69
達也の存在とベンジャミンの血筋と生い立ちく四葉の次期当主候補	80
京伊吹と穂波く母親の涙と真夜の号泣	98
様々な決断く平穏な日常の終焉	113
各家のある一日く突然の来訪者	128
棘く新生活	146
双子の生き甲斐く達也の成長	157
双子の意気込みく気になる相手	170

大学生生活く突拍子もない予感

—

八年振りの再会く感触

—

195 181

真夜の念願く愛の子

これは四葉真夜の息子にして世界から後に「最も自由なる者」と呼ばれる少年の物語である。

この日、四葉に一人の男の子が産声を上げる。分娩室の前には姉の四葉深夜が祈るような体勢から膝が崩れ落ち、安堵から目には涙を浮かべていた。

「深夜様おめでとうございます」

四葉家執事序列筆頭の葉山が、床に崩れ落ちた深夜に柔らかな笑顔で語りかけ深々と頭を下げた。

「葉山さん……ありがとうございます……」

葉山の声に漸く意識をはっきりさせた深夜が、椅子に座り直して気持ちを落ち着けた頃、

分娩室から助産師が出て深夜に告げる。

「深夜様お祝い申し上げます。御当主様と御子息様、共に健康に問題ありません」

深夜は改めて安堵し、急いで自らを消毒や除菌を施して分娩室に入って行った。

「真夜!!」

深夜が声を発した相手は双子の妹である四葉真夜、出産直後の憔悴しているその腕の中には、男の子が大切そうに抱かれていた。

「姉さん……私の息子よ……こっちに来て顔を見てあげてくれないかしら……」

真夜がそう言うのと深夜が駆け寄って行く。

「なんて可愛いのかしら……この天使の様な子が貴女達の息子なのね」

目に涙を浮かべ、その小さい手にそつと指を伸ばした。すると、深夜の指をその小さい手で力強く握り返した。

「真夜……本当におめでどう。……ここまで色々あつて、辛い思いと時間が随分掛かつてしまったけど、貴女は立派にやり遂げたわ！姉としてとても誇らしく思います」

深夜が握り返された手を見ながらそう言う

「ありがとう姉さん。でも、これから私もこの子も、大変な事が幾つも待ち受けているのでしょうね……だから姉さん、これから私も宜しくお願いね」

真夜が神妙な顔つきで深夜に目配せをした。

「もちろんよ真夜……貴女達は私が必ず守り、支えて行くわ……安心しなさい」

深夜は真夜にそう言うと同時に自分自身を改めて戒め、不退転の決意をする。

こうして【極東の魔王】【夜の女王】と呼ばれる母と【忘却の川の支配者】と呼ばれる、その姉の二人に惜しみなく愛を注がれる男の子は、後に幾つも異名を持つ事になる

のだが、それはまだ先のお話。

こうして産声を上げた男の子の誕生は、事情により四葉家内でも最上位の極秘事項になる。その誕生を知らされたのは分家の当主、執事では序列第三位の紅林までであり、あとは世話をするメイド長の白川とその腹心二人のメイドだけであり等しく戒厳令が出され、破った者には分家の当主であつても処断するという主旨を伝えて、徹底した情報統制が成された。それ故に、分家の子供達ですら彼の出生の真相を知るのは、随分後になつてからになる。また極稀に四葉家本邸で見掛ける事があつても、出生を知る分家の当主や執事、メイドに至るまで皆が口を紡ぐのだから、真相を知らない分家の子供達や従者達から不気味がられる事になる。事実を知らされない者達には、素性の知れない男の子が四葉本家で威風堂々と闊歩する姿は到底受け入れる事は出来なかつた。しかし彼の存在を探ることは禁止されていた為、受け入れられない者達からは、暗黙の内に冷遇される事になる。

愛の子の誕生～英作の心中

深夜が真夜の子供の誕生に涙し不退転の決意をする少し前。

西暦2079年4月24日、四葉家本邸（旧第四研跡地）は旧山梨県の北西部に位置するが、何重にもなる認識障害の結界により外部からは発見されない。その為四葉本邸に部外者が侵入する事は不可能になっており、立ち入りが許可されている極少数の者達しか敷地に足を踏み入れる事は出来ない。その四葉本邸の奥のとある一室で、知らせを待ちわびているその人物は、周りに人がいれば思わず畏怖してしまう面持ちで、空気を震わせながら知らせを待っていた。

「英作様！」

筆頭執事の葉山から連絡を受けた執事序列第三位の紅林が知らせを待ちわびているその人物……四葉家先代（二代目）七つある分家の一つ、椎葉家現当主の父で深夜と真夜から見て叔父（故 初代四葉家当主、四葉元造の弟）の四葉英作の下に知らせを持って来た。

「ついに産まれたか！」

英作はいつにも増して興奮した様子で紅林の言葉を待たずに立ち上がった。英作の

鬼氣迫る様子に若干後退りした紅林ではあったが、すぐに呼吸と姿勢を正して英作に向かつて告げた。この辺りはさすが四葉家に仕える執事の中でも序列第3位に位置している者である。半端な者では英作が発する威圧感に吞まれそうになるぐらい空気が痛かった。年老いたと言つても四葉家先代当主の名は伊達ではない。

「おめでとうございます。4500グラムの元気な男の子とのことです。真夜様は少々お疲れの御様子だとの報告はありますが、母子共にお身体には問題ないとの事です」

そう言つて一礼した。紅林の言動に、英作は年甲斐もなく必要以上に自分が威圧していた事を自覚した。それもそのはず、英作から見れば尊意していた兄、四葉元造の愛娘であり英作から見ても小さい頃から可愛がつてきた姪の子供だ。事情はあれど、四葉家直系の姪孫てっせんの誕生に、無意識に想子が漏れ出て空気を震わせていたのだ。英作は頭を冷静にするために、再び座布団にゆっくりと腰掛けて日本茶を啜つた。本来であれば、すぐにも真夜の下へ駆け付けたい所ではあるが、新生児にしては大きい倅を出産した直後の真夜の下へ、冷静ではない今の自分が駆け付けければ、真夜に余計な心労を掛けるのではないかと思ひ止まった。少しづつ冷静になつていく事を感じながら英作は口を開いた。

「そうか。無事に産まれたか。話の様子だと今はゆっくり静養した方がよいじやろうな……儂は大人しくしてるとしようかのう……」

英作がそう言うのと紅林は一礼し、来た道を帰って行った。紅林の後ろ姿を見ながら英作はこれからの事を考えていた。今回の真夜の出産は、他の分家の者達は知らない。真夜の意向により英作と深夜、執事では序列第三位の紅林までと、世話係り予定のメイド長の白川と、その腹心二人、あとは直接取り上げた助産師しか知らない。真夜の妊娠が発覚した際に、真夜直々に情報規制が引かれ、最重要機密だとして、破れば先代の英作であつても処断する覚悟があると真夜と深夜に睨まれた。大漢の撲滅に参加した英作ですらも畏怖してしまうほどの迫力がその二人にはあつた。その為、先の新年の「慶春会」でも「認識阻害」の応用魔法を用いて、真夜の姿を妊娠前の状態に見せていた。真夜と深夜、それに筆頭執事の葉山と英作で話し合い、一先ず、出産するまでは当主の仕事、密かに英作と深夜で分担して真夜の負担を極力減らすなど、徹底してこの日を待っていたのだ。とりあえず無事に真夜の出産は、他の分家の者達にも悟られずに来たが、此れから先の事を考えると頭が痛い英作だった。それもそのはず問題は山積みであり、程度はあれど分家の当主達に話さないと解決しない問題が幾つもある。しかし、逆に話してしまう事で余計問題が大きくなる可能性もある。どこまでを話して四葉と分家が団結していくかは英作自身も判断が難しく、万が一にも真夜と深夜に分家が反逆して、内乱になる事だけは絶対に避けなければならぬからである。まずは自身の固有魔法で産まれた姪孫の「魔法演算領域」を解析して潜在的な魔法技能を見通す事を決め、診

断してからではないと話が進まぬかと一応の結論を出し思考を中断した。

「ふうー。」英作は大きく息を吐くとこれといった解決策が見つからない現状に頭を悩ませているのだった。

母親の覚悟～産まれた息子の名は...

四葉本邸がある広大な敷地内には、様々な施設も存在する。真夜達三人が居る分娩室もその一つだ。これは秘密が多い四葉家ならではのあり、国内外問わず、四葉の遺伝子を欲しがる勢力が掃いて棄てるほど存在する故に、出来るだけ危険を排除するために設けられている。真夜と深夜も、この施設で極秘に産まれた。助産師も四葉が専属で囲っている一族であり、安心して出産出来る。

英作の心労など、今の真夜と深夜にはどこ吹く風だった。場面戻って、分娩室から病室に移って来た真夜。もちろん姉の深夜も付き添っている。産まれたばかりの息子を助産師に預けると

「葉山さん、後はお願ひします」

とそう一言告げた。

「畏まりました。真夜様」

葉山は一礼して、助産師の後ろを着いて行った。産まれたばかりの息子の護衛役、兼助産師の監視の為だ。その命は現在の真夜にとって最重要であり、万が一があつてはな

らないとその眼が物語っていた。当然、葉山も主の意志を理解している為、いつもは優しげな目も、今回の命には鋭い目つきになっていた。葉山を見送った後、深夜は自分と真夜の周りに防音障壁を張った。そしておもむろに口を開いた。

「改めてご苦勞様、真夜」

「ありがとう姉さん」

「それにしても本当に天使のような子だったわね。どちらか言えば父親似かしら？」

「そうでしょう？彼と私の息子なのだから当然よ。確かにどちらか言えば父親似かしらね。男の子だから彼に似て良かったわ。将来は彼のような素敵な青年に成長するのが今から楽しみだわ。」

「気が早いわよ真夜。でも、将来は女の子からの人気で大変かもしれないわね。すぐ彼女とか連れて来ちゃうかも!」

「… 姉さんこそ、彼女なんて充分気が早いわよ」

クスクスと微笑み合いながら、真夜の息子の将来をそれぞれ頭に描きながら談笑していた。

「… ところで真夜、名前はもう決めたの？」

深夜が尋ねると、

「決めてあるわ。正式には四葉……達也よ。けど、暫くは彼の事を明かせないから、

戸籍の細工は必要ね... 考えないといけないわ」

そう言うもう少し哀愁を漂わせながら目尻を下げて微笑んだ。

「真夜：今は仕方がないわよ、時期が来たら達也には真相を教えて上げれば良いんだもの」

真夜の肩にそつと手を置き、自分の豊満な胸の前に真夜の顔を引き寄せて優しく抱き締めた。

「... ありがとう姉さん、大好きよ」

真夜はそう呟くと、深夜の背に手を回して抱き締め返した。深夜は黙ったまま頭を撫でながら、双子の妹である真夜の気持ちを持ちを落ち着くの待った。気持ちが落ち着いた真夜が、深夜の背に回していた自分の腕を下ろしながら口を開いた。

「もう大丈夫よ姉さん... 此れからの事なんだけど、英作叔父さんの事だから達也の能力を診断するでしょう？ 達也がどんな魔法が使えるにしろ、英作叔父さんは分家にも伝えるよう言ってくると思うわ。けど、真相を話したら事態は最悪の結果になる可能性が高いわ... だから最悪の事態に備えて準備しようと思うの。この機会を利用して私の意思を告げるわ」

真夜の発言に、深夜は一瞬身体がビクツと跳ねたが

「... 分かったわ。貴女の考えを聞かせて頂戴」

真夜に続きを促した。覚悟を決めた深夜の顔つきを見て、真夜は自分の計画を深夜に聞かせた。話を聞くうちに聞いてる深夜の顔が強張っていく。一通り話を聞いた後、深夜は瞳を綴じて暫く動かなくなった。その様子を真夜は決意した表情で見つめていた。瞳をゆつくり開けた深夜は真つ直ぐに真夜を見て、

「……分家が動こうしたら、どちらの方法を取るにしても本当に決行するのね？」

最後の確認の意味を込めて真夜に聞き返す。

「ええ姉さん、私は本気です。達也を守る為なら例え一人でも決行します。仮に大事にならなくても、決裂するようなら二つ目の計画を実行するつもりよ。葉山には前から計画を話して準備を進めさせてあるし、あと一ヶ月もすれば準備も整うわ。それに姉さんには今回の計画を話したけれど、話が決裂した際は姉さんは避難して頂戴」

真夜は慈愛に満ちた表情で深夜に語りかけた。

そんな表情を浮かべる妹を見て、これは決意した母親の顔ね、と深夜は思った。

「馬鹿ね……分婉室でも言ったでしょう。貴女達は私が守って支えていくから安心なさいと。譲れないものが相反する事になったら選択するしかないのは世の常なのだから。その選択を一緒にする覚悟はしっかりしてあるわ」

深夜のその言葉に真夜の目からは涙が頬を伝う。無言の双子は抱き合いながら、お互いの存在を確かに感じながら、これからの戦いに挑んで行く……

12 母親の覚悟～産まれた息子の名は...

四葉家当主の決意く真夜の思惑の始まり

この日も英作は荒れていた。真夜が出産してから五日経つても面会謝絶の状態は解かれていないばかりか、その後の説明が一切なかったからである。既に癩癩を起こす寸前の英作は、真夜が出産した施設の前で足止めを食らっていた。そんな英作の前に、最愛の息子を抱きながら歩いてくる真夜と、それに付き添う深夜と葉山が出てきた。

「ご機嫌よう。英作叔父様、この度、多大なご尽力のお陰で無事に息子を出産する事が出来ました」

真夜が英作にそう言いながら軽く会釈をすると、真夜に続いて深夜と葉山が深く一礼した。

未だ冷静さを取り戻せていない英作は、言いたい事が山程あったが、頭に血が昇った英作は上手く言葉を紡げなかった。そんな英作を見て真夜がクスつと笑みを浮かべると、英作の顔が更に赤くなった。遂に爆発しそうな英作を真夜は左手を差し出して制した。

「英作叔父様、そんな怖い顔をしていては、この子が怖がつて泣いてしまいます。五日間も面会謝絶していた事と、説明を一切しなかった事に関しても心が痛みましたが、まず

は産まれたばかりの我が子の事を第一に考えた結果です。御容赦下さいな。私自身も体力を著しく削ってしまつた故に回復するまで時間が掛かりましたの。…子を産むというのは本当に大変な事なのだと思つて改めて実感致しました」

感慨深そうに真夜が英作に向かつて告げる。

そんな事を言われてしまえば、子を産む事など出来るはずもない英作には思う処はあれど、それを口を出せる筈もなかった。そんな英作を見て微笑んだ真夜だったが、微笑みの奥に一瞬、言い知れぬ深い闇のようなものを感じ取つた英作は身震いした。英作の心境を知つてか知らずか

「英作叔父様も積もる話がお有りでしょうから、一先ず話は場所を屋敷に移してからに致しましょう」

真夜はそう言う就先導して屋敷へ歩き出し、その後ろを深夜と葉山が続く。真夜と深夜の後ろ姿を見ながら、英作は恐ろしい事を真夜と深夜が企んでいるのではないかと悪寒がした。

屋敷内は既に、今回の出産を知る者以外が屋敷から出され、別々の業務に振り分けられている。自身の書齋に到着した真夜と深夜は隣り合わせに年代物のソファアンティークに腰を掛けた。

英作は向かいのソファに座る。執事の葉山が真夜と深夜には紅茶を出し、英作には

日本茶を出した。三人が一息入れたところで英作が口を開いた。

「真夜よ、取り敢えず無事に出産して良かった。おめでどう」

「ありがとうございます、英作叔父様」

「……して真夜よ、これからどうするつもりじゃ？何時までも、その息子の存在を隠せはしまい

？このままでは問題が増えていく一方じゃ。些か現実的には思えんのう。……そこで、まずは儂がその子を診断しよう。一見しただけでもかなりの魔法力を秘めていそうじゃが、詳しく診断してその結果と共に息子の存在を分家達にも知らせ、「次期当主候補」として教育した方が良いのではないか？」

「……叔父様の言い分も確かに一理ありますわね。しかし出生の真相を明かして分家の皆様にご納得頂けませんでしょうか？」

「……その点に関しては儂からも進言しよう。奴には大漢の時の大恩もある。皆も話せば納得するはずじゃ。……外からの外聞もあるから反対する者も出るじやろうが、儂も此れからの四葉に必要だと説得するのに力を貸そう」

真夜は一時考える素振りを見せるが

「分かりました。それでは、この子……達也と名付けました。達也の診断をお願い出来ますか？英作叔父様」

真夜の返答を聞いた英作は拍子抜けした気分だった。真夜を説得するつもりで提案はしたが、

何の抵抗も見せずに事が運ぶと思うほど英作も単純ではない。釈然としない英作の様子を見兼ねて真夜は

「：。私自身も息子を出産して、このままではいずれ綻びが生まれてしまうと思ひ至りましたの

。ですから、程度はあれど分家の皆様には公表した方が良いと判断しました。何処まで話すかは四葉家当主として私が決めます」

英作は言動の裏にある真夜の思惑を見透かそうと訝しげな目を向けるが、現実的にこれ以上ない話であるのも英作は理解しており、万が一にも真夜の気が変わらぬよう、話を進める事にした。

「うむ：。では早速その子の診断をしてみるか」

そう言うのと、英作は立ち上がって真夜の側まで来て真夜に抱かれている達也の胸に手を軽く当てて、英作は静かに瞳を閉じる。英作の固有魔法は、対象の魔法技能を解析する事が出来る。この技術は今日の四葉の「魔法解析技術の礎」と言つて良いだろう。

四葉の者は代々【特異な固有魔法】か【精神干涉系魔法】のどちらかを得意として産まれてくる事が多く、それはランダムで発生する。精神に関する研究を行っていた第四

研究所は、設立当時、「精神干渉系」が得意な魔法師の他に、「特異な魔法」を持つ魔法師も密かに集めて実験に加えていた。その為、代々四葉家はどちらかの能力を有して産まれてくる事が多い。

暫く達也を視ていた英作の額に冷や汗が滲み出て来た。と同時に英作はゆつくりと目を開く。

「なんだ……この子は……」

英作はそう呟くと思わず後退り、真夜は驚愕している英作を見てクスツと笑みを溢した。英作はそんな真夜を一瞥した後、

「……この子は『世界を破壊する力』を秘めている。それに魔法力、想子保有量共に既に真夜……お前と同等はあるかも知れん」

驚愕の結果を信じられない。しかし英作の驚きはまだ終わっていないかった。

「その魔法以外に……これは治癒魔法？ いや……違う『再生』か？……まだ他にもあるよ。うだが儂でもはつきりは視えん。これほど魔法を有しても『魔法演算領域』にはかなりの空きがあるように視える……本当に人の子なのか？」

何とか正気を保ちながら英作は真夜に呟いた。しかし、真夜ばかりか深夜も動じる様子は微塵もない。その様を見て英作は悟った。この双子はこの赤子の能力を予め予測していたと。それどころか、そういう能力を秘めて産まれて来る事を願っていたかもし

れないとさえ思った。英作が双子に本能的に恐怖する中、真夜が口を開く。

「そうですか。英作叔父様、お疲れ様でした。達也の存在は一ヶ月後、分家の皆様の集めて報告致します。達也の能力についても、私が判断して何処まで話すか決めます。宜しいですね？英作叔父様」

英作の思考を止めるのには真夜の有無を言わせぬ表情だけで容易かった。

二人の女性と二人の母性

衝撃の診断が終わり、真夜は部屋を出ていく英作に、公表するまで誰にも明かさないうように口止めした。英作は内心迷っていたが、真夜を刺激すると取り返しのつかない事になるのではないかと戦々恐々しながらその場は従うことにした。

英作が退室した後、深夜はすぐに防音障壁を部屋に張った。

「真夜、英作叔父さんは大丈夫かしら？」

「大丈夫よ姉さん、私達を刺激したら取り返しのつかない事になると悟ったでしょう。それに【分解】と【再生】の事を視られるのは想定内でしょう？姉さん」

真夜が深夜に改めて計画通りだと告げると

「奥様、計画の準備も滞りなく進んでおります」

葉山も計画に抜かりはないと言わんばかりに報告する。

「ありがとうございます、引き続き宜しく願いますね」

「御意」

葉山は一礼して退室した。

暫く、真夜に抱かれた達也を眺めていた深夜は、決心した様子で真夜に心中を明かす。

「真夜： 私も子供作ろうかと思うの」

深夜の突拍子もない発言に流石の真夜も目を見開いた。それもそのはず、優秀な遺伝子を残す為に早婚が推奨される現代の魔法師の現状下で、真夜は達也を産みはした。しかし結婚はしておらず、子供の存在もその父親も世間には公表出来ない。姉の深夜に至っても、二十九歳になった現在まで頑なに結婚を拒んできた経緯がある。真夜は姉が現在まで結婚していない理由を知っている。その為、姉の発言には驚いた。そんな真夜の心中を察した深夜は言葉が続ける。

「真夜が驚くのも分かるわ。…けど聞いて頂戴。今回は仮に計画が上手く行っても、今後達也には困難が待ち受けているのは目に見えてるわ」

確かにと真夜も頷き、深夜に話の続きを促す。

「達也は英作叔父さんが言ったように世界を破壊させるだけの力を付けて行く。…彼の父親ですら比較にならないほどに。そんな達也が暴走したら、はつきり言っただけの手施しようがないのは容易に想像出来る。真夜の気持ちは理解しているけれど、私達は達也より早く死ぬ事になるわ。私達がいなくなった後でも達也を愛して、理解し、暴走を抑止する相手がどうしても必要だと私は考えるわ。だから私が娘を産んで達也のお嫁さんにするのはどうかしら？」

真夜としては自身の愛する人は達也本人に見つけて欲しいと思っている。と同時に

姉の愁いも理解出来る為、どう返答しようかと迷っていた。

「達也自身に見つけて欲しいという真夜の気持ちも分かるわ。けど、達也の側にいるのは生半可な相手では無理だと思ふのよ。だから私と相性の良い遺伝子を持つ相手を見つけて、以前から理論は完成してた私の調整技術を使って、完璧な娘を産もうと思ふわ。勿論、将来達也がどうしても嫌と言えば結婚しなくても良い」

「… 姉さんは本当にそれで良いの？ 姉さんも私と同じで自分が決めた相手じゃないと嫌だつて言つて来たじゃない！ 姉さんの気持ちはどうするの？」

「結婚はしないわ、精子だけ提供してもらふの。… 今でも結婚するのも、抱かれるのも、愛した人でないと嫌よ。けれど、私ももう二十九になるし今までに惹かれたのは一人だけ。その相手も真夜を選んだでしょう？ 此れから先も彼以外を愛せるとは自分でも思わないわ。それは真夜が一番理解出来るでしょう？」

真夜自身もそう思っている上に、姉の深夜も同じ相手を慕っているのを知つて真夜は何も言えなかった。

「それにね… 真夜の念願が叶つて彼を見つけた時、海外にまで飛び出して… 帰国後に妊娠したと教えてくれた真夜を見てから、私も子供が欲しくなったのも事実なのよ。そして達也が産まれて気持ちを抑えられなくなつたわ」

母親になつた喜びを実感している真夜には、深夜が嘘の言葉を発しているようには見

えなかった。これまで、いつも自身を支えてくれた双子の姉に、この幸せを感じさせる事が出来るならと、真夜は深夜の提案を受ける事にした。

「分かったわ姉さん、私も出来る限りサポートします。けれど相手はどうやって見つけて交渉するつもり？ 選定も交渉も身分を明かせない以上、困難なのは明白だと思うのだけれど」

真夜は深夜の決断を肯定したものの、根本的にどう解決するのか解らなかった。

「実は、選定はもう済んでるわ。前から決断した時の為に調査してて、思いの外、身近に居たわ」

!!? 想像もしてなかった返答に真夜は食いぎみに聞き返した。

「誰なの!?!」

「FLTの第一営業部課長の司波龍郎という男よ。魔法力や資質は大したことない。けど、量子量がとてつもないの。どうせ調整技術で弄ってしまうつもりだから条件的には悪くない。それにFLTは四葉が出資している会社でしょ、交渉に関しても出資者として接触出来る。交渉材料を用意するのも、手間はそんなに掛からないと思うわ」

それが本当なら確かに深夜が言うように、案外簡単に解決しそうだ。というより深夜が本気で計画ってきて、これから実行しようとしていると改めて実感した真夜であった。

深夜の計画と交渉人

こうして真夜と深夜、お互いは計画を進める事にする。特に決断した深夜は予め選定していた司波龍郎ターゲットに、早速接触する為に行動を開始。交渉担当は執事序列三位の紅林を宛がう事に決めた。紅林を交渉担当に選んだ理由は、達也の出生を知るといっただけでは当然ない。紅林は四葉家において「魔法師調整施設」の管理を担当しており、「調整体魔法師」の製造設備だけでなく、後天的な「魔法力強化施設」も管理している。因みにこの施設のトップは深夜である。

。その為、実質的に深夜直属の執事と言っても過言ではなく、四葉とは別に、深夜自身が独自に調整技術を研究していた事を知っている数少ない人物の一人であり、信頼を寄せている数少ない腹心でもある。こうして交渉担当に選ばれた紅林は深夜の部屋に呼ばれた。

ノックをした後、深夜の返事を待つてから扉を開けた紅林は一礼して入室する。

「失礼致します。深夜様」

「紅林、ご苦労様。これから重要な交渉を担当してもらいます。少し長い話になるからそこに掛けなさい」

普通、掛けろと言われも執事である以上、額面通りに受け取るのを躊躇するもの。紅林は失礼を承知で躊躇しながらも向かい合う椅子に腰を降ろした。

「貴方には、今回重要な交渉を担当して頂きます」

「畏まりました。何なりとお申し付けくださいませ」

紅林は内容を聴かずに返答した。

「頼もしいわ。今回の交渉は失敗は許されませんので気を引き締めて下さいね。さて、早速本題に入ります」

深夜がそう告げると紅林はこれ以上ないぐらい背筋を伸ばした。

「まず一つは、FLT第一営業部課長司波龍郎の精子を入手する為の交渉担当です。知つての通り、FLTは素性を隠して四葉が出資している企業です。こちらの素性を明かさずに出資者の執事として交渉して下さい。期限はなるべく早く、遅くとも十日以内には必ず入手して下さい。交渉材料については資料を纏めてあるわ」

「畏まりました」

紅林は一切表情を変えず、余計な口も挟まずに深夜へ即答した。そんな紅林の様子を見て深夜は満足そうに微笑んだ。

「次は、警察庁公安局に所属している桜井穂波さんを四葉に引き入れます。こちらに關しては私も交渉に参加するつもりですが、貴方には、先に一度接触してもらい大ま

かな交渉をしてもらいます。その際、私の素性を明かしても構いません」

「それでは早速、細かい打ち合わせに入ります。これが今回の交渉に必要な資料です」

真夜はそう告げると二冊の書類を手渡した。今時珍しい紙の謀体で、今の時代では滅多に使われる事が無くなった物の一つである。紅林は一言返事をして二冊の書類を隅から隅まで目を通した。紅林が目を通し終えるのを確認した深夜は、細かいところを説明しながら詰めていき、ミーティングは終了した。

深夜の部屋を出た栗林は、手筈通りに司波龍郎との交渉を進める為に電話を掛けた。その相手はFLT社社長である。社長室に直通回線を繋げて、翌日の司波龍郎とのアポイントを取り付けた。何故なのかは理由を明かしたりしない。

取引先から直帰しようとしていた司波龍郎の携帯端末に着信が入る。その相手は社長本人であり、翌日の午後一番に第一会議室へ来いと招集命令が下された。これに際して、他言無用だと念を押された為、龍郎の心中は穏やかではなかった。

自宅に着くと妻の小百合が先に帰って来ており、龍郎をリビングで出迎えた。

「お帰りなさい、龍郎さん」

「ただいま、小百合」

龍郎と小百合は龍郎が中三、小百合が中一の時に交際を開始、小百合の大学卒業と同時に結婚した。二人の間には子供はなく、お互い子供はまだ不要だと考えている事や、

出世欲が人一倍強い二人は、子供に時間を割かれるのは避けたかった。小百合は夕飯の準備をしていて、エプロン姿だった。龍郎は先に風呂に入り、着替えてから夕食を取るため、小百合の待つリビングに向かう。小百合はいつもより顔色の優れない龍郎の様子が気になった。

「何かあったの？」

小百合は龍郎に問いかけたが龍郎からの返事はない。龍郎は社長直々に他言無用だと念を押されていた為に返事が遅れてしまう。龍郎は迷ったが小百合に話す事にし、先ほどの電話の件を説明した。話を聞いた小百合も、龍郎が呼び出される理由は検討が付かなかった。

翌日、呼び出された第一会議室に到着すると、龍郎はノックをして返事を帰って来るのを待った。

「入りましたまえ」

社長の声で言われたのを確認して龍郎は扉を開けた。

「第一営業部課長、司波龍郎です。招集命令につき出頭致しました」

一礼した後、社長の側に見慣れない自分と同年代の外見で、妙に迫力がある男性が居る事に龍郎は違和感を感じていた。龍郎の緊張を他所にその男性は社長に一言声を掛けた。すると、社長がその男性に一礼し、龍郎の側を通り過ぎて部屋から出て行ってし

まう。予想外の展開に訳が分からないといった顔の龍郎に目の前にいる男性が口を開いた。

「突然の招集命令で戸惑っておいででしょうが、此方に来て掛けて頂けますか？」

その声に意識をはつきりさせた龍郎は言われるがまま向かい合わせに座る。

「では、自己紹介させて頂きます。私、紅林と申します。本日はFLTの出資者でおられる我が主の命を受けて参上致しました。今回、私の主人は司波龍郎殿にご協力頂きたい事があり、勝手ながら社長を通して、直々に招集命令を下す事で面会の機会を作らせて頂きました」

突然の招集命令の意味を理解した龍郎であったが、そんな大物が自分に協力して欲しい事とは何かと警戒心を引き上げる。一瞬、顔が強張る龍郎だったが、すぐに持ち直して普段通りを装った。紅林には龍郎が警戒心を引き上げたのが手に取るように分かったが、そんな事に一々反応したりはしない。

「……招集命令の理由は理解出来ました。それで私にどのような用件でしょうか？」

平常心を装いながら龍郎は自分のペースを崩れまいと、営業で培ってきた処世術で對抗しようと心構えていた。龍郎の心中など紅林にとっては手に取るように把握出来るが、ここで敢えて警戒心を解くような真似はしない。深夜からの情報で、龍郎の性格を熟知している紅林にとっては、警戒させたままの方が交渉を有利に進められると考えた

からである。龍郎の警戒心がすっかり上がった事を確認した紅林は、更に龍郎の警戒心が頂点ピークになるような言葉を続けた。

「：：これからお話する事は呉々もご内密にお願い致します」

そう言うのと紅林の目付きが一層鋭くなる。

紅林の思惑通り、龍郎の警戒心が頂点ピークになり思わず無言で頷くと、紅林は龍郎にとつて想像もしてなかった事を告げた。

「司波龍郎殿には精子をご提供して頂きたいのです。素性については申し上げる事は出来ませんが、主人は子供を切望されております。しかしながら相手が誰でも良いという訳でもありませんが、必ず龍郎殿でなければならぬわけでもありません」

紅林は曖昧な言い方をした。しかし龍郎は紅林の思惑通り、突拍子もない事を言われて固まってしまっている。龍郎の思考は文字通りグチャグチャになっていた。そんな龍郎を他所に紅林は説明を続ける。

「我々が独自に相性が良い遺伝子をお持ちの方を選定した結果、今回、他の二人様と龍郎殿と合わせて三人が最終候補に選ばれました。このお三方ならどなたでも構わないと決めた主人はある決断を致しました。本日、同時刻に交渉を開始して一番早く決断された方からご提供して頂くと。その際、御本人以外の判断が横槍にならないよう、最後は決断力のある方に決めると仰せになりました」

勿論、これは真つ赤な嘘であり、交渉しているのは龍郎しかいない。紅林の思惑は龍郎の判断力を奪う事で、此方の思い通りに交渉を進める事にある。思惑通り思考が纏まらない龍郎は、いきなりの事で暫く固まったが何か発言しなければと焦っていた。想像以上に此方のペースに持ち込んでいる事を確信した紅林は、ここで一つ目の策に動く。「主人からはご提供の意思がお有りなら、それ相応の御礼をさせて頂くと申し束つております。龍郎殿にとつて良いご提案だと自負しております」

紅林の言葉は物騒な返答ではなく龍郎は無意識のうちに安堵した。それどころか、龍郎の心を擽る言葉でもあった。現金な龍郎は冷静さに欠きながらも紅林のアメに食いついた。

「因みに提供した際の見返りとは何か、聞かせて頂いても良いですか？」

「以前から龍郎殿と小百合殿が懇願されている部署への異動と、それなりの役職をご用意させて頂きます」

龍郎は思わず背筋を伸ばした。自分ばかりか妻の小百合の分まで、役職を用意されていると知つて一気に気持ちが傾く。龍郎は以前から開発部に強い拘りを抱いており、小百合も以前は研究部門に在籍していた。が、思うような結果を出せず管理部門に異動になつている。小百合が研究職に未練がある事を知っていた龍郎は、最初は不躰な頼みかと思つたが、その不躰な頼みの見返りは喉から手が出るほど渴望していたものだった。

ここで龍郎はもつと甘い蜜が啜れまいかと欲が出てしまう。同時刻に交渉しているという、他の二人の候補の動向が気にはなつたが、龍郎は甘い蜜をもつと啜るために紅林にどう反撃しようか考えていた。その時、紅林が左腕にある時計に目を落とす。一瞬、冷や汗が出た龍郎が反撃に出ようとした瞬間、紅林が先に口を開いた。

「申し訳ありません」

紅林が時間を確認したのを詫びたあと、更に続ける。

「交渉が纏まり次第、主人に連絡を入れる事になっておりまして、他のお二方にも魅力的な提案をご用意しているが故に、主人の見立てでは交渉に三十分も掛からないだろうと言われているものでして」

確かに自身だけで判断しないといけない上に、その本人にとって魅力的な見返りが用意されていれば、即決も十分あり得ると龍郎は思った。そこで自分の甘い考えを捨て、龍郎は形振り構わず決断した。

「分かりました。そのお話お受け致します」

龍郎がそう決断すると、紅林は内心でニヤリとした。ここまで僅か二十分……その短い間で深夜からのお使いを纏めてみせる。そんな胸の内を微塵も見せず、打ち合わせ通り深夜に連絡すべく、自身の携帯端末から電話を掛けた。

「ご主人様、司波龍郎殿よりご提供の件、承諾頂きました」

紅林が音声のみの相手に伝えると、端末から実に色気のある声が響く。龍郎は背筋に電気が走ったような感覚を覚えた。それほどまでに深夜の声を聞き入ってしまう。一体、どんな女性なのかと興味が沸いたと同時に、そんな女性に選ばれた自分自身を誇り、酔っていた。

「ご苦勞様、貴方が最初に交渉を纏めてくれました。よつて正式に提供者は司波龍郎殿に決定します。後の段取りも引き続きお願いね」

そう告げて電話は切れてしまう。もつと声を聞いていたかつたが、紅林の視線で現実に取り戻された。その後正式に書類にサインした。その際、幾つかの規約を設けられた。

― 今回の交渉について、一切を生涯口外しない事

― 此方の素性を探らない事

― 提供は異動後すぐに行う事

― 役職は用意するが異動後の優遇は一切行わない事（実績があげられない場合、再異動もあり得る）

以上が履行されない場合、それ相応の対応を取る事と書かれてある。龍郎のサインが済んだ契約書を鞆にしまい、栗林はそのまま社長室に足を向けた。社長には出資者権限で龍郎と小百合を以下の役職に異動させるよう命令が下る。

司波龍郎を開発部第一課主任を命じる

司波小百合を第一研究部門に新チームを開設し、その主任を命じる

なお、異動は三日以内に完了させるものとする。紅林がそう告げると社長は一礼して了承した。社長は四葉が出資しているとは知らされていない。が、自身も四葉の鶴の一声で社長に就任した為、逆らう事など出来はしない。こうして司波龍郎の精子入手任務は決着した。

深夜の成果と想い　桜井穂波の生い立ち

深夜は自身がトップに立つ魔法師調整施設を訪れていた。紅林からの電話のあと、自身が予てより独自に研究してきた調整技術の最終確認を進めていたからだ。理論は固まっていたが、実際には自身の構造干渉系魔法も併用しながら実施しなくてはならない為、正直言ってもまだまだ安心出来る段階ではない。今回、深夜が行おうとしているのは、四葉の技術を全て注ぎ込んだと言っても過言ではない。【完全調整体】として深夜自身の娘になる存在、失敗は許されない。

それに加え、時間的問題もある。達也の存在を分家に公表する報告会では最悪のケースもあり得る。いつまでもこの施設と機材を使用出来る保証など何処にもないのである。出来れば達也のお披露目までには、調整した体外受精卵を自身で身籠る処まで進めたいというのが本音だ。深夜は時間を忘れて最終調整に没頭していた。そんなタイミングで交渉を終えてFLTから帰ってきた紅林が、報告の為に深夜のもとを訪れる。

「お取り込み中失礼致します。深夜様、司波龍郎との交渉が最終的に纏まりましたのでご報告に参りました」

紅林はそう言って一礼する。

正直言つてこのタイミングで横槍を入れて欲しくはないが、短時間で今回の最重要任務をやり遂げた紅林に、労いの言葉と報告を聞くため手を止めて視線を紅林に向けた。

「……」苦労様、よくこの短時間で纏めてくれました。早速報告をお願いします」

「勿体なき御言葉。ではご報告申し上げます。司波龍郎の精子提供は手筈通り、司波夫妻両名が異動後すぐに行う事となりました。FLT社、社長にも三日以内に異動を完了せよと通達いたしました。司波龍郎との契約書もここに」

そう言つて紅林は龍郎がサインした契約書を手渡す。

「ありがとう、それで実際に会つてみて司波龍郎の印象はどうだったかしら？ 此処に書かれてある規約に支障はありそう？」

深夜は確認の意味を込めて紅林に龍郎の実際の印象を聞いてみた。

「こう申してはお気を悪くなさるかもしれませんが……」

紅林にしては随分歯切れが悪かった。それを見かねて深夜が続きを促す。

「遠慮は要りませんよ、貴方が実際に会つて感じた事を正直に言つても構いません」

深夜の言葉に覚悟を決めた紅林は遠慮気味の口調で続きを話し出した。

「では……率直に申し上げます、深夜様が拘る理由が特に感じられる相手ではなかったかと。魔法力も平凡な上に、それ以外の度量も特質した所は見当たりませんでしたし、印象としても小物という域でございました。いくら調整技術を用いると言つても、

あの者では役者不足かと。規約に関しても、妻の司波小百合には夫婦揃つての突然の異動を説明する為に話すと予想します」

紅林はバツサリ龍郎を切り捨てた。

「確かに想子保有量の多さを除けば、特質すべき相手ではないのも確かだね。けれど、私の現状で選考出来る中ではマシだったの。それに今回は想子保有量の多さを除く因子は全て排除して、なるべく私の因子を残しつつ完璧な配列にして見せます。だからあのぐらゐの男で問題ないわ。交渉の事も司馬小百合に話してしまうのは想定済みです。ですが対外に口外する事はないかと判断しました。あのようなタイプの人間は人一倍保身に気を使うものです。自らの立場を危険に晒してまで口外する事はないでしょう」

深夜がそう告げると、深夜様が問題ないと判断したなら結構です、と紅林は一礼して、桜井穂波スカウトの為に退室した。三日後、FLTを通して司波夫婦の異動が完了したとの知らせを受けて、翌日に龍郎の精子を採集してこの任務は終了した。

この三日間で、紅林は桜井穂波をスカウトすべく動いている。桜井穂波の周辺を調査、出向く日時を考えていた。

私の名前は桜井穂波、歳は二十四才独身。国立魔法大学を卒業後、警察省公安庁に入官して二年目。障壁魔法の能力を評価され、二十四才にして要人を護衛するSPにも選出された。高校二年の春休み、「アジア系の犯罪組織」によって両親は殺された。犯人は

まだ捕まっていない処か特定にすら至っていない。両親はそんなに強力な魔法は行使出来ない、所謂一般人に近い存在であったが、私は突然変異なのかそんな両親からは想像も出来ないほどの資質を有している。単一の障壁魔法だが、その強度は【多重障壁^{フアラシク}】と【単一障壁】という違いはあるが、同じ障壁魔法を得意とする十師族の十文字家の直系と言っても遜色ないほど。両親が亡くなった後は母方の祖母が育ててくれたが、その祖母も今年の二月に亡くなってしまふ。身寄りが誰も居なくなってしまった私は、言い知れぬ孤独感に日々苛まれていた。そんな時、私の前に三十代の身なりの整った男性が訪ねて来る。声を掛けたその男性は名を紅林と名乗る。大事な用件があるから都合が良い日時を教えて欲しいそう。丁寧な口調に凜とした佇まい、どこか迫力のある瞳、ただの男性ではないと思った。偶々、仕事は丁度終わり帰宅するだけだったので話を聞く事にする。紅林と名乗る男性に案内された高級料亭。こじんまりとしているが格式高い様は明らかだ。中居さんに個室に案内され、一通り品が並ぶ。

そこで漸く、紅林は話に入った。

「本日は急な挨拶にもかかわらず、お時間を頂きありがとうございます」

「いえ、確かに少し驚きましたが、私の方も予定はなかったものですから急ぎの用なら早い方が良いと思ひます」

「多大なお心遣い感謝申し上げます。それでは早速、本題に入りたいのですがその前に、

これからご提案させて頂くことは内密にお願い申し上げます」

紅林の目付きが急に鋭くなったような気がした。一瞬にして警戒レベルを引き上げて、私は無言で頷いた。

「それでは申し上げます。私はある御方から桜井穂波殿のスカウトを仰せつかつて参りました。その御方は桜井穂波殿の能力、経験、人柄を大変高く評価しております。ここで専属の護衛として向かえ入れ、桜井穂波殿が望まれるのであれば、養子縁組にて家族として迎え入れたいと仰っております」

男性の身なりから何処かの執事だと予想出来ていた為、スカウトの件については予想出来ていた。だから断るなら早い方が良いと思ひ話を聞く事にした。しかし養子縁組は穂波の予想を超えていた。何故、自分なのかという疑問が浮かんだ穂波は一応理由を聞いてみる。

「理由につきましては、ご本人から話をすると承っております。本日はその前段階の場だと解釈して下さい。急な話で穂波殿も思う事は多々ございましょう。ですので、後日改めてお時間を頂きたいのです」

「因みにそのお方の名前を教えて頂く事は出来るのでしょうか？」

「……最初に申し上げた通りご内密にお願い致します。その御方は四葉深夜様に御座います」

!!? 想像もしてなかったビックネームに穂波は固まってしまふ。日本魔法師界の頂点である十師族の中でも最強にして最凶と呼ばれている四葉家、世間からは大漢を崩壊させたその一族は「^ア触れては^ンなら^{タツ}ない者^{チャ}たち^ル」と呼ばれる畏怖の象徴。殆ど、表舞台に出てこない謎に包まれた一族。その中でも大漢崩壊の引き金になった四葉家現当主四葉真夜と双子の姉の四葉深夜、「世界最強の魔法師」の一人と共に評される最凶の姉妹。そんな大物の人物からのスカウトに穂波は暫く放心状態になる。その後、後日約束を取り付けられ、黒塗りの高級車で自宅まで送迎して貰った。自宅前で高級車を停めて紅林は「本日は急なお願いにお付き合ひ頂きまして、誠にありがとうございます。では、後日改めて四葉深夜様とお伺いさせて頂きます」

紅林は高級車に乗り込み去って行く。未だ信じられない穂波は何とか自身の部屋にたどり着いた。ベットに身を投げ出して深い溜め息を漏らし、漸く肩の力が抜ける。

四葉深夜の名を聞いた瞬間から、底知れぬプレッシャーに疲労感がドツと押し寄せて来た。

風呂にも入る気が起こらず、結局着替えだけしてその日は寝る事にした。

深夜の懐妊く穂波の決断

深夜の計画は最終段階に着ている。司波龍郎の精子を入手後、確認を繰り返しつつに決行は明日に迫っている。深夜は緊張と不安から二人に逢いたくなくなって、達也の為に屋敷の奥に作られた一室にいる真夜と達也のもとを訪れる。真夜は達也に母乳を与えていた。愛しい息子に露になったその豊満な乳房の先端をくわえさせて、優しい笑みを浮かべていた。後でまた来ようと引き返しかけた深夜に気付き、真夜は声を掛けて傍に来るように促す。生後二週間とは思えない程、勢いよく乳を貪る姿を見て成長の早さに驚きながらも、産まれてから深夜にとつても、かけがえのない存在になった達也を見ながら、自身の母性も刺激され必ずや計画を成功させて母親になると改めて決意した。

「真夜：明日必ず成功させて、私も母親になるわ」

姉、深夜の決意に

「姉さんが決めたのなら、私も全力でサポートするわ。明日は必ず成功させましょう」

真夜はニツコリと微笑んだ。

妹として、一人の母親として、真夜は深夜の意志を尊重して支える決意を固める。

翌日、達也をメイド長の白川に預けて深夜と真夜は魔法師調整施設に来ていた。準備が整い、警戒体制を万全にして極秘に計画が開始された。まずは深夜が研究していた技術と四葉で培って来た技術を駆使しながら、司波龍郎の精子の遺伝子を改変させた。次に予め用意していた深夜の卵子と受精させる。受精したのを確認して改めて余計な因子が作用しないよう遺伝子を独自に編み出した構造干渉魔法を併用しながら組み換えて行く。深夜の額に汗が浮かび、その行為がどれだけ困難であるかを物語っている。三時間後、漸く深夜が魔法を解き、魔法の連続行使の疲労と精神的疲労によって膝から崩れ落ちる。

「姉さん!!」

真夜が咄嗟に崩れる深夜を支えた。深夜は極度の疲労から意識を手離している。直ぐに傍に用意してあった分娩椅子に座らせ、女性研究員の手によって受精卵は深夜の子宮に納められた。

意識を取り戻した深夜は失敗したと思い、寝かせられていた個室のベットから飛び起きた。傍で真夜が椅子に座って達也を抱きながらビククリしていた。そんな真夜の様子などに気が廻らない深夜は真夜を問い詰める事になってしまう。

「真夜!! 私、失敗しちゃった...」

余程混乱しているのか、いつもより口調も幼くなっていた。

「大丈夫よ、姉さん、少し落ち着きなさい…… そんなに大声上げると達也がビックリしてしまうわ」

真夜は深夜を落ち着かせる為に少し強めの口調で言い放った。

「でもっ……」

可愛い甥の達也を驚かせるような大声を出してしまった事に自責しながらも、失敗したという事がショックでどうして良いのか分からない。

「安心して姉さん、姉さんはしつかりやり遂げた。【魔法の連続行使の疲労】と精神的疲労から調整が終わった瞬間に倒れたのよ。その後は研究員が姉さんのお腹に納めたわ…… 成功よ、おめでとう姉さん！」

真夜は深夜を安心させるかのように優しく説明して計画の成功を祝福した。深夜は真夜の言葉が一瞬理解出来なかったが、真夜の優しい笑みと祝福の言葉で漸く成功した事を実感し、安堵の涙を流した。そんな深夜の姿を見て真夜も深夜の懐妊の歓びを改めて噛み締めていた。数日疲労回復の為に静養し、無事に妊娠している事を確認した深夜は、浮かれる気持ちを抑えて、もう一つの計画を完遂する為に栗林と共に穂波との会談の場に向かっていた。

栗林との会食で深夜からの面会を受けてから穂波は悩んでいた。身寄りのない穂波

にとつて、家族は孤独に苛まれてゐる現状から抜け出せる機会ではある。が、穂波も24才の大人の女性……結婚すれば家族は作れるし仕事もこれといつて不満もない。退職する理由がない穂波だった。

、何故か胸に突つかかるものがある。それはあの日栗林という執事が口にした、理由は深夜自身が話すという言葉……謎の一族の中でも直系の中心人物の一人が、外部の、それも一介の魔法師に過ぎない自分を態々スカウトする理由。それに養子縁組の件、穂波の生い立ちを当然知ってるからこそその提案だと推測出来た。深夜がどうして自分に興味を持っているのか率直に氣になつていた。そうこう考へている内に約束の日が訪れる。場所は前回と同様、普段なら決して来る事が出来ない会員制のフランスレストラン。早めに到着した穂波はウェイターに個室に通された。三十分程一人で待つていた穂波のもとにオーナーらしき男性に先導された深夜が姿を表した。その美貌はこの世の者とは思えないほど美しい。流れるような漆黒の髪、どんな事も見透かされそうな髪と同様の漆黒な瞳に、真っ赤な口紅。豊満な胸に折れそうなほど細い腰に長い手足。黒のドレスに身を包み、胸元のダイヤのネックレスが一層上品な雰囲気を出していた。強烈な美貌に思わず畏怖さえ感じてしまう。それほどの美しさだった。呆氣にとられてゐる穂波に対して、席の傍まで近づいて深夜は上品に一礼した。

「ご機嫌いかがですか？初めまして四葉深夜です。本日はお越しくださり御礼申し上げます

ます」

深夜の挨拶で現実に復帰した穂波は立ち上がり自己紹介した。

「こ、こちらこそ、お招き頂きまして光栄に存じます。桜井穂波です」

穂波が挨拶すると深夜は微笑んで、オーナーらしき男性が引いた椅子に掛けた。

「そんなに緊張なさる必要はありませんよ、まずは食事を頂きましょう。良ければお酒を用意させましょうか？」

「いえ、余りの美しさに圧倒されてしまいました。お酒は今日は遠慮させていただきます」

「あら、ありがとう。でも穂波さんも充分お綺麗よ。さぞ素敵な殿方からの御誘いも多いのでしよう？」

「私など全然ー」

「あら？随分と謙虚なのね、それとも世の殿方の見る目がないのかしら？」

深夜はそう言ってクスクスと小笑する。その後談笑しながら料理を食べたが、味はほとんど分からなかった。食事も終わり二人きりになると深夜が改めて切り出す。

「食事も済んだ事ですし、そろそろお呼びした案件についてお話させて頂きます」

遂に来たか！と穂波も今一度、背筋を伸ばして臨戦態勢に入る。

「桜井穂波さん、貴女をスカウトしたい件と養子縁組の件について栗林から聞いている

と思いますから、今日はその理由とメリツトをお話したいと思います」

「ハイ、宜しくお願い致します」

「私は、貴女の両親が【無頭竜】^{ノイヘットドラゴン}の一味に殺害された時から貴女には興味を持っていました。本当はその時に、今回のように養子縁組の件を申し出たかたのですが、後見人には貴女の祖母がおられましたので自粛しました。しかしそのお婆様がお亡くなりになられたので今回改めて申し出る事にしたのです」

穂波にとつて、そんな前から目を付けられていた事よりも、警察も内情も特定には至っていないはずの犯人が深夜の口から出てきた事に驚いていた。

「どうしてですか!!?警察も内情も犯人の特定は出来てないはずなのに:。」

「我々は四葉家です。これ以上の説明が必要ですか?それより貴女は事件の後、しばらく組織に狙われていたんですよ。我々、四葉家の者が影から護衛はしてましたけど:。」
驚愕の告白に穂波は驚愕する。確かに事件後、稀に誰かに監視されているような視線を感じた事がある。四葉家の者が護衛していたとは:。」

「何故その時に教えて下さらなかつたのですか?そしたら両親の仇を取れたのに:。」

「それは無理でしたね。当時の貴女では振り返ちにあつておしまいでしたよ、自分でも理解出来たはずですよ。それに貴女にはまだ祖母がいたでしょう?振り返ちにあつて悲しむのはお婆様ですよ?」

感情が爆発しそうな穂波を、深夜は幼い子供をあやすように優しく語りかける。穂波は深夜の正論にまだ釈然としない様子だったが、最大の疑問をぶつけた。

「……それで犯人はまだ生きているんでしょうか？」

穂波は意を決して尋ねた。

「生きています。そのグループは四葉が壊滅しましたが、主犯の男は捕らえてあります」
深夜の言葉に穂波は素直に驚いた。

「何故、教えて下さらなかつた犯人を四葉が身柄を押さえているのでしょうか？」

「愚問ですね、我々は見ず知らずの高校生の復讐に手を貸すほどお人好しではありません。グループを潰したのは、「大陸」の犯罪組織を日本国内で好き勝手させる訳にはいかないからです。主犯を押さえているのは背後にいる者の情報を聞き出す為です」

「真つ当な理由に穂波は何も言えなかつた……同時にいつか両親の仇を討つと決めた穂波はこれまでの人生が無駄になつたような気がした。

「穂波さん……両親の仇を討ちたいですか？私の護衛を引き受けてくれたら、その男は貴女の好きにして構いませんよ。我々四葉家は身内に危害を加える者には容赦しません。それは貴女もご存じでしょう？」

当然、両親の仇を討つのは穂波にとつて一つのケジメだった。警察に勤めていては立場的に復讐は果たせない。それでも少しでも情報を得る為に警察官になつた。そして

深夜の護衛を引き受けなければそれが果たせる。しかし二度と表の世界では生きられないような気がした。穂波にとつてそれは悪魔の取引。

「そんなに難しく考える事はありません。当時は貴女が見ず知らずの高校生という立場だったから私は手を貸さなかつたのです。しかし今は立派な魔法師。私は貴女有能力、人柄、経験を評価してます。魔法師として生きていく以上は、愛する者を守る為、自分の信念を守る為、人を殺める選択を迫られる事もあるでしょう。だからといって、世界から弾き出されるといふ事では決してありません。貴女が本当の意味でケジメをつけて、これからの人生を歩んで行きたい願うなら、私が力を貸しましょう」

深夜は穂波の全てを見透かしているかのように穂波に告げる。しかし、その表情は彼女自身も何か決断したかのような顔をしていた。そんな深夜を見てこの人の傍でなら迷わず、自分自身を見失わずに人生を歩んで行けそんな気がした。そう思った瞬間、穂波は胸の突っかかりは綺麗に取れたような気がした。

「ハイ、深夜様に仕えさせて頂きます」

穂波が決心すると、深夜が穂波の手を包み込み、慈愛の顔を向けた。

深夜の告白／穂波の涙

穂波が深夜の申し入れを受けた頃、真夜は達也の寝顔を見ながら幸せを噛み締めていた。

達也のお披露目が二週間後に迫り多忙の毎日を過ごしているが、達也との時間が真夜の疲れを吹き飛ばしてくれる癒しだ。誰にもこの幸せを邪魔させはしなれないと思いつながら、暫くスヤスヤと眠る達也を見て、真夜は残った仕事を片付ける為達也をメイド長の白川に任せて書齋に戻った。

穂波が深夜の申し入れを受けて深夜が言葉を発した。

「それでは、此れからは穂波さんと呼ばせて頂きますね。穂波さん、養子縁組をして私と家族になる気がありますか？」

深夜は穂波に希望を聞いた。

「家族というのは、深夜様が母親になられるという事ですか？年は5つ、6つしか変わりませんが？」

穂波が疑問を問うと

「そうです。そうなれば穂波さんには母親と妹が同時に出来る事になります。私も一
気に二人の子供の母親になれるのは嬉しいわ」

深夜は穂波に衝撃な発言をした。

「えっ?… 深夜様は確か独身であられたはずでは。私の他にも養女がいらつしやる
のですか?」

穂波は聞いて良いか迷ったが、思い切つて聞いてみる。

「いいえ、養女として迎えるのは穂波さん一人です。これは四葉内でもごく一部しかま
だ知らない事ですが。私は今妊娠しています。といつても結婚はしてませんし、つい
この間身籠つたばかりですけど」

深夜はイタズラが成功した子供のようにクスッと笑う。

色々と突つ込みたい気分の穂波は、何かとんでもない事をサラッと聞いてしまったよ
うな気がした。同時に四葉のごく一部しかまだ知らない事、身籠つたばかりと言つたの
に既に女の子と解っているような口振りに違和感を感じる。しかし自分から踏み込ん
で良い問題ではないと判断した。

本当にあの四葉家の身内になるのかと少しズレた事を冷静に実感していた穂波。し
かしすぐに、本題の養子縁組の件に意識を集中する事にする。護衛の件は両親の仇を討

つべく、またケジメをつけ、その後の人生を歩んでいく為にも引き受けたが、養子縁組となるとやはり別次元の抵抗がある。相手は四葉…それも直系の四葉深夜なのだから。考えが纏まらない穂波を見兼ねて、深夜がゆつくりと語り出した。

「穂波さん…私と双子の妹の真夜がどうして結婚していないか分かりますか？」

唐突過ぎる質問に穂波は分かりませんと答えた。

「四葉は十師族、日本魔法師界の頂点に存在する家です。その為、様々な恩恵や優遇も確かに存在します。しかし同時に責務も他の師補十八家、百家とその支流の方々より重いのです」

穂波は無言で頷いた。

「その責務の一つが結婚です。十師族は師補十八家、百家、支流の方々よりも相手を選べず、次の世代に優秀な子孫を残す為と、家の発展の為に「政略結婚」が求められます。それが実情です。そんな現状で十師族の四葉の者である私と妹が結婚していない理由はただ一つです。それは私達が、一人の少年に出会ったからです」

穂波は予想外の答えに言葉が出なかつた。

「穂波さんも知つての通り、四葉家が【ア触ンれてはタツならない者チャたちプ】ルそう呼ばれる原因…妹が大漢に誘拐された事件。あの事件で真夜が恥辱に晒される事もなく、そして人体実

験を防げたのも、真夜を救い出した一人の「留学生の少年」のお陰です」

後に一国の崩壊に繋がった事件の内幕を唐突に聞かされた穂波は、完全に思考が停止してしまふ。それでも深夜は真つ直ぐに穂波を見据えて話を続ける。

「そんな彼に妹は恋心を抱きました。いえ、本当はそれ以前から抱いていたわ。それでも妹は私達の父、当時四葉家の当主だった四葉元造が決めた婚約者がいた為、自分の恋心に蓋をしていましたが、あの事件をキツカケにして妹は吹っ切れました。家を捨てても彼と一緒にになりたいと……当主の元造に向かつてハッキリとそう言いました。細かい事は沢山ありましたが、結局父も妹の意志を尊重する形で婚約は破棄しました。真夜が当主になってからは自分で選んだ相手でなければ結婚はさせていません。十師族としての責務も大事な事ですが、今の私と妹にとっては愛こそが最優先です。だから穂波さん、安心して私の娘になりなさい」

深夜は慈愛の笑みを浮かべて一言、一言が穂波の心に響くように言葉を紡いだ。

穂波は深夜の何らかの意志の籠った瞳から目が離せなかった。暫く、見つめ合う穂波と深夜だったが、急に穂波の視界が歪んだ。頬を触ると涙が流れていた。深夜はバッグから花柄のハンカチを取り出して席を立つと、穂波の傍まで来て流れる涙を拭いて優しく抱きしめた。その温もりに何故か懐かしさを感じて穂波は号泣した。深夜は自分の胸で号泣する穂波を、左手で抱きしめながら右手で頭を撫でる。

「泣いていいのよ、今まで一人で色んな感情を抱え込んで来たでしょう。自身の感情に押し潰され続けて疲れたのね。これからは貴女は一人じゃないわ、私がいる。それに養女となれば貴女にとつて義妹いもうとになる子もついてるわ。同時に貴女にもこの子を守つて欲しい。姉として産まれて来るこの子の助けになつてくれない？」

深夜がそう言うと、穂波は深夜の腕の中で号泣しながら無言で何度も頷いた。

「ありがとう穂波さん、優しい長女が出来て、私もこの子も幸せです」

深夜の発言に号泣している事が、急に恥ずかしくなつた穂波の意識は少しずつ正常に働き出した。少しずつ冷静になつていく思考、自分は大変な粗相をしてしまつたと穂波は後悔した。

【忘却レテ・ミスの川の支配者トレス】と恐れられる四葉深夜に抱きつきながら、24才にもなつてあやしてもらつたなど、聞く人によつて卒倒することだろう。穂波は話を聞く前よりも気まずい雰囲気を感じた。

「申し訳ありません。お見苦しい所をお見せしてしまつたばかりか、高価なドレスも汚してしまひ。」

穂波が申し訳なさそうに謝罪すると、

「そんな事は気にしなくて良いですよ。それよりも畏まつた口調の方が気になるわ。号泣している時は大きな子供みたいで可愛かつたのに」

深夜はクスクスと笑う。

「そつ、それは：それだけは忘れて下さい」

穂波は恥ずかしそうに俯いてしまう。

「それでは改めて：桜井穂波さん、私の娘になってくれますか？」

真つ直ぐに穂波を見る深夜

「ハイ、こちらこそ、宜しくお願ひします」

穂波が返事を返すと二人は笑い合つた。

「では、正式な手続きは此方で進めておきます。書類はこの後栗林に用意させます」

「宜しくお願ひします」

穂波が改めて返事を返すと、深夜が突然真剣な顔になる。

「穂波さん：今日はもう遅いので詳しい話はまた後日お話するけど、これから四葉は荒れるかもしれません。場合によつては最悪な事も想定されます。貴女も無関係では居られませんので覚悟して四葉に来て下さい」

急に真剣な表情で物騒な話を展開した深夜に、一瞬、心臓が高鳴つた穂波だが

【^ア触れてはならない者たち^ブ】の一員になる覚悟を決めた穂波は、深夜の目を真つ直ぐに見つめ返して一言ハイ、と返事をする。

その後、執事の栗林が表れて養子縁組の書類にサインをしてこの日はお開きになつ

た。

真夜の告白～決戦に必要なピース

穂波との会食を終えて深夜は、ホテルにチェックインしていた。この時間から本邸に帰るとなれば夜中になってしまう。紅葉を入れてもらって一息入れてから深夜は電話を掛ける。

「遅くにございませぬ。もう寝る所だったかしら？」

電話の相手に語りかけた。

「こんばんわ姉さん、仕事が一段落して一息入れていた所だから大丈夫よ」

「なら良かったわ、取り合えず穂波さんの勧誘は無事終わったわ。養子縁組の件も承諾してもらって、近いうちに正式に娘として迎えようと思うわ」

深夜は今日の会食でのやり取りを簡単に真夜に報告した。真夜も交渉がどうなるか気になっているのが分かってる。

「そう、安心したわ。彼女は優秀ですから…。それに可愛いですものね」

真夜は年甲斐もなく少し拗ねたように言う。そんな真夜が深夜は可笑しかった。

「何で笑ってるの？姉さん…」

真夜は深夜の失笑する姿を見て、不機嫌そうに問う。

「ふふ、ご免なさい、少し可笑しくて…。いい歳して拗ねてるみたいだから。安心しなさい。私にとって可愛い妹は真夜だけよ」

深夜は真夜の心中を見透かしたように言い放つ。真夜はシスコンなのだ、真夜は自身の心中を見透かされて、珍しくビクツと跳ねた。

「別にツ、そういう事を言ってるじゃありません!」

真夜は少し顔を赤らめて深夜を睨んだ。

「そうなの? 真夜ちゃんはお姉ちゃんの事好きじゃないの?」

深夜はクスクスと笑いながら真夜を弄る。そう言う深夜に真夜は小さい声で、

「…好き」

顔を真っ赤にして恥じらいながらそう呟く真夜は、本当に少女のように可愛らしく、何をするにも自身の後をついて来る幼き日の真夜の姿に…。深夜には写った。

「… 本当に可愛い子ね」

自然と口から零れた。そんな深夜に対して真夜は

「もう!!? 姉さん浮かれ過ぎよ。そんなに彼女を娘に出来た事が嬉しかったの? 歳だってそんなに変わらないのに」

「だって、拗ねた真夜があまりにも可愛かったものだから…。彼女を娘に出来た事は本当に嬉しいわ。彼女が高校生の時から知ってるから感慨深いものがあるのは確かね」

「それにしたって浮かれ過ぎよ。：。ところで姉さん、彼女はいつから正式に娘にするつもり？」

正直、今のタイミングはあまり良いとは言えないと思うけど？」

真夜は達也のお披露目会の事を指している。

「そうね、達也のお披露目会には彼女も同席させようと考えてるわ。：。穂波さんには、これから四葉は荒れるかもしれない事は伝えたわ。詳しい話はまだ出来てないけど、話して穂波さんにも協力して貰おうと思います」

「そう。：。一応は覚悟を見たのね？なら穂波さんには私から話します。一度、本邸に来てもらって下さいいな」

そんな事を話していると

「おぎゃー、おぎゃー」

微かに達也の泣き声が扉の奥から聴こえて来る。

「あら？起こしちゃったかしら」

深夜が申し訳なさそうに聞くと

「多分違うわ、大丈夫よ姉さん、お腹が空いたんだと思うわ。もう凄い食欲なんだから」

何故か誇らしく言う真夜に

「本当よね、日に日に大きくなってるのが実感出来るぐらいだものね」

深夜も感心したように返す。

「それじゃあ悪いけど達也の所に行つてくるわ。そろそろ白川さんも休んでもらわれないとならないし。姉さんも身籠つてる大事な身体なんだから、身体には気をつけてよね。」
真夜は最後にそう付け加えて電話を切断してしまつた。すつかり母親になつた妹を思いながら、自身のお腹を優しく触りお腹の子に語りかける。

「私も立派な母親になる為に準備してるから、安心して産まれて来てね」

深夜との電話を切つて急いで達也のもとへ駆けつける真夜。そこには空腹で泣き声を上げる達也を、優しく抱っこしてあやしている最近メイド長になつた白川の姿がある。白川にはメイド長の肩書きがあるが、真夜が直々に達也の世話役をお願いした。他、腹心のメイドが二人、補佐をしながら、真夜が当主としての時間を確保出来るようにサポートしている。

「お待たせしました、白川さん。今日はもうお休み頂いて結構ですよ。遅くまでありがとうございました」

真夜が達也を受け取つて白川に告げるが、

「私はまだ大丈夫で御座います、お心遣い感謝致します。御当主様、執務がお済みでしたら達也様の授乳後に、ごゆっくりお風呂に入られては如何ですか？疲れも取れる事かと

思います」

白川が真夜に提案すると、真夜は迷ったが白川の好意に甘える事にした。真夜は出来る限り、達也と一緒に時間を過ごしたいと考えている。それはもちろん達也を溺愛するという理由も大きな理由だが、三つ子の魂百まで、精神は魔法師にとつて重要なファクターだと真夜は考えている。それは精神が無意識領域にある魔法演算領域に何らかの影響を与えていると推測しているからだ。自我が芽生える幼少期は特にその影響が大きいと真夜は結論を出し、出来るだけ一緒に過ごして成長を見届けたい気持ちが強かった。だからこそ本当は片時も離れたくない。当主としての執務や、分家から達也を守る為の準備など、葉山達がサポートしているが、気を休める時間がほとんど無くなっているのは事実だった。

「：：：そうですね、それでは一時間ほどで戻ります。お疲れでしょうが宜しくお願いますね」

そう言つて真夜はゆっくり風呂で疲れを取ることにした。

深夜と会食した翌日、穂波は自身が勤めている公安局にいた。四葉家の一員になる覚悟を決めた穂波は、辞職の意思を伝える為に上司のもとへ訪れている。

いきなりの話に上司は戸惑った。得意とする障壁魔法だけではなく警察官としても

優秀な彼女が抜けるのは組織としても痛手だ。理由を聞いても一身上の都合としか答ええない彼女に困りながらも、何とか思い留まるように説得した。……が、穂波の意思は固く辞職の意思を変える事は出来ないまま穂波は部屋を出ていってしまふ。

昨日の時点で、深夜の連絡先を入手していた穂波は、仕事が終わってから深夜に電話で報告する事にした。

「あら、穂波さんこんばんわ、早速電話してくれて嬉しいわ」

深夜が画面の向こう側で嬉しそうな顔で微笑んだ。電話をかける事に緊張していた穂波は少しだけ緊張が緩んだ。

「突然のお電話失礼致します、深夜様。本日辞職したいと上司に伝えて参りました。正式な返事はまだですが、一応ご報告だけでもと思ひまして……」

未だ硬い言葉使いの穂波の様子を見て、

「少しぐらい世間話に付き合ってくれても良いんじゃない？それに深夜様なんてそんな畏まる必要はありません。貴女は私の娘になるのだから。まあ……その辺は追々という所ね。早速伝えてくれたのね。ご免なさいね、急かす形になってしまつて……」

最初は少し拗ねた様子だったが、辞職を急かす形になつてしまつた事に少なからず自責していた深夜は、最後は申し訳なきさそう顔になつた。

「申し訳ありません。まだ自分自身信じられなくて、言葉使いも暫くは……容赦下さい。

話を受けたのは、私ですから深夜様はお気になさらないで下さい」

「ありがとう穂波さん、そういえば穂波さんに一つ伝える事があるわ。これから四葉は荒れるかもしれない事は伝えましたが、詳しい話はまだですね。そこで詳細をお話する時間を作って欲しいの。明日はお休みかしら？」

穂波が休みだと伝えると

「良かった。悪いけど明日は此方に来てくれないかしら？ 迎えは十時に自宅に手配するわ」

それを穂波が承諾すると、微笑んだ深夜は楽しみにしていると行って電話は切れた。

翌日、時間に栗林が黒塗りの高級車で出迎えに来てくれた。

「おはよう御座います。穂波様」

栗林がそう言つて一礼した。初めて会った時より更に畏まった栗林を見て穂波は居心地が悪かった。

「おはよう御座います。栗林さん、今日は宜しくお願ひします。それとそんなに畏まった態度は困ります。普通に接して下さい」

穂波が栗林にそう言うのと、ニッコリ笑つてドアを開けてくれた。暫く走っていると、「私、四葉の所在地なんて全然知りませんがどのくらい掛かるんですか？」

「四葉本邸の正確な所在地を知っている方は殆んどおりません…。それに村全体に何重

もの認識阻害や特種な結界を張っている為に、勝手に侵入する事も不可能です。時間には此方からですと昼過ぎになるかと思われます」

流石は謎の一族四葉家だ、十師族の一員でありながら殆んど表舞台には情報もない。徹底した秘密主義の一族にして最凶の一族。そんな一族でこれから何が起ころうとしているのか、正直穂波は不安だ。穂波を乗せた車は、人里離れて更に山道に入って行く。途中、何度か栗林が特種な想子を打つ。暫く進んでトンネルで再び想子を打つと、急に開けた景色が穂波の目に飛び込んで来た。穂波はさっきのが結界のカギなんだと漸く理解する。車が止まるとそこには日本家柰があった。車から降りると嫌な空気を感じた。僅かにする「死臭」に殺伐とした空気。穂波は冷や汗が止まらなかつた。強烈な死のイメージが全身の毛穴を刺激する。栗林に促されて敷地に足を踏み入れ、ここが四葉家かと、若干来たことを後悔していた穂波は、メイドに出迎えられて、その横にいる一人の白髪の男性に声を掛けられた。

「お初にお目に掛かります、桜井穂波様。私、四葉家筆頭執事を勤めます葉山と申します。本日は遠い所を御足労頂きまして誠にありがとうございます。お昼の準備が出来ますので此方へどうぞ」

葉山に先導された屋敷内は、外観とは違って年代物の家具や装飾品アンティークで飾られていた。そんな屋敷内を進んで行き、一室に通された。そこは長テーブルがある一度に十人以上

が食事出来る部屋だった。

「それでは少しお待ち下さい」

そう一礼して葉山が出て行き、十分ほどして扉が開く。そこには義母ははになる深夜と瓜二つの顔をした女性が佇んでいた。四葉家当主、四葉真夜だ。穂波は二人を目にした瞬間、立ち上がり身体の向きを変えて一礼した。

「お初にお目に掛かります、四葉真夜様。本日はお招き頂きまして御礼申し上げます。私、桜井穂波という者です。深夜様もお招きありがとうございます」

「此方こそ初めまして、四葉家当主、四葉真夜です。今日はお越しくださりありがとうございます。先ずは食事を頂きましょう」

真夜の声に被せるように深夜が言葉を発した。

「あら穂波さん、私は真夜のついでみたいじゃない？母親に対して随分と冷たいんじゃないっ？」

「そのような事は決して…」

穂波が深夜の発言にあたふたしていると、

「姉さん、意地悪な言い方しないの！穂波さんが困ってるじゃないの。意地悪してないでさっさと席に着きなさい」

深夜にこんな発言が出来る人物はそうそういないだろう。出てきた料理は一流レス

トランにも劣らないものばかり。緊張していた穂波だったが、美味しい料理を楽しむ程度の穏やかな空気が、この時はまだ流れていた。食後に紅茶を頂きながら食事の余韻に浸っていた穂波だったが、真夜の一言から空気が一変する。

「食事も済んだ事ですし本題に入らせて頂きますね。初めに穂波さん、姉さんの娘になる事を承諾してくれてありがとうございます。姉さんから聞いたと思うけど、貴女の事は以前から気にしていたみたいだから、姉さんは貴女が思っている以上に喜んでるわ」

「此方こそお礼申し上げます。深夜様のお言葉には救われましたので……それに私自身もそんな深夜様の養女むすめにして頂ける事は光栄な事です、護衛の件も含めて全身全霊で応えたいと思います」

「ありがとうございます、そう言つて貰えると助かるわ。これから四葉は私の計画のせいで姉さんまで巻き込んでしまうから、穂波さんが味方になってくれて心強いわ」

「真夜：： 貴女のせいとかではないわ。私は私自身の意思で貴女達を守ると決めたんだから」

「姉さん：： 本当にありがとうございます。頼りにしてるわ」

目の前で行われている双子の話についていけない穂波は、恐る恐る聞いてみる事にした。

「あの、本日はその計画の事も含めて、話を聞かせて頂けるといふ事で宜しいんでしょう

か？」

「ええ、その通りです。理解が早くて助かるわ。穂波さんは、姉さんが妊娠している事は知ってるわよね？」

穂波は無言で頷く。

「確かに姉さんは妊娠してます。それは姉さんが子供を欲しくなったからですが、順番が違います。正しくは妊娠している私を見て、徐々に姉さんの母性本能が擦られたという事です」

穂波は真夜が何を言ってるのか理解出来なかった。真夜は四葉家当主で未婚という特殊な立場。真夜はあの事件のせいで男性を全く受け入れられなくなり、当時、婚約していた七草弘一と婚約を解消した過去がある。しかも、前妻に先立たれた弘一が再び、しつこく復縁を迫っていたのは結構有名な話。噂ではそれを断る口実に姉の深夜ではなく、真夜を四葉英作が次期当主に指名したと言われているぐらいだ。次期当主になれば他家に嫁ぐなどあり得ない話だからだ。要はそれぐらい真夜の特異な立場は有名で、キツカケがキツカケだけに七草家を除く、他の十師族、師補十八家などは何も言えなかつたぐらいなのである。そんな真夜が妊娠したとなれば世間は大騒ぎである。穂波がそんな事を考えていると、穂波を他所に真夜は衝撃の真実を告白する。

「いえ、それでも正しい表現ではありませんね。私の妊娠で徐々に母性本能を擦られた

姉さんが、私が出産した息子の達也を見て決意したと云うべきね……」
「えっ!？」

それしか穂波は声を出せなかった。それとほぼ同時に部屋扉が開き、筆頭執事の葉山が赤ん坊を抱いて表れた。まさか、と穂波がそう思った時、真夜は立ち上がり葉山から赤ん坊を受け取ると穂波の前まで来て、

「紹介します。私の息子、四葉達也です」

そこには真夜の腕に抱かれた、白みがつかた銀髪のまだ薄い髪の毛に、可愛らしい顔立ちのどう見ても日本人だけではない血を継いでいる男の子の赤ん坊がいた。何をどう捉えれば良いのか穂波はパニック状態の頭で必死に考えていた。

「驚かれるのも無理はないでしょう。世間の私のイメージは知っていますもの」

そう言いながら達也を抱いたまま真夜は席に戻る。

「……正直混乱しております。失礼ながら本当に真夜様のご子息なのですか?とても神秘的で可愛らしいお子さんですが、どう見ても……」

「達也は真正正銘、私が産んだ子であり私の血を引いています。そして穂波さんの思っているように達也の父親は外国の方です。今日はその事も含めて何故、四葉がこれから荒れる事になるのかをお話しますので、穂波さんも覚悟を決めて聞いて下さい。少し長い話になりますので……」

真夜はそう言って語りだした。それはにわかには信じがたい話。赤ん坊の父親との出会いから「大漢崩壊」に至った事件の真相、そして恥辱されそうな所を助けて貰った事、そしてその少年の家系の事、事件のあとに彼に何が起こったかという事、それから十六年ずっと想い続けていた事、そしてやっと見つけて彼と結ばれた事、彼との間で出来た息子が世界を滅ぼせるだけの力を持つて産まれて来た事。穂波は話を聞きながら号泣していた。真夜の彼に対する一途な愛と執念、漸く実を結んだ愛しい彼との別れ……そんな彼との息子、達也に対する愛情……兎に角涙が止まらなかった。しかしまだ話は終わりではない。寧ろ本題はここからだつた。

「だから私はどんな事をしてでも達也を守るつもりでいます。しかし先程話したように、今は世間に達也を公表する事は出来ないのです。そんな事をすれば確実に彼の両親と同じように、達也が危険に晒されます。それに敵になりえるのは外の世界だけではありません。これから私達は四葉家内でも戦わなくてはいけません」

話を聞いて、確かに公表は決して出来ないと思う。しかし四葉家内でもというのとはどういう事なのか、穂波にはまだ理解出来ない。

「四葉家には七つの分家が存在します。そして各分家に当主が存在し、それぞれの役割があります」

穂波は今日何度目か分からない衝撃を受けた。しかし感覚が麻痺しているのか其ほ

ど取り乱す事はなかった。

「分家の方々は彼の家系を知りません。そして彼の息子を私が産んだ事もまだ知りません。知ってしまったえば先程話した事が四葉家内で起きる可能性が少なくないからです。しかし、今のままでは何れ問題が起きた時に後手に回ってしまいます。先代当主の四葉英作は四葉家内での内乱を避ける為に、達也出生の真相と彼の家系を明かして説得する事で分裂を防ごうと考えていますが、そんなに上手く話が進むとは私は考えていません。そこで私は、英作伯父様の思惑を利用してある計画を今まで進めて来ました。達也のお披露目会まであと二週間もありませんが準備は整いつつあります。そこで分家の方々が達也を危険に晒そうとした時に備えて穂波さんにも協力をお願いしたいのです。達也を守る為に……」

十師族の中でも突出していると云われる四葉家が内乱となれば、その影響はただの家芸騒動では済まないのは明白。しかし、真夜の目は覚悟なんて云う言葉は生温いほどの炎が燃えているように見えた。

「正直、私ではお役に立てる事など殆んどないように思えますが、精一杯尽力させて頂きます」

穂波も改めて覚悟決めて誓った。真夜の話聞いて穂波自身も達也を守らなきやという謎の責任感が生まれていた。しかし穂波自身も何故なのか理由は分からないので

ある。

「ありがとう穂波さん、それでは計画をお話しします。ーーーーー以上が計画になります。穂波さんにも当日出席してもらい、姉さんの養女^{むすめ}として紹介します。もし分家が行動を起こすような事になれば、その時は全力で姉さんと達也を守って下さい」

話を聞き終えた穂波は、その場を想像して鳥肌が治まらなかつた。昨日までの生活が蜃気楼のように感じる。真夜の話を聞くとまるで樂園だったとさえ思える。しかし、もう後戻りは出来ない所まで自分は来てしまったと妙に冴えてる頭で冷静に判断した。

英作の失態く真夜の揺るぎない覚悟

穂波が四葉本邸で真夜達と会食して達也の存在と真夜達の計画を知ってから一週間後、正式に退職の話が纏まった。急な退職話にも係わらず上から許可が出る。実は、裏で真夜が上層部にコネクションを使って圧力を掛けていた。

英作は名古屋で義弟の黒羽重蔵と会っていた。目的は達也のお披露目会で真夜達と分家が内乱にならぬよう手を打つ為。

重蔵は婿養子として四葉に嫁ぎ、英作の妹、四葉夢女と結婚した。そして分家が一つ、黒羽家の初代当主であり現当主でもある。真夜が大漢の「崑崙方院」に誘拐された時も報復に参加。しかし達也の父親を知っている者で、生きている者の中では一番危険視してきた一人でもある。彼のその後の噂を聞くと、英作は重蔵が警戒するのも理解出来た。

「お待たせしました、先代様。急に会って話したいとは珍しいですな」

「まあ、隠居した身になるとこうでもしないと、新年の慶春会ぐらいしか顔を見て話す事もなからうて…」

「確かに先代様にお考えがあったとはいえ、急遽、真夜殿に当主を譲ってからは、中々お

会いする機会も無いですな…。しかし、やはり四葉の為を思えば真夜殿には男性不審を克服してもらい、七草家に嫁いで頂いたほうが宜しかったと今でも思っております。深夜殿もおりましたのに七草弘一からの話を再三蹴って、何故、真夜殿に当主を任せられたのですか？」

重蔵達、分家の者には真夜が誘拐事件以来、男性不審になり、拒絶反応を見せると話している。その為、真の理由、英作と真夜が長年、達也の父親を探していた為だと重蔵は知らないのだから疑問に思うのも無理はない。十師族の四葉にとつては、本来、その程度の理由では一族の賛同は得られなかったのだ。それを英作が兄の元蔵から意向を引き継ぎ、半ば無理矢理、分家の者達を黙らせた。

「お主達、分家の皆が納得したとは儂も思つてなどおらん…。儂は先代の元蔵兄上の意向と真夜の気持ちを汲んでそう決めたのじゃ」

「初代当主様の意向？それは本当なのですか」

「ふむ、元蔵兄上が亡くなる間際に遺言として真相を聞かされた。そして真夜と奴の力になつてやれと…。」

「奴とは？どのような遺言だったか聞いても宜しいか？」

重蔵が聞こうとするが、英作は首を左右に振る。

「それについても、次の日曜日に真夜から話があるだろう。長年秘密にしてきたが、もう

分家の者達に隠しきれない所まで来ておる」

釈然としない回答を聞いた重蔵は、じゃあ何故先立つて呼ばれたのか分からなかった。すると栄作は切羽詰まった表情で……

「今日、呼んだ理由は真夜が皆に真相を話す前に、お主には言っておきたい事があつたからじゃ……真夜からどんな話をされようが決して反対するでないぞ。場合によつては四葉内で死人が出る。今の真夜は何を仕出かすか本当に分らんからのう……」

英作のただならぬ言葉と表情に重蔵は思わず身構えた。いきなり呼ばれ、真相も話してもらえず、先代当主の英作ですらも切羽詰まった様子から、自分達にとつて良くない事だと直感した。英作を切羽詰まらせる程の事を真夜は企んでいると悟つた重蔵は、もしもの為に戦闘の準備を進めておこうと心の中で決める。

「良いか……くれぐれも余計な事を考えるでないぞ?」

「了解しました」

しかし英作の思惑と違つて、最も厄介な者に備える口実を与えてしまう事になつてしまふ。

英作との会談を終えて帰宅した重蔵は、すぐに息子の貢に電話を掛けた。当日は、分家の当主とその家族、皆が本邸に来るよう通達が真夜から出されている。英作から聞かされた話を貢に聞かせ、当日に何があつても良いよう準備するようお願いさせる。いき

なりの本家への反逆とも言われかねない指示に貢は戸惑っていた。貢にとって真夜達、双子は従姉であり、長年憧れた存在でもある。あの忌まわしい事件の後からは、すっかり印象も変わり何かに執着しているような印象に変わったとはいえ、それでも貢にとって真夜達は憧れの存在であり、畏怖の対称でもある。そんな相手との戦闘も覚悟せよという黒羽家の当主にして父の重蔵からの命は貢を混乱させるには十分だ。

「しかし、父上――」

反論しようとした貢の言葉を遮って重蔵が口を開こうとする。

「これは黒羽家としての決定だ！逆らう事は許さん」

「しかし、それでは反逆の意思を持っていると言っているようなものです。父上は内乱でも起こすつもりですか」

「そうではない。しかし先代当主様が、あれだけ切羽詰まった様子なのだ。何もなく済むはずがない。用心しろと言っている、お前も嫁は守りたいじやろうが。それに真夜も、姉の深夜もいい歳じや、それなのに未だに相手を見つけない。四葉の将来の為には他の十師族に嫁いで地位を磐石にするか、婿を取って優秀な子を産んで貰わなければ困るのじや……これは他の分家の者達も思っている事じや。これ以上あの二人に好き勝手されては将来、四葉は廃れるかもしれない。それだけは避けねばならん」

重蔵の鬼気迫る熱弁に貢は決心がつかないが、一応納得する事にした。

真夜から指示されている準備が整った葉山は真夜の書斎で報告をしていた。部下の報告で英作が重蔵に接触した事も真夜に知らせる。と、真夜は直ぐさま英作の所に向かう。

「失礼します。英作伯父様、聞きたい事がありますのでお時間を頂けますか？」

真夜は目が笑っていない笑顔を英作に向け、本邸とは別にある英作の屋敷に乗り込んできた。

「うむ、よかろう。それで何用か？」

英作が真夜に問うと、同時に部屋が闇が襲い、頭上には夜空のように光の粒が輝いている。

真夜の魔法【流星群】ミーティア・ライン有機物、無機物を問わず、また物体の硬度・耐熱性・可塑性・弾力性をも問わず、対象物は光が通り抜けられる穴を穿たれる。透明度の高いガラスであつても光の透過性が100%でない以上穴を穿たれる。光の分布を介して対象物の構造情報に干渉し、固体・液体を熱や圧力によらず直接気化させる、つまり気体に分解する分解魔法の一種とも言える。室内やトンネル内のような閉鎖空間で特に高い威力を発揮する真夜の特異魔法だ。真夜が【極東の魔王】、【夜の女王】と畏怖される由縁の魔法、その魔法の標的が今、英作に向いている。

「それでは英作伯父さん、この間の重蔵伯父さんとの会談について説明を求めます」

真夜の顔は嘘を付いたら即、魔法を英作に向けて打つと物語っている。英作は覚悟を決めて口を開いた。

「随分と物騒じやな…： 今のお主では仕方ないか…： 簡潔に言えば重蔵には詳細は話してはおらん。当日にお主から分家の者達に真相を話すから、何があつても反対すると釘を刺したのじゃ」

「それが本当だとしても余計な警戒をさせて、攻撃の準備をする時間と口実を与えたに過ぎないと思いますが？」

「…： 儂はそうは思わん。それに重蔵はあの者を最も警戒してる一人じゃ、急に達也の存在を知らされたら、その場で咄嗟に強硬な策に出ないとも限らん。それを阻止する為に、どのような話をされても反対するなと釘を刺したのじゃ…： それでも行動を起こすならそれは儂が責任を持って阻止しよう」

「分かりました。しかし、あれほど戒厳令を出したのに行動してしまふとは…： 英作伯父さんは私の覚悟を甘く見過ぎではなくて？」

そう言うとき真夜の目は一層厳しくなった。

「お主の覚悟を甘く見たつもりなどないわ。寧ろ、その逆で、今のお主では同族の者達を一掃するとさえ思ったから、最も懸念の重蔵には覚悟させる時間が必要だったのじゃ」

英作は息を飲んで答える。

「しかし、どのような考えを持っていたにせよ、私の言い付けを破った事には変わりません。このまま処断しても良いですが、英作伯父さんには当日、反逆した際に重蔵伯父さんの相手して貰う事で良しとします。ですが、英作伯父さんには地下牢で当日まで過ごして頂きます。これ以上余計な事をされても迷惑ですから」

真夜が非情な宣告をすると、英作は顔を真っ赤にして怒った。

しかし、【流星群】^{ミューティア・ライオン}が発動しているこの部屋では抵抗しようにも出来なかった。

そして、遂に達也のお披露目会の日を迎えた。穂波も前日から本邸に来て、最終確認をした後、真夜達と会食してこの日を迎えた。時間が迫って来ると続々と分家の者達が屋敷にやって来た。各分家の当主だけが広間に通され家族達は別の一室に一集めに案内された。英作の話を聞いていた重蔵は配下の者を連れて来ており、もしもの為に屋敷を取り囲むように配置していた。当主達が広間で待っていると真夜と深夜が広間に入ってきた。分家の当主達は一同に頭を下げ、真夜が上座に着いた。姉の深夜は定位置の一番近くの席に着く。分家の当主達は十日前に突然、案内状が届いてこの日集められた。このような事は【異例中の異例】で、分家達は何処か緊張した様子。しかしその中でただ一人、英作から今日^{こんにち}までの真夜達の特殊な待遇の真相を聞かされる事を知っている重蔵だけは落ち着いていた。

「御当主様、集められた理由をお聞きする前に、先代当主の英作様の姿が見えませんがど

ういう訳ですか？」

重蔵が英作がこの場にいない事を不審に思い口を開く。すると真夜は分家の当主達にとつて信じられない事を口にする。

「挨拶の前にとは随分せつかちですね、重蔵伯父様。……まあ、いいでしょう。お話しします。

英作伯父様は先日、重蔵伯父様と今日の事について会談をされました。しかし、私は今日を迎えるまで内密にしておくように戒厳令を出しておりましたの。重要な話ではないようですが、英作伯父様が戒厳令を破つたのは事実です。その場で処断しようかと迷いましたが、それを止め今は地下牢に幽閉しています」

真夜の口から出た衝撃的な言葉の数々に分家の当主達は怒り狂った。

「どういう事だ！先代様に対してそのような無礼許されまいぞ」

真つ先に口を出したのは英作の息子で「椎葉家当主」、「椎葉英嗣」。

「いい加減にせんか！真夜、今すぐ先代様を解放しなさい」

椎葉家当主に続いて端を発したのは黒羽重蔵、その意見に同調する新発田家当主の新発田理。

そして、真夜の返答を待たず声を発したのが津久葉家当主の津久葉彩歌。

「そうですよ。先代様は貴女にとつて伯父というだけではなく、あの事件で救出に参加

した恩人でもあるのですよ」

「それは出来ません。今は私が四葉家当主であり、今回は私の覚悟を甘く見た英作伯父様は迂闊だったと言わざるを得ません。今日の為に、私は準備して命懸けでこの場を設けています。それを邪魔する者は誰であろうと容赦はしません」

真夜は今にも誰かを殺しそうな表情で分家の当主達に言い放った。それを聞いた者達はさつきまでの怒りをしまい一様に口を紡ぐ。真夜の覚悟した表情は一瞬にしてその場に静寂をもたらす。

「それでは本日お集まり頂いた件をお話します。その前に、まずは姉の四葉深夜より報告があります」

報告？この異様な空間でも眉一つ動かさず、無言だった深夜からの報告に一同は面を食らった。英作の処遇など大した事ではないと言わんばかりに深夜が口を開いた。

「では私から二つ報告させて頂きます。入ってらっしゃい」

深夜がそう言うと、広間に穂波が一礼してから入って来た。そのまま深夜の側に腰掛けると、

「紹介します。この度正式に私の養女になった旧姓桜井穂波さんです」

深夜のいきなりの報告に一同が呆気に取られた。刺すような視線を浴びながら、穂波は物怖じせず口を開いた。

「只今、四葉深夜様からご紹介に預かりました、旧姓桜井穂波と申します」

穂波は三つ指を突いて頭を下げ、分家の当主達に挨拶した。

「これは一体どういう事ですか!!?」

今まで口を閉ざしていた武倉家当主の武倉藍霞むぐらあすみが驚きの余り声を発した。そんな藍霞に答えるように深夜が説明を続ける。

「彼女は、私が以前から目を付けていました。つい間まで公安に勤めていましたが、私の長女兼守護者ガーディアンとして迎え入れました」

「なっ!!」

深夜は誰かが発した言葉を視線で遮り言葉を続けた。

「そしてもう一つですが、私は魔法資質を持つ男性から精子を提供してもらい、四葉の調整技術と私が独自に研究していた調整技術、固有の構造改変魔法と、遺伝子操作を用いて受精させた子を妊娠しております。産まれて来る子は私を上回る魔法力と魔法耐性、美貌を兼ね備えて産まれて来る事でしょう。調整体の欠点など全くない、云わば、完全調整体とでも申しませうか」

深夜から告げられた衝撃的な発表に分家の当主達は目を丸くする。すると新発田家当主の理が口を開いた。

「言いたい事は山ほどあるが、まず何故今になって今回のような事になったのか? 本来

なら、何処かに嫁ぐなり、婿を取るなどをして、四葉の安泰の為尽力するのが筋ではないか？」

一族内でも野心家の理は深夜の話を聞いて随分と取り乱していた。今までは、この双子が理由は何であれ、結婚して子を成す事に乗り気ではなく、いずれは自分の倅の勝成が次期当主に就くと算段していたからだ。それが深夜をも上回る資質を持つ完全調整体なる子が産まれては、その算段も霧に霞んでしまう。

理の問いには意外にも真夜が答えた。

「姉さんがそう至ったのは私の方から説明します。姉さんには報告をして貰うだけのつもりだったのですから」

突然、真夜が真相を語ると言い出したので、皆は真夜の言葉を聞き逃さんとばかりに静まり返った。

「それは本日の最大の報告に関係しています。私は去る4月24日にベンジャミン・ルキフェルとの間に出来た子を出産しました」

達也の存在とベンジャミンの血筋と生い立ち～四葉の次期当主候補

「それは、本日の最大の報告に関係しています。私は去る4月24日にベンジャミン・ルキフェルとの間に出来た子を出産しました」

真夜が発した「ベンジャミン・ルキフェル」という男と面識がある重蔵、理の表情は怒りで見るからに顔が真っ赤になり、同じく面識のある彩歌の表情は絶望により顔面蒼白していた。他の面識はないがベンジャミン・ルキフェルの所業と噂を知っている真柴家主の真柴真佐、静家当主の静陽人、椎葉英嗣、武倉藍霞も事態を把握し、各々が一斉に真夜を攻め立てる。思わず耳を塞ぎたくなるような怒号の中、分家の当主達の中でも一番頭に血が上っている重蔵が真夜に向けて罵声を飛ばす。

「馬鹿にするのも大概にせんか！我々分家に嘘を吐いてまで……それと七草との縁談を反故にして、四葉家の者として責務を放棄してまであの者の子を産んだと言うのか！そんな事認められるか。どこじや、あの者との子は、この場で始末し……」

重蔵が当主達の怒号に後押しされて、達也の殺害を仄めかした瞬間、広間は夜に包まれ、光の粒が重蔵の両足に穴を穿った。真夜の流星群である。

「うぐつ… 真夜… 貴様、伯父である儂に… このような仕打ちを…」

いきなりの出来事に他の分家の当主達は一斉に静まり返った。重蔵が真夜を睨み付けたが言葉が発したが、その言葉の先にいる真夜の目は重蔵を見下す様な目つきだ。穂波が他の者達の攻撃を想定し咄嗟に障壁魔法で真夜と深夜をガードしようとしたが、真夜に目線で制さる。穂波から重蔵に目線を戻した真夜は、

「我が子に危害を加えようと企む輩を、黙って見ている母親がいる訳がないでしょう。先程も言ったはずです。私は今日、命懸けでこの場を設けたと… 詳しく説明します、これに懲りたら黙って説明を聞いて下さいな」

真夜がそう言つて魔法を解除した。流星群が解除されたのを確認した彩歌は、突然起きた真夜の重蔵に対する攻撃、それも躊躇する事なく処罰した事実には戦慄しながらも、治癒魔法を重蔵に施した。同時にここは黙つて真夜の説明を聞かなければ、最悪の事態になりかねないと判断し、他の者達が余計な事をして真夜をこれ以上刺激しないよう、サポートに回ろうと決意する。

「大丈夫ですか？重蔵さん、少しじつとして下さい。治癒魔法で治療しますので… それに今は御当主を刺激しないで下さい。一歩間違えば、大惨事になります」

彩歌は重蔵に向かって小さい声でそう呟いた。重蔵は痛みと怒りから冷静さを喪つていたが、彩歌の何か思い至つた表情と、声で少し冷静さを取り戻し、黙つて真夜の説

明を聞く事にした。それでも、心中では本当に真夜との戦闘で死人が出るかもしれないと思ひながら……

「まずは事後報告になりますが、先程も言った通り私はベンジャミン・ルキフェルの息子を出産しました。彼は私が大漢にあった崑崙方院の魔法師によつて誘拐された時、命懸けで戦い、そして私を見つけ出して助けてくれた恩人です。この事は皆さん存じ上げていると思います。そして崑崙方院を壊滅させる報復の後、初代四葉家当主の父、元造らと共に帰還し、翌日には行方を眩ましました。彼のその後は、皆さんも耳した事があるように「今世紀最悪の犯罪者」と呼ばれるほど暴れまわっています。その【ターゲット標的】は、彼の家族を誘拐し人体実験を行った者達、殺害した者、関係者とその家族、その実験で得たサンプルや成果を強奪した他国の要人、諜報機関や軍とその家族です。挙げればキリがないほど殺戮を繰り返していますが、それは彼が両親の復讐を行っていたに過ぎません。私は父である元造から事件後聞かされ、父が亡くなった後は英作伯父様と姉の深夜と共に十六年間探し続けて、昨年、漸く当時イギリスに潜伏していた彼を発見して渡英し、彼に長年の気持ち伝えて結ばれました。その時に出来た子を出産し、名を【四葉・ルキフェル・達也】と名付けました」

それでもベンジャミンと面識がある者も、面識はなくとも数々の噂だけは知っていた者も、真夜が今世紀最悪の犯罪者の子供を自分達に黙って出産した事実を未だ納得して

なかつた。

【悪魔の一族…】
サタン・ファミリア

説明の続きを促す者達の目線に促され、真夜が続きを話出した。

「皆さんは知っていますか？ 遡れば3500年以上前から、時代や国、宗教も異なる、逸話として語られている人物達が実は同一族だという事を…」

悪魔サタン・ファミリアの一族歴史上に登場したのは西暦345年だ。神や悪魔などが信じられていた時代に、当時では考えられない程の強大な力を持った一族がある島に存在し、大規模な戦争が起きる度に、重税で貧困に苦しむ民や、徴兵に苦しむ民の代弁者となって、現れては両国の兵士達を薙ぎ倒していたと記録されている一族。次第に、その余りの強さから兵士達に畏れと敬意から「終焉を司る者達」と呼ばれていく。その影響は、当時の各国々の王達も無視出来ない存在までになる。危惧した王達は晩餐会を催して一族を招待し、一族の長ギルガメシュに対して、莫大な金と貴族の地位を与える代わりに自らの国に支えよ、と命令したと云われている。しかしそんな勧誘も空しく、全ての国の申し出を断り、名だたる王達に向けて拒絶と侮蔑の言葉を口にしたと云われ、その結果、王達が歴史上初めて現在の多国籍連合軍と呼べる軍隊を組んだと言われている「討伐戦争」、その出来事に登場する一族の名称だ。その一族と、それ以前の世界各国で逸話に登場する様々な人物達が悪魔サタン・ファミリアの一族の祖先達だと真夜は証言しする。

魔法師にとつても悪魔サタン・ファミリアの一族は、古式魔法以前に存在していた魔法を行使する者達と推測され、歴史の授業で習う誰もが一度は耳にする一族だ。様々な文献や伝承で戦略級魔法に劣らない威力、詠唱など必要なかつたと伝えられている事から、科学技術が近代社会に比べ、遥かに劣っていた当時に行使されていたその魔法を「原始魔法」と呼んで、その発動条件や方法を説明しようとする政府機関や科学者は後を立たない。その事を当然知っている分家の者達は、口が開いて塞がらなかった。話の流れを察すると、次に真夜から出てくる言葉は、魔法師社会だけではなく、世界にとつても重要な事になるからだ。

「話の流れから推測出来るとは思いますが、一応ハッキリ伝えさせて頂きます。ベンジャミン・ルキフェルはその悪魔の一族の血縁者であり、それも直系に当たる者です。私を救出する際に、彼の異質な強さを目の当たりにした重蔵伯父様は納得出来る事でしょう?」

話を振られた重蔵は、当時の事を鮮明に思い出していた。確かに若干、十五才の少年にしては、考えられないほどの魔法力と技能、現代魔法、古式魔法どれとも違う想子の流れや魔法の発動兆候。それに歴史通りの強靱な肉体とその肉体から繰り出される尋常ではないほど速く、強力な体術……思い返してみればどれも伝承に該当する事ばかり。

そうになると、あの少年の家族も……重蔵が物思いに耽っていると、

「心当りがあるようですね。……そうです。彼の父親は一族の直系で、母親は血統は薄くなつたいましたが、確かに一族の血を引いていました。彼の大漢での武勇と伝承通りの容姿を聞き付けた研究所や政府機関が、悪魔の一族の遺伝子採取と人体実験を目的として捕獲に乗り出しました。約三万の敵を撃退し続けた彼の両親は、帰国して彼が駆け付ける頃には敵の手に堕ち、耐え難い恥辱と実験を受けて帰らぬ人となりました。私を助ける為に鬼神と化して戦ったばかりか、その事が原因となつて両親が殺された事を知つた彼は自身を責めました。私や四葉ではなく、救援に間に合わなかつた自分自身を……」

ベンジャミンの家系と壮絶な過去を知らされた分家の者達は、どう反応して良いか分からぬまま無言を貫いていた。真夜の目頭に薄つらと涙が浮かんでいたが、原因を作らされた自分への怒りのほうが強いらしく、握られた拳は少し血が滲んでいた。

「では、初代当主の元造様は彼の家系を知つて尚、七草弘一との婚約を破棄して彼を真夜さんの相手に迎えようと考えておられたという事ですか？」

一人この場を無事に乗り切る事を最優先にした彩歌が真夜に問い掛ける。

「……少し時系列を説明します。短期留学で彼は日本に来ました。しかし彼が予定していた学校と手違いがあり、紆余曲折があつて私と深夜が通つていた中学に通う事になります。彼とは日本語を教えながら親しくなり、親密になるにつれて私が彼に惹かれて行

きました。しかし当時、私は父よって縁談を組まれ七草弘一と婚約していましたから、自身の想いは気付かない振りをしてました。四葉家の者にはそんな自由はないと自身に言い聞かせて。…ある時、彼の噂を聞きつけ、怪しんだ父が彼を屋敷に連れて来いと私に告げました。そこで父が彼に素性を聞いたそうです。父だけに自身の家系の事を話して、その後、父は彼の話を確かめる為、部下達と戦わせて見たそうです。その戦いを見た父は彼をより危険視した、と事件後、語ってくれました。しかしそれから直ぐに私が誘拐され、父らと共に大漢に乗り込んだ彼の武功と、私を救出してくれた感謝の気持ちから、彼に対して最大限の誠意を示そうと思いつたそうです。大漢から帰還したその夜に、彼の両親が襲われている情報を手に入れた父は、それを彼に伝えます。帰国の際、出国の難航が予想された為、手続き等を便宜したと語ってくれました。それを聞いて私は、家を捨てて彼の元に行くのと父に直談判しましたが、当然、父には反対されました。しかし彼が両親を救出した後に四葉に迎えようと言ってくれ、七草弘一との婚約も破棄しました。その後、父は遺言として英作伯父様に真実を告げて、協力するよう言いつて亡くなりました」

ここまで真夜の話聞いた者達は、素性を隠蔽すれば、世界から今世紀最大の犯罪者と呼ばれているベンジャミンと真夜の息子を四葉家の戦力として扱えるのではないかと思いはじめていた。ただ一人重蔵を除いては…

その張本人、重蔵は今の話に引つ掛かりを覚えた。初代当主の元造からベンジャミンの素性を遺言として聞かされ、協力までして捜索した英作は、ベンジャミン自身を四葉に迎えようと考えて動いていたはずだ。ならばベンジャミンと真夜の子供もいずれば産まれて来る事は当然、想像出来るはず。しかしその本人の姿は見えず連れ帰つて来た様子もない。にも拘わらず、あれほど切羽詰まった様子になるとは考えられないからである。

重蔵はまだ重要な事実があると思い、まずは懸念のベンジャミンの行方について真夜に聞いてみた。

「彼は：：十六年ぶりに再会した彼は幾度の戦闘と、魔法の酷使によって随分と弱っていました。結局、私が滞在していた一ヶ月に満たない間に亡くなり私が海葬しました。一族所縁の島に行き着けるように：：」

悲壮な真夜の表情とは裏腹に、重蔵にとつて最大の懸念であつたベンジャミンは死亡している事実、重蔵は心の中で安堵した。それは他の者達も同様である。四葉家内に彼を引き入れては外聞が悪い。

真夜はそんな分家の者達の心理などお見通しだったが、ここで怒つてもどうしようもないので気付いていない振りをした。真夜の考えなど微塵も興味がない重蔵は更に斬り込む。

「お主とあやつの経緯と、初代当主様と英作様の意向は分かった。だが、その話と深夜の妊娠と、どう関係あるのかそろそろ聞かせてもらおうかのう」

真夜に穿たれた両足の痛みを堪えながら、目を細め真夜を見詰めた。重蔵の目線など微塵も気にした様子がない真夜は、

「そうでしたね、私とした事がつい熱くなつて姉さんの妊娠については話していませんでしたね…。姉さんの妊娠については英作伯父様も知りませんから、此処で英作伯父様もお呼びしましょう。葉山さん」

真夜が葉山の名を呼ぶと、五分程して広間に英作が入つて来た。約一週間、幽閉されていた英作は白毛の無精髭を晒していた。真夜の顔を見るなり怒りが甦つたのか、顔を真つ赤にした英作を真夜が言葉で遮った。

「真夜… 貴様っ… よくも…」

「お静かにお願ひします。重蔵伯父様のように両足を穿たれたくはないでしょう？」

部屋が再び夜への変貌し、真夜の目つきが鋭くなった。英作が重蔵を横目で見ると、応急措置を魔法で行つた様子が伺える、両足の痛みに脂汗を額に浮かべながら堪えている姿だった。英作は予期していた事が生じてしまつて焦っている事に焦りと怒りを覚えながらも、未だ死人が出ている様子は見られない事に内心安堵する。彩歌に促されて、ここは大人しく用意されている席に着くことにした。

「では、英作伯父様も席に着いた事ですし、姉さんの妊娠の経緯についてお話します」

英作にとつては、寝耳に水の話が始まろうとしていた。英作が一言発しようとした瞬間、真夜に目線で制され、そのまま真夜の説明を聴くことにした。

「私が妊娠した事を話した時から姉さんは、自身も子供が欲しくなりました。私が出産して一緒に達也を愛でている内に姉さんは決心します。然し、私と同じで愛した相手以外と結ばれる事は受け入れられないというのが問題になります。姉さんが愛した人は一人だけであり、その相手も私と同じ人でした。それでも姉さんは私をずっと支えてくれしました」

双子揃って厄介な相手を愛してしまつた事、四葉家に産まれながらそんな理由で、これまで結婚してなかつた事を知つた分家の者達は、今日何度目か分からないぐらい腹腸が煮えたぎつていた。

「そんな姉さんに政略結婚をしるなんて私は言えません。姉さんは私の妊娠初期から、決意した時の為に、自身の遺伝子と相性が良い相手の選定を進めていたそうです。そして、私が出産後、念願だつた子供を身籠る為、提供して貰つた精子を遺伝子操作と、独自に発案した調整技術、これまで四葉が蓄積してきた技術を用いて、不必要な因子を排除し、更に構造改変魔法も行使して完全調整体とも云える娘を妊娠しました。ハッキリ言つて二度と成功しない試みです。そこまで優れた娘を産む事に姉さんが拘つたのは、

私の息子：： 達也の為でもあるそうです」

達也の特異魔法や、魔法力などを既に診察して知っている英作は、誰よりも早く深夜の子供の父親を聞く。

「提供者はF L Tに勤めている司波龍朗という者です。圧倒的な量子量を備えている事以外は至って平均的な魔法師です。どのみち調整する事は決定してましたから、それだけで十分でした。それに加えて彼への接触も出資者として出来ましたし、お礼の方もF L T内の希望部署への異動と、ある程度の役職を与えるだけで済みました」

話がある程度聞いた英作は、納得出来ないが将来はその娘を当主に据えれば、四葉も更に発展し、上手く行けば達也の能力を抑えられるかもしれないと思い始めていた。しかし達也の特異魔法や魔法力を知らされていないだろう分家者達、特に勝成を次期当主に推したい理は憤った。

「そんな我儘で産まれてくる子供に四葉の将来は託せん！一族は二人の所有物ではない！勝手な事ばかりされては、一族内の秩序も崩壊してしまうではないか」

理の物言いに他の者達も共感するようで一様に頷いた。その様子を見た英作は、真夜に達也の潜在能力を話したのか尋ねた。何か知っている英作の様子を見て、一同はまだ問題があるのかと真夜を問いたですような目線を向け説明を求めた。

「：： 達也は産まれながらにして、幾つかの固有魔法と、生後五日で私と同等の魔法力を

有しています。生後一ヶ月を過ぎた今では私をも超えて、確認出来ている固有魔法は最高難度の分解と再生、血筋から原始魔法も行使出来ると思われます」

驚愕の能力に一同はもう何も言えなかつた。ただ、本当に人の子かという驚きと、暴走した時の事を想像し、このまま見過ごして大惨事を引き起こす可能性を考えて、皆、内心消したいという気持ち胸を一杯にしていく。そんな中、英作は真夜が暴走を起こしそうな空気を感じ取り、提案を試してみた。

「皆の者少し良いか……深夜の娘は調整した子が産まれて来るという事、恐らく固有の精神干涉系魔法を備えて産まれて来るじやろう。経緯はどうにせよ、優秀な子が産まれて来るなら、いずれは四葉を担うだけの能力を開花し、真夜の倅の抑止にも期待出来る。何年か様子を見てはどうか？」

英作の提案に真つ先に反対したのが、重蔵、理、真佐、陽人、藍霞だった。

真佐が「いえ、四葉の中核からは外して、四葉からも出さない方針で行くべきです！」

藍霞が「それだけでは不十分です！」

理が「そうだ！そんな悠長な事を言ってる場合ではなく、やはり、今すぐに処分すべきだ！」

重蔵が「儂もその方が良いと思っておる」

間髪入れずに言い合い出す。すると真夜の流星群が発動する変わりに、深夜の精神干

渉系魔法が発動し、四人は沈黙し項垂れた。忘却レテの川の支配者ミストレスの精神を掌握し、深夜の判断一つで灰人にする事も出来る魔法。

「よせ!!早まるでない深夜!」

英作が咄嗟に声を上げ深夜を弾圧しようとしたその時、深夜が鋭い眼光で言い放つた。

「:・: 先ほどから黙って聞いていれば、皆さまこそ好き勝手言い過ぎですよ。この場に命懸けで望んでいるのは、真夜だけではありません。私も居ります事お忘れなく、其れに部下達も配備済みなのですよ」

項垂れている四人以外の面々は、深夜の言葉で最悪の事態を理解した。

「本日は、皆さまの家族も別室に招いております。人の子供の生死を決めるおつもりなら、

私どもは容赦はしません」

別室には、黒羽家次期当主の貢と妻の亜弥、理の一人息子の勝成、彩歌の娘の冬歌と婿養子の青司、その間に産まれた夕歌がいる。

一同の頭の中にまさかという思いと緊張が一気に走る。

「気でも狂ったか!二人とも!そんな事をすれば只では済まんぞ!四葉を潰すつもりか!」

静陽人が怒鳴り出した。津久葉彩歌は、最悪の現状から脱却する術を必死に考えていた。真夜と深夜が分家の当主だけでなく、その家族まで標的にするとは思つてもいなかった英作は、完全に二人の覚悟を甘く見ていた。

「狂つてなどおりません。我が子に危害を加えようとする相手なら、身内だろうと外敵と変わりませんわ。貴方方が行おうとした事と同じ事ですのに、何故狂つているとお考えになったのか、理解出来ません」

深夜の言い分に反論出来る者はこの場には居なかつた。この場にいるのは自分達の保身に走っている者ばかりだから。深夜は魔法を「半発動」したまま、殺気立った空気が頂点に達しようとしたその時、真夜が深夜の魔法を中断させた。深夜の精神干渉系魔法から開放された四人は動けなかつたが、話は聞こえていた。肩で息をしながら、額から大量の汗が吹き出していた。

「ハア：：ハア：：ハア：：」

息を整えながら、話を聞いていた四人は奥歯を噛み締めながら深夜を睨んだ。

「姉さんも言つたように、私どもは身内であつても危害を加えようとする者には躊躇なく処断します。しかし、皆様の言い分も四葉家当主として少しだけ考慮しようかと思ひます。葉山さん、達也を此処へ：：」

真夜が葉山に告げると、達也を抱えて部屋に入つて来た。そこには白みがつた銀髪に

整った顔立ち、ベンジャミンの面影が少しずつ表れてきた赤子だった。しかし、皆の者が押し黙ったのはそれだけが原因ではなかった。真夜に抱かれた達也の身体は、真夜と深夜の殺気立った空気の名残に触発されて、「黒い想子」が活性化してしていた。

それを見た当主達と、英作は思わず一步下がった。

「よしよし、そんなに怒る必要はないのよ、達也、ママと姉さんは大丈夫だから」

真夜の優しい声を聞いた達也は安心したのか、黒い想子は収まる。

「……改めて紹介します。息子の四葉・ルキフェル・達也です。ご覧になったように、達也は愛情を注いでくれる私と姉さんを無意識に守ろうとしてくれました。達也は大切な人を守る人物に成長するでしょう。ですから、くれぐれも敵対しない事をお勧めします」

真夜はニツコリと笑って当主達と英作に忠告し、更に続けた。

「それと達也についてですが、四葉家の最重要機密とし、皆様にはご家族にも話す事を禁じます。達也が私の子だと知ってるのは、皆様と、序列三位までの執事と、世話役をお願いした白川メイド長とその部下二人だけです。これを破った者は処断します。皆様もご家族をどうぞ大切にしてくださいませ」

真夜の言葉は殆んど脅しに近かったが、家族を含めて人質に取られてはもうどうしようもなかった。このまま何もかも泣き寝入りかと分家の者達が諦めかけた時、

「四葉家当主として、先ほど言ったように少しだけ皆様のご懸念も考慮しますわ。達也と、産まれてくる姉さんの子は次期当主候補からは除外します。達也には偽の戸籍パーソナルデータを用意し、成人する頃には四葉家とは無縁になるように手配します。遅くともそれまでには、私は当主の座を退き、次期当主は皆様の中、若しくはそのお子さん達の中から選ぶ事にします。それで今回の報告を締めさせて頂きますわ」

真夜の発表に、自身まで次期当主候補になると告げられた、分家の当主兼次期当主候補達は、内心に一物抱えながらも真夜の提案を受け入れた。

真夜から退室の許可が出て、続々と去っていく中、重蔵の側まで来た真夜は去り際に呟いた。

「重蔵伯父様の部下の者達は処分しておきました。悪く思わないで下さいね。怪我の方もゆっくり静養して下さいな」

そう呟いて去っていく真夜の後ろ姿を見ながら、重蔵は奥歯を噛み締めた。波乱のお披露目はこうして幕を閉じた。

部屋に戻って来た真夜達はソファに腰掛けて深く息を吐いた。特に、深夜は魔法を暫く半発動したままだったので疲れていた。深夜の精神干渉系魔法と精神構造干渉系魔法は最高難度の魔法の上、行使するのも身体に大きな負荷が掛かる。妊娠時の実験といい、今回の半発動という特殊な魔法の使い方は、深夜の体力をその都度、著しく奪う。

「深夜様っ… お身体は大丈夫でしょうか？」

穂波は自身も精神的疲労で疲れていたが、義母ははである深夜の体調を気遣う。そんな穂波に優しく微笑み、穂波を引き寄せ抱き締めた。

「ありがとうございます、大丈夫よ穂波さん、貴女も立派でしたよ。分家の当主達に物怖じせず娘としても、守護者ガーディアンとしても誇りに思います」

薔薇の香水の香りに鼻孔を擦られながら、深夜の豊満な胸の柔らかさと、褒美の言葉に穂波の疲れは癒された。

「ありがとうございます。深夜様おかあさま」

穂波は初めて深夜を母と読んだ。それは心の底から出た言葉。

「嬉しいわ、初めてお母様と呼んでくれたわね…」

親子の優しい時間を側で眺めていた真夜は、何を思ったのか、達也を抱えたまま深夜に近付いて来た。

「姉さん、私と達也も頑張りました。褒めて下さいな」

いきなりの出来事に穂波は目を丸くし、深夜はクスクスと笑いながら、放心状態の穂波から離れて、達也を抱く真夜を優しく抱き締めた。

「折角、穂波が甘えてくれたのにこの子は… 幾つになっても甘えん坊ね、真夜は」

真夜がシスコンだと知らなかった穂波は自身の目の前で起きている事を疑った。穂

波を見かねて深夜が教えた。

「穂波さんも驚いたかしら？真夜はね…：シスコンなのよ、まあ私も大概ですけどね」

深夜がそう穂波に告げると、真夜は頬を膨らませ、ふんつと首を右に向けた。驚いた穂波だったが、意外な一面を見せたこの双子を可愛らしいと思ってしまうた。

「達也も…：いい子だったわ。ママと私を守ろうとしてくれて、かつこ良かったわ」

深夜は続けて優しく達也を褒めた。しかし、達也のあの黒い想子の活性化はそんな生易しいものではなかったと穂波は思っていた。強大な魔法力を有していると聞いているが、本来見える筈のない想子があれだけ活性化して視認出来るまでとは想像もしてなかった。それも黒い想子だ。知覚した感じでは激しい怒りの塊のようだった。それも生後一ヶ月ちよつとの赤子である。達也の未来を少しでも憂いながら、穂波は激動のイベントを乗り切った安堵感をこの時だけは噛み締めていた。

結局、今回は最悪な事態は避けられ、死人は黒羽の部隊だけに留まった。葉山に準備させていた計画も使われる事がなかったが、いつ敵が襲って来ても良いようにまた、達也の成人した時の為に真夜はこの計画を存続させ、拡大する事を決定した。

京伊吹と穂波く母親の涙と真夜の号泣

ベンジャミンが悪魔サタン、ファミリアの一族の末裔という真相と、達也の出生を分家の当主達に告げた日から、半年ほどが過ぎて最初の新年を無事に迎える事になった。達也は真夜と深夜は勿論、穂波からも深い愛情を注がれてスクスクと育つていた。真夜に続いて、身籠つた深夜は、つわりの激しい時期は大分辛そうな様子ではあったが、穂波の献身のお蔭もあつて無事に乗り越えた。お腹が大きくなつて来てからも、引き続き穂波がサポートしてくれるので、深夜は随分と助けられていた。穂波はというと、真夜と深夜の影響と、懐いてくれる愛らしい達也に心を驚掴みにされ、今では真夜と深夜に負けず劣らず達也を溺愛している。達也にとつては母親が三人いるようなもので、常に三人のうち誰かが傍にいたような状況だった。その他には、黒羽貢と亜弥の間にも子供が出来たという報告が真夜達、本家の人間にも知らせは入っていた。お披露目会で達也の殺害を口走ろうとして、真夜の流星群ミューティアライズンによつて両足を穿たれた重蔵も怪我が完治して、初孫の誕生を待ちきれない様子だという。予定日はまだ大分先の事だというのに、四葉の次期当主にすべく、相応しい教育を行うと今から張り切つてゐるらしい。それは間接的に真夜達への不満感を表しているのだが、重蔵達分家の当主達が、達也の処遇に対し未だ納得していな

い事は、真夜達も認識はしている。しかし、両者の溝は簡単に埋まる事はなく、お互いが牽制しあつて何らかのキツカケで、血塗ろの争いに発展する可能性は十分にある。その為、これ迄以上に不干渉とまでは言わないが、互い進んで干渉しようとはせず、今日こんにち、新年の慶春会を迎えた。西暦2080年1月1日、達也のお披露目会以来、一族が四葉本邸に集まつた。新年の祝いの席だというのに、心なしか、重苦しい空気に会場は包まれている。真夜達以外の面々は既に会場で真夜達が会場入りするのを、少し緊張した面持ちで待つていた。前回と違い、新年の祝いの席という事で分家の当主だけではなく、その家族、四葉に支える執事達、そして、調整体が【楽師シリーズ】で、新発田家の勝成ガーディアンの守護者の【堤琴鳴】と、いずれは姉と同じく守護者になる予定の弟、【堤奏太】も特別に参加するよう真夜から前もつて通達されていた。案内役のメイドが、次の入場者を知らせる掛け声を上げる。

「四葉深夜様、その長女、四葉穂波様、おなーりー」

一瞬、ざわめき掻けたが、すぐに一同は平服し二人の会場入りを待った。穂波は青緑色の生地に綺麗な花柄の入った振袖姿で登場した。大人の女性の中にも、初々しさも引き立てられていて、仮に街を歩けばすぐにナンパされそうなほど振袖は似合つてゐる。一方、妊娠七ヶ月を過ぎた深夜は、濃藍の生地に百合があしらわれてゐる着物と、合わせられた髪飾りを着けて登場し、妊婦でありながら、そこに居るものを無条件に魅了して

いた。緊張した空気が、二人の艶やかな着物姿に少し和らいだが、そこに穂波が深夜と一緒に、入場した事が気に入らない執事序列五位の青木が、穂波に気付かれないように睨む。青木はここ数年、財務管理能力を評価され、現在は不動産の管理などを担当しているが、後に四葉の財務担当を任せられる人物。そんな青木は真夜を心底心酔しており、いきなり姉の深夜の養女むすめになったばかりか、真夜本人にまで気に入られてる穂波が目障りで仕方がなかった。穂波も青木が自身に向ける嫉妬の目に気付いていたが、真夜達から気にする必要はないと言われていた為、青木の前を深夜と共に素通りして席に着く。残るは四葉家当主、真夜の会場入りを残すのみとなった。ここで達也の出生を知る者達は、この場に達也が現れるのか、ふと疑問が湧いた。あの日達也が黒い想子の嵐を巻き起こしたのを目の当たりにした者達には、先程までとは違う緊張が流れた。

「四葉家御当主、四葉真夜様、おなーりー」

緊張している者達はどっちだ？と思ひながら平服し、会場入りを待つ。そこには黒の生地に鶴の刺繍の着物に金の帯、結び上げられた髪を見事な簪かんざしで留めている真夜の姿だけだ。それは若くして先代二人にも引けを取らないほど、四葉家当主としての威厳が痛いほど伝わってくる佇まいと美貌であった。特に達也を出産してからの真夜は、誰が相手でも、どんな出来事が起きようとも達也を守り抜くという覚悟と信念が滲み出ている。

「皆さん、新年明けましておめでとうございます。今年も四葉家一族にとつて良い一年になるよう皆さんと一丸となつて尽力したいと思つています。…ここで、彼女と初対面の人もいますので、穂波さん改めて皆さんに御挨拶して下さい」

息子の出生を隠している事など微塵も感じさせず、穂波に改めて挨拶するよう告げた。

「只今、御当主様より挨拶の機会を頂きました、旧姓を桜井、現在は四葉深夜が長女、四葉穂波と申します。歳は二十四、義母は、深夜ガレディアンの守護者を務めさせて頂いております。以後、お見知り置きをお願い申し上げます」

穂波は一切物怖じせず、作法も完璧にこなして挨拶してみせた。この半年で穂波も随分と逞しくなつていた。そんな穂波の存在は他の分家の家族、部下達の間でも噂になつていた。一般の家の者が、四葉家直系の深夜の養女になつたのだから驚かずにはいられない。新発田理の息子の勝成は父親の影響で、一族よの者ばとしてのプライドが高く、幼いながらも外から来た十九も年上の穂波に敵対心を抱いている。一方、敵対心とまでは行かないが、穂波を警戒しているのは黒羽貢も同じ。守護者ガレディアンとはいえ、四葉深夜とその妹、四葉家当主の真夜、この二人の重要人物と親密な関係を築いている穂波は、それだけで十分に警戒対象になる。様々な視線が交差する中、穂波の挨拶が済んだのを確認して真夜が挨拶を続けた。

「有難う穂波さん、皆様もどうぞ穂波を快く迎えてあげて下さい」

「御意」

一同、声を揃えて一応形だけでも穂波を歓迎したという意味を込め、真夜に対して返答した。さすがに新年の祝いの席で、表立って拒否する輩はいなかった。

「それと皆様も存じ上げている事と思いますが、めでたい事ですから正式に発表しておいた方が良いでしょう。1つは、黒羽家の亜弥さんがご懐妊されています。更にめでたい事に双子だという事です。予定日は九月の頭、亜弥さん、体調には気を付けて元気な赤ちゃんを産んで下さいね。無事に産まれて来たあかつきには、次期当主候補になりますので、皆様も温かく見守って下さいな」

真夜が黒羽亜弥の懐妊報告を、改めて一族の前で報告した。すると、各々から重蔵や貢、亜弥

に祝いの言葉を投げ掛けて一様に祝福した。一通り祝福と拍手を受けた亜弥はお礼を述べる。

「御当主様、多大なお心遣い感謝申し上げます。無事に出産を迎えられるよう尽力致します。他家の皆様も、お祝いの言葉大変感謝申し上げます。」

亜弥がお礼の言葉を告げて一礼すると、改めて大きな拍手が湧いた。達也と此れから産まれて来る深夜の娘は、先のお披露目会にて真夜が次期当主候補から除外した。その

変わり、分家の当主達も含め子供も当然候補になり、達也が成人するまでに真夜は当主の座を退き、次期当主を指名すると告げている。その為、子供達の世代からは新発田勝成と津久葉夕歌しかいない。そこに黒羽重弥が出産する予定の双子が加わる。現時点の有力候補は黒羽貢、新発田家、現当主の理、津久葉家冬歌だ。この三人が分家達の間では最有力と云われていて、次点で勝成や夕歌、子供達世代である。真夜の言葉が本当なら約二十年。最長でも真夜が当主に在位するのはそれまでである。真柴真佐、静陽人、椎葉英嗣、武倉藍霞の四人は各家の後継者を早く確保せねば、可能性は低い。

「次は、姉の深夜の懐妊です。此方の方が重弥さんより早く出産します。予定日は四月一日になります。懐妊の経緯はお答え出来ませんが、姉の事も温かく見守って下さい。」

分家の家族や支える執事達から不穏な空気が僅かに流れた。あの日以来、更に深まった両者の溝の原因には、深夜の懐妊も含まれている。理由を一切説明されない事と、結婚せず妊娠した事そのものを問題視されていた。元々、深夜が次期当主筆頭候補で真夜は七草家に嫁ぐ予定だった。それが「2062年の悪夢」が起きた結果、七草弘一との婚約は破棄され、その後は何故か深夜までも結婚する事を頑なに拒否し続けた。本来なら深夜であつても、そんな我儘を初代の元造や先代の英作が許すわけがないのだが何故か今まで許されていた。中には好き勝手に振る舞う双子が、一族を取り仕切る立場に相

応しくないと考える者も少なからずいたのだ。

大きな混乱が起きる事なく慶春会を終えた真夜達一行は、ある兄弟とメイド長の白川が護衛と世話をしていた達也のもとへ向かう。生後八ヶ月を過ぎた達也は平均より一回り以上大きく成長し、顔つきが彼の父親の一族特有の容姿がしっかりと形成され始めていた。三人に礼を告げてから達也の元へ駆け寄る。しかし、真夜が部屋に入ってから来たことに気付いた達也は、しっかりとした足取りで笑顔で歩き出して真夜に近付いて来た。我が子の成長の早さに改めて驚きながらも、笑顔で近付いて来る達也が真夜は愛しくて堪らなかつた。五メートルほど歩いて来た達也が、両手を広げて真夜に抱っこを要求すると真夜は達也に応えて抱き上げて微笑んだ。既に体重15キロにまで成長した達也を抱えるのは真夜にとっても重労働だが、この幸せの重みを噛み締める。深夜と穂波も微笑ましいその光景を見て笑顔になった。先程まで一族の者達から嫌な視線を向けられて、ストレスを感じていた二人も達也の愛くるしい笑顔に癒されていた。穂波は自身が本能的に子供を欲している衝動をまだ理解していなかつた。今は深夜が身籠っている段階で、溺愛している達也もまだ生後八ヶ月だ。自身の幸せを求めている場合じゃないと無意識のうちに自身の欲求に蓋をしていた。達也を護衛していた兄弟は、穂波と似たような境遇で古式魔法を扱う【京家】かなぐりけの生き残りで、真夜が三ヶ月前にスカウトした。兄は真夜の個人的な秘密仕事を担っていて、現在は生家があつた奈良を離れて静

岡で弟と二人で住んでいる。そんな兄の「京伊吹」かなぐりいぶきと穂波はお互い多少意識しているように真夜と深夜の眼には映っている。伊吹は穂波より一つ年下の二十三歳で普段は穏やかな性格だが、戦闘になれば近接戦闘では無類の強さを見せる。発動速度に難がある伊吹だが、京家秘伝の【隠密技術】と戦法でその欠点を補う貴重な才能を持つ魔法師だ。独特な雰囲気のある伊吹だが、穂波には弟の「伊万里」いまりを守って来たその勇姿が、一人の人間として、深夜の守護者ガーディアンを担う魔法師としても尊敬に値した。また一人の男性としても伊吹は好印象だった。伊吹の方も、似たような境遇を持つ穂波が、顔を会わせる機会があればいつも笑顔で自身と弟を迎えてくれる姿に、心の平穏と安らぎを感じており、今までの境遇の苦痛から解放してくれる存在だと思っていた。弟の伊万里は十才で兄の任務にはあまり参加してないが、真夜達に近況報告や顔見せを行う為に時々本邸に訪れていた。伊万里は「水晶眼」の持ち主で、その眼が欲しい古式魔法の他家から狙われ続いていた。ある日伊吹が留守の間に賊に襲われて、京一族は伊万里を残して皆殺しにされた。両親らが命懸けで伊万里を守ったお陰で、奇跡的にまだ幼い伊万里は逃げ出せた。その後、兄の伊吹が伊万里を必死になつて捜索し保護出来た。それから二年、二人は逃亡生活を送っていたが、真夜がそれをスカウトする事で保護した。古式の者達の裏の世界で、二人が四葉に拾われたという噂が発覚し二人の逃亡生活は終わりを告げた。水晶眼を求める代償が、四葉と事を構える結果となればその家は間違いなく滅亡する。

触れてはならない者達を正面から敵にする度胸がある家など存在しない。反対にこれまで犯行に及んだ者達は、四葉からの報復に日々脅える事になる。真夜からスカウトされた時、当然伊吹は警戒したが、弟の身の安全を少しでも確保出来るならと渋々受諾した。悪名高い四葉まで敵に廻しては、これ以上逃亡生活は続けられず、弟は水晶眼を奪われ二人とも両親らの仇も討てず殺されてしまうのは明白。真夜は自身に支える事を条件に、弟の安全と一族の復讐を手助けする事を約束する。

始めは四葉も伊万里の水晶眼が目的だと思っていたが、真夜の目的は、隠密技術と体術に優れた伊吹の方だ。私的な資金調達の為、秘密工作や諜報活動、暗殺などを行う際に伊吹の才能は最適だった。それだけではなく、いずれは達也の体術稽古の相手と護衛を任せたいという思惑もある。復讐に手を貸すのも、伊万里の安全を約束したのも、伊吹を取り込む為の手段でしかなく、伊万里の水晶眼など眼中にはない。真夜からの任務を遂行しながら一ヶ月ほど経ったある日。いつもは電話か使いで来る穂波か葉山に報告して終わりなのだが、その日は弟と共に四葉本邸に招かれた。伊吹は警戒しながら真夜に任務の報告と依頼の品を渡した。その時、スカウトした理由と達也の存在を聞かされて、巷の噂に聞いていた四葉とは少し違うと感じて安心する。弟の水晶眼には興味がないと知った伊吹は、それから真夜を信頼し任務に励んでいる。真夜もそんな伊吹を頼りにしており、伊吹の復讐に暗殺部隊を動員して少しずつ京家を襲った者や狙い続いて

来た者達を削っている。両親を殺害されて逃亡生活に心身共に疲弊していた伊万里も、徐々に以前の明るさを取り戻していき、今では穂波に遊んでもらったり達也の遊び相手になつてあげたりと、笑顔を見せるようにまで打ち解けていた。

「伊吹さん、伊万里くんお疲れ様です」

慶春会の前に新年の挨拶を済ませていた京家兄弟に穂波は労いの言葉をかけた。穂波の振袖姿に見惚れていた伊吹は慌てて一礼したが、弟の伊万里は穂波のもとへ駆け寄つていき穂波の振袖姿を褒めた。京家兄弟は対照的な対応と言葉を発する。

「いえ、労いの言葉は不要です。穂波様」

養女とはいえ、深夜の娘になつた穂波に伊吹は様を付けて未だに言葉使いは固い。一方、弟の伊万里は、

「わあー、すっごい綺麗だよ。穂波ねーちゃん！ねっ、兄ちゃんもそう思うよね？」

振袖姿の穂波を見て、伊万里は興奮したように穂波を褒め、兄の伊吹に同意を求めた。自身も穂波の振袖姿に見惚れてしまった為、同意を求める弟に強く反論出来ず、いきなり穂波に駆け寄つた行儀の悪さを咎める事で、伊吹は居心地が悪くなるのを回避しようとした。

「こら、伊万里！行儀が悪いぞ、いきなり駆け寄つては穂波様に失礼だろ。…弟が申し訳ありません。行儀の悪い所を見せてしまいました」

「伊吹さん、以前から申してますように私を様付けで呼ばないで下さい。もっと気軽に呼んで下さいとお願ひしてますのに」

「いえ、穂波様は四葉家の方ですので、当然だと思っております」

「私は現在四葉の者ですが、以前お話ししたように養女であり、元々は一般家庭の者です。そんなに気を使われては私が困ります。それより、私の振袖姿は似合ってますか?」

「しかしー、いえ、分かりました。穂波さんの振袖姿、とっても良く似合っています」

穂波の物言いたげな表情を見て、伊吹が観念し、畏まった言葉使いを止めて素直に穂波の振袖姿を褒めと、穂波は満足そうに笑顔になり、上機嫌でお礼を言つて伊万里との談笑に戻つた。その様子を見ていた深夜は伊吹を別室に呼んで二人つきりで話をする事にした。一方、深夜に呼び出された伊吹は、先程のやり取りの一部始終を深夜に見られていた事が恥ずかしかつた。深夜は以前から穂波が望んでいれば、穂波に対して畏まった口調をしなくても良いと言つてくれてはいたが、実際、目の前でその一部始終を見られては話は別だ。

「伊吹さん、改めて、達也の護衛お疲れ様でした。お陰で達也の身を心配する事なく慶春会に望めました。有り難うございます」

「勿体なきお言葉、真夜様と深夜様には多大な御恩がございます。私に出来る事は精一杯やらせて頂きます」

伊吹は一礼し、改めて自身の決意を口にして誓った。そんな深夜は言霊を捕ったと言わんばかりに伊吹に突きつける。

「そうですか、なら、一つ貴方にお願ひしたい事があります。…伊吹さん、貴方、穂波の事を一人の女性としてどう思いますか？本心を聞かせて下さい」

深夜は伊吹が予想もしなかった質問を問い掛けた。伊吹が思わず深夜の顔を見直すと、そこには嘘を付いたら許さないと言わんばかりの表情の深夜がいた。伊吹は本能的に嘘を付いたらマズイと悟って、意を決して深夜に自身の本心を打ち明けた。

「…穂波様は、とても魅力的なお方だと思います。自身も辛い過去をお持ちであるにも拘わらず、いつも笑顔で私と弟を迎え入れて下さり、私と弟の心の傷を和らげて下さる不思議な魅力を持たれるお方だと思っています」

「それは、穂波に惹かれ始めている、惹かれていると解釈しても宜しいですね？」

伊吹の返答に対しての深夜の直球な質問に、どう答えようと迷った伊吹だったが、此処まで来たら深夜には自身の淡い恋心を悟られていると覚悟し、正直に答えた。

「はい、文不相応は重々承知しておりますが、穂波様に恋慕を抱いております」

伊吹の正直な気持ちを聞き届けた深夜は、伊吹の予想に反して、反対する事なくお願いを口にした。それは深夜の母親としての憂いからだった。

「分かりました。では伊吹さん全力で穂波を落とさない。私は現在妊娠しています。

三ヶ月も経てば出産し、これまで以上に穂波は自身の幸せを後回しにするでしょう。しかし、それは私も真夜も望んでいません。穂波には、好きになつた相手と幸せな家庭を築いて欲しいと願っています。貴方が正直に気持ちを打ち明けてくれたなら、穂波を託しても良いと考えていました。先程、貴方は自身に出来る事は精一杯やると仰いましたね？なら、穂波を振り向かせて、穂波と幸せな家庭を築きなさい。穂波と似たような境遇にも負けず、弟を守つて来た貴方なら可能だと私は思います。此れは四葉家としての頼みではなく穂波の母親としてのお願いです。なので四葉家当主の真夜ではなく、穂波の母親の私が話す事になりました。引き受けてくれますか？」

深夜は四葉家の者としてではなく一人の母親として頼んでいる。勿論、真夜も知っている。伊吹は深夜達が本気で穂波の幸せを願っていると理解した。そして、その願いを自身に託してくれる二人の期待を無下には出来なかつた。

「御意、必ずや、穂波さんを振り向かせて見せます」

「そう、惚れた相手には命を懸けなさい。穂波自身が幸せを掴もうとしないから苦勞すると思いますが、貴方が穂波にとつて一緒に幸せになりたいと思える相手となるよう、健闘を祈っています」

真夜は伊吹を激励し、二人は穂波達がいる部屋に戻つた。深夜と伊吹の帰りを少し心配して待つていた穂波だったが、伊吹の顔が何処かスッキリとした表情になっているの

を見て安心する。そんな穂波の前に来た伊吹は、早速穂波を今度の週末に食事に誘う。いきなりのデートの誘いに穂波は深夜を見返したが、深夜は笑顔で無言のまま、穂波に決断を委ねた。釈然としない穂波だったが、伊吹の嬉しい変化に答えて承諾した。それから何度かデートを繰り返して二人は交際する事になった。初めは守護者ガーディアンとしての職務や、達也の事、産まれて来る義妹いもこの事を考えて自身の幸せよりそちらを優先しようとしたが、伊吹に惹かれている自分の気持ちを自覚した事と、深夜達にも自身の幸せを優先しなさいと云われ、穂波は伊吹と結婚を前提にした交際をスタートさせる。二人の交際の知らせには深夜達双子も、葉山やメイド長の白川など、達也の周りにいる者達は笑顔で祝福してくれた。当然伊万里も兄と穂波が一緒になる事を喜んでいた。

三月も後半に入り深夜の出産予定日も一週間に迫った、雪が降り積もった三月二十五日。前日の夜から突如襲ってきた陣痛に深夜が苦しんでいた。急いで専属の助産師が本邸に呼ばれ、深夜は敷地内にある施設に移された。穂波と一緒に分娩室に入り深夜を励まし続け、三時間後、赤ちゃんの産声が聞こえて、暫くして助産師が出てきた。駆け付けていた真夜達に向かって助産師が告げる。

「おめでとうございませす。御当主様。3020グラムの元気な女の子です。予定日より一週間早かったです、母子共に健康に異常はありません」

助産師のその一言に出産を待ちわびていた真夜達は、各々が笑顔で手を叩きながら祝

福した。

深夜の出産に立ち会った穂波は、新しい命の誕生に、そして自身の義妹いもつとの誕生に感動し涙を流して喜んでいた。綺麗にされた赤ちゃんが前日からの激しい陣痛と出産で憔悴した深夜の腕の中に収められる。待ち望んだ娘の誕生に深夜自身、涙を浮かべていた。その後穂波に付き添われて来た深夜と赤ちゃんは病室で真夜達と対面。無事に出産し小さな女の子と共に幸せそうに戻ってきた姉に、真夜は涙を浮かべて駆け寄った。姉の苦勞と尽力を全て知っている真夜は、漸く、姉の幸せが一つ叶ったのを実感して涙が止まらなかつた。いつも妹の自分を優先してくれた、優しく強い姉に真夜は感謝の気持ちで一杯だつた。同時に迷惑をかけた姉に申し訳ない気持ちも大きかつた。そんな姉の幸せのような表情を見て、涙が止まらず、真夜は人目を気にせず泣き続けた。真夜の号泣に、周りの一同が仰天の表情を見せる事になつたが、野暮な口を挟む者は誰も居なかつた。憔悴した深夜が真夜の頭を軽く撫でて、真夜を何とか泣き止ませる。こんな時でも深夜はしつかり姉だ。後日、雪深い日に産まれた女の子は、深夜によつて深雪と名付けられた。こうして産まれた女の子は達也同様、深夜を慕う者達から愛情を受けてスクスクと成長し、新たな重要メンバーに育っていく。

様々な決断と平穩な日常の終焉

深夜の出産を集まった者達は改めて病室で祝い、各々が祝いの言葉を深夜に伝えて、病室を後にした。残った真夜と穂波は、深夜とこの至福の時間ときをゆっくりと噛み締めるようにお互いの顔を見合わせながら微笑み合っていた。三人が幸せそうに微笑み合っているのを見た達也も、真夜に抱かれながら手を大きく叩いて祝ってくれているようだった。今では随分歩き廻れるようになり、喃語なんごも減って簡単な単語もいくつか話せるようになっていいる。

「みーや、いー」

流石に発音まで完璧とは言えないが、達也は覚えてたの単語を使い深夜達三人を驚かせる。偶然か、意図して話したのか、三人には判らなかつたが、達也は確かに深夜を労つたように見えた。いや、この場合は褒めたという方が正しいのかもしれない。達也は真夜をママではなく、何故か深夜のマネをして名前で呼ぼうとする。それを面白がった真夜が、深夜を喜ばせようとマネして覚える赤ちゃんの習性を利用し、深夜も名前で呼べる練習を密かに行っていた。それに加え普段から達也を良い子と、よく褒める三人のマネをしてその単語も覚えていいる。しかし、このタイミングでまさか達也がその二つの

単語を話すとは思ってない三人は、目を丸くして、暫く固まって達也を無言で眺めていた。そんな三人を他所に達也が上機嫌で手を叩きながら連呼する奇妙な光景が病室で広がっていた。

達也の予想外な言動に暫し固まってしまった三人。だが、最後は結局そんな達也をいつも以上にベタ褒めする三人の姿があるのであった。その後深夜の授乳が終わり、赤ちゃんが助産師に連れて行かれるのを見届けた真夜は、達也を連れて屋敷に帰って行く。穂波は深夜が休むまで側にいようと病室に残り、疲れている深夜の世話を甲斐甲斐しく行う。そんな穂波を深夜が呼び止め、おもむろに語り出す。

「穂波、少し話したいから其処へ掛けなさい」

穂波が頭に疑クエスチョン・マーク問符を浮かべながら、ベットの側に置いてある椅子に腰掛けた。

「穂波、私の出産を見て、何か感じなかった？」

「そうですね。とても感動しました。深夜様おかあさまの幸せそうな表情もそうですし、義妹いもうとが出来た事も、とても嬉しかったです。新しい命が産まれて来るって素敵だと思いました」

穂波は深夜の問い掛けにそう答えながら、自身の中で大きく蠢うごめくく感情に、色を付ける事が出来ないうでいた。深夜は穂波の中の葛藤を見透かして、穂波に突き付ける事にす

「そういう事を聞いてるのではないわ。私が尋ねているのは、穂波……貴女も伊吹さんとの子供を強く欲しくなったのではないかという事よ」

!!? 深夜のその言葉は、穂波の中で蠢く感情に確かに色を付けた。これまでも何れは母親になりたいと思つた事はある。それは漠然としたものだったが、女性としては当然である。しかし深夜の養女むすめに迎えられてから、達也や真夜、深夜と接している内に大きくなつていた。伊吹と結婚を前提に交際を開始してからは、流石により意識し出したが、それでもまだ先の事だと考えていたつもりだった。しかし深夜の出産に立ち会つた際に感じた、あの衝動は紛れもなく自身の本能の叫びだ。それは交際を開始してまだ約二ヶ月だが、確かに恋慕と呼べる感情を抱く、伊吹の子を産みたいと本能が大きく蠢いた瞬間だった。深夜はそれを見抜いていたのである。

「……しかし、それでもまだ私達は交際して日が浅いですし、伊吹さんがどう思っているか判りませんし、籍だつてまだ……」

穂波は自身の衝動に色が付いた事で別の意味で慌てていた。婚前交渉が良しとなれない昨今、深夜の養女むすめに迎えられた自分が、四葉の顔に泥を塗るような事があつてはならない。穂波はそう考えていた。しかし深夜の答はそんな穂波が考えているものではなかつた。

「確かに交際して日が浅いのは事実ですが、籍ならいつでも京家かなくりけに移しても構いません。

家も此方で空いている屋敷はありますのですぐに確保出来ます。愛し合う貴女達を阻む者があつても、私と真夜で全て駆除します。穂波：：貴女は自分の幸せを優先しなさい」

病室での深夜と二人だけの会話は、穂波の心を揺れ動かすには充分過ぎるほどである。穂波との話を終えて、眠りに就いた深夜を確認してから穂波は屋敷に戻った。真夜に深夜の様子を報告した穂波は、自身の部屋に戻ると、そこには何故か伊吹がいる。驚いた穂波が伊吹に問うと、伊吹は真剣な顔で穂波に椅子に掛けるよう告げて、話を切り出した。

「真夜様から宿泊を提案されてね、穂波さんと直接話したい事もあつたし、お言葉に甘えさせて貰う事にしました」

伊吹の口調は以前とは違い、穂波に対して、畏まった言動はしなくなっていた。穂波から交際する際に、条件として対等な関係を築きたいからと禁止され、伊吹はその条件を飲んだ。

「まだ四葉よつばいる理由は分かつたわ。何故、一人で私の部屋で待つてたの？伊万里くんは？」

穂波の部屋は本邸とは別にある離れにある。深夜の部屋もこの離れにあり、一番大きい奥の部屋だ。穂波は伊吹が自身の部屋で待っていた事より、伊万里の姿が見えない事

が気になっていた。

「伊万里なら、裏の森で稽古して来ると言つて出て行きましたよ。最近稽古にも精を出して、体術も陰密術も凄く上達して来ましたよ。：：： 穂波さんに相談。：：： どうか、何て言うか。：：：」

何故か話したいと言つた伊吹の歯切れが悪い。自身も先ほどの会話で生じた葛藤を整理する為の時間が欲しかつた穂波は、歯切れの悪い伊吹を一度部屋から追い出そうか迷つていた。嫌な雰囲気を感じ取つた伊吹は、一度深呼吸して、意を決して穂波に話した。

「：：： 真夜様から僕を京家の^{かなぐりけ}当主に据えて、分家の末席に加えたいと打診されました。ただ、決定は穂波さんが許可をすればという条件付きですけど。：：：」

伊吹は背筋を伸ばして穂波に告げる。突然真夜から伊吹へ打診されたという話に、穂波はどう反応したら良いか解らない。もし京家が分家に加われれば、あの一癖も二癖もある当主達と表立つて伊吹は対立する事になるのだ。そうなれば、当然、弟の伊万里も標的にされるかもしれない。真夜と深夜が居るとはいえ相手は四葉の魔法師、本気で戦闘に発展すれば、真夜達も無事に済む保証は何処にもない。そのぐらいの相手だ、伊吹とて、それぐらいは理解しているはず、それにも拘わらず、伊吹は真夜からの打診に後ろ向きの様子はなかつた。その事が穂波を一層混乱させる原因でもある。穂波は伊吹に

話を承ける気があるのか、まずははつきりさせる事にした。

「京家の生き残りとしては、真夜様からの打診を承けても良いと考えています。真夜様には多大なご恩がありますし、今では守りたい存在は伊万里だけではないですしね」

「伊万里くん以外に守りたい存在ですか？」

「はい、それは勿論穂波さんですよ。深夜様からも以前云われた事ですが、惚れた相手には命を懸けると。勿論、伊万里が己で身を守るまでは僕が守るつもりですが、深夜様が仰つたのはそういう意味ではありません。僕もその意味を理解しているつもりですし、生涯守りたいと思う穂波さんを、僕なりの覚悟を示して共に歩んで行きたいと考えています」

伊吹は照れもせず、堂々と自身の決意を口にする。伊吹のプロポーズとも受け取れる決意を聞かされた穂波は、病室での深夜の言葉を思い出していた。「穂波：…貴女は自分の幸せを優先しなさい」二度、三度、頭の中で再生された言葉が胸の奥に染み込んでいく。これまで以上に危険に晒される可能性があるにも拘わらず、決意した伊吹の顔を見て、やっぱりこの人の子供が欲しいと、穂波は改めて実感した。然して、決定を委ねられた形の穂波は、京家の分家入りを賛成する事にした。賛成した事で覚悟を決めた穂波は、続けて伊吹に自身の正直な願望を口にする事にした。

「伊吹さん、貴方の子供が欲しいです」

穂波の発言で、伊吹の色情が最高潮に達するのは一瞬だった。伊吹は穂波をベツトに押し倒して穂波の唇を奪った。穂波も欲情した見たこともない伊吹を受け入れ、二人は激しく互いを求め合った。穂波は防音障壁を部屋に張って、初めて身体を貫かれる激痛に堪えながら、女としての幸せを感じていた。

翌日朝食を済ませた二人は、真夜に京家の分家入りを承諾した事を告げた。同時に、伊吹は穂波を京家に迎えたいと申し出る。穂波に目線を移した真夜に照れ臭そうに穂波は頷く。二人の間に何があったのか察しがついた真夜だが、不粋な事は口にせず、二人の決断を笑顔で祝福する。深夜にも報告しておくよう告げて、二人に退室を許可する。その後、見舞いに訪れた深夜に真夜と同様に報告して深夜からも祝福の言葉を受け取った。穂波を姉のように慕っている伊万里も二人からの報告を受けて、京家三人での新たな門出を喜んだ。

その後伊吹と伊万里は、現在の住居がある静岡から四葉本邸の敷地内にある別邸に引っ越し、穂波との三人での生活が始まった。間もなく穂波の懐妊が発覚すると、義母である深夜は自分の事のように喜んだ。ただ、古式魔法の家系で、其処まで名家でもない京家の分家入りは、当然のように分家達の反感を買う。先代の英作にも随分と愚痴を溢されたが、真夜はその全ての雑音を、四葉家当主としての決定と一蹴した。これ迄も

分家達にとっては、真夜の身勝手な振る舞いに振り回され、我慢の限界を迎えようとしていた。こうして後に、達也殺害を企てようとする動きが本格化する事になるのである。

九月三日、黒羽亜弥が双子を出産、姉を黒羽亜夜子と名付け、弟を黒羽文弥と名付ける。重蔵を始め、父親の貢も待望の息子と娘の誕生に黒羽家は湧いた。何れはどちらかを、四葉家当主に据えて実権を手にした重蔵は、長期的な計画を立て、何れ自分達の敵になるであろう真夜の息子達也と接触をなるべく避ける方針を固めた。

――西暦2081年1月1日――【慶春会】――

真夜の口から正式に京家の分家入りが発表され、伊吹と伊万里も新年の祝いの席に名を連ねた

。改めて伊吹が京家当主として一族の前で挨拶を行い、弟の伊万里と穂波も、伊吹に続いて一言述べた。昨年とはまた違う冷やかな視線を三人は受けながらも、無事に今年の慶春会も乗り切った。同年、三月十四日、真夜と深夜が達也と深雪を出産した施設で、穂波も初産を迎えた。穂波の出産には夫の伊吹が立ち会い、二十時間掛かる難産だったが無事出産する事が出来た。母子共に問題はなく、心配していた深夜達も知らせを受けて漸く安堵した。産まれたのは黒羽家の文弥と亜夜子と同じ双子だ。姉を穂波の一文

字を貰い京水波^{かなぐりみなみ}、弟を伊吹の一字を貰い京伊織^{かなぐりいおり}と名付けた。

三月二十五日、深夜の娘、深雪の一才の誕生日を迎えた。深夜の構造改変魔法と独自の調整技術、遺伝子操作を駆使して不要な因子を全て排除して産まれて来た深雪は、期待に違わぬ魔法資質と、精神干渉系魔法を備えていた。同時に精神を凍結させる系統外魔法で、深雪のBS魔法して固有魔法、コキュートスまで備えている事が分かつていた。英作が期待した通り、達也の対抗手段になり得る存在になる。英作にこの事が露見すれば、分家達に利用されかねないと感じた真夜は、英作に深雪の固有魔法の存在を黙っている事にした。深雪が万が一にも達也にコキュートスを使用しないように対応策を考慮する事になった。深雪は達也と比べると格段に成長が遅いように思えたが、達也の成長速度が異常に速いだけで、順調に成長している。深夜も深雪を溺愛しており、徐々に自身に似て来た愛娘に最大限の愛情を注いでいた。深雪の誕生日は深夜達で盛大に祝われ、集まった者達は確かな絆が形作られていた。

四月二十四日真夜の息子、達也二才の誕生日を迎えた。真夜は朝から張り切っていた。あまり料理は得意ではない真夜だが、愛する息子の為誕生日ケーキを焼いていた。何度も失敗しながら、挑戦し、最高の誕生日ケーキをプレゼントすべく試行錯誤を繰返しながら、漸く、誕生日当日、自信作の誕生日ケーキを完成させた。当の本人は目覚ましい成長を見せていた。産まれたばかりの頃は白みがかった銀髪だった髪も、何故か白

みが増し、輝いて見える様は神秘さを増していた。身長110センチ、体重も22キロにまで達し、幼稚園児と混じっても遜色ない体格にまで育っている。好奇心旺盛で頭脳も二才児とは思えないほど賢く、父親譲りの身体能力をも発揮して裏山を駆け回るなど、真夜だけでは手に負えず、伊吹や執事達まで駆り出されるほどだ。ある日目に涙を浮かべた達也を抱えて、伊吹が真夜のもとへ帰ってきた。伊吹の慌てように理由を尋ねると、野兔が怪我をしているのを見付けた達也が左手を突き出し魔法を発動させたとの事。伊吹と真夜は達也が再生を発動させたと理解した。

しかし伊吹の話聞いても、達也が泣いている理由が解らなかつた真夜だったが、伊吹の話の続きを聞いて愕然とした。再生を行使した達也は急に苦しみ出したという、幸い命に別状はなかつたが、再生を行使した際のリスクが浮上し、詳しく調べる事になった。深夜の手も借りて調べた結果、再生は対象が24時間内であればエイドスを全て読み取ること、損傷前のエイドスを現在のエイドスに上書きして損傷をなかつた事にする魔法だと分かった。その際、読み取ったエイドスには苦痛も含まれる為、使用した達也自身に遡った時間に比例して、何倍にも凝縮された苦痛が、精神と神経に還元されたという内容だった。調査結果に達也が受けた苦痛を想像しながら真夜は唇を噛み締めた。真夜は苦渋の決断を迫らせていた。今後、達也は再生を行使する度に精神と神経にダメージを受ける。達也を守る為、実戦的な訓練を行う事で痛みに慣れさせる事を選

ぶ。一年計画を前倒して、伊吹に体術の稽古をお願いした。それだけではない、近接戦闘訓練をも頼んだ。伊吹は真夜の言葉を正気の沙汰とは思えず耳を疑ったが、悲痛な真夜の表情を見て、事態は思っている以上に深刻だと悟り、心を鬼にして真夜の頼みを聞き入れた。その夜真夜と伊吹から解決案を聞かされた深夜と穂波、小学六年生になったばかりの伊万里と三人が反対したが、二人の説得を受けて渋々同意した。深夜と穂波はこれから過酷な訓練が待ち受ける達也を思い涙を流した。主要なメンバーで話し合った日から一週間が経ち、達也の二才の誕生日を迎えた。翌日からは過酷な訓練が達也を待ち受けている。今日は達也にとって平穏な日常最後の日なのだ。盛大に誕生日を祝い、真夜から達也へ訓練の事が告げられた…

翌日から伊吹は心を鬼して達也との訓練を行った。達也は蹴られ、殴られて泣いていた。それでも伊吹は訓練を続けた。来る日も来る日も達也を痛たぶり続けて、達也も泣きながら訓練の日々に身を置いた。虐待とも云える訓練の日々だったが、真夜達は訓練から帰ってきたボロボロの達也を、毎日涙を流して労った。それだけが幼い達也にとつて心の支えであり、寸前で暴走せずに済んだ理由でもある。

訓練に際して、達也の食事はこれまで以上に栄養に気が使われた。今でも父親の血筋のお陰で丈夫な身体を持っている達也だが、過酷な訓練にも耐えられるよう更に栄養を与えられた。日々訓練は過酷さを増していくが、達也は予想を遥かに越える速度で成長

していき、伊吹に反撃するまでになっていた。達也の潜在能力と、飲み込みの速さに伊吹は驚き、達也の肋の骨を折ってしまふ。然し、達也は表情を歪ませ目に涙を浮かべるものの、次の瞬間には伊吹に再び反撃して来た。肋が折れた瞬間達也の自動修復機能が発動していた。伊吹にも感知出来ないほどの一瞬で、達也は自身を遡り、巻き戻していた。

訓練後、真夜に一連の出来事の報告を行い、真夜が伊吹の判断で攻撃の強度を上げるよう指示した。伊吹から報告を受けた真夜は、この日もボロボロになって帰宅した我が子を労りながら胸が張り裂けそうになった。そんな真夜を一番辛い筈の達也が真夜を優しく抱き締める。我が子の優しきで余計に悲痛な心境になってしまった真夜だったが、達也に勘付かれないように、必死にそんな自分を押し殺していた。

達也の訓練を開始してから半年経ち、分家の者達の間でも達也に対しての、異常とまで云える訓練の噂が広まっていた。訓練の理由を知らない者達は好き勝手な憶測を飛ばして、達也を危険視していたと同時に、事故を装って殺害をも企てようとしていた。達也の出生の秘密を知らされていない女中達も、そんな達也を気味悪がつて近付こうとすらしなかった。中には神秘的な容姿に惹かれ、世話を望む者もいたが、達也の存在は暗黙の決まり事で干渉する事さえ禁止されている状態だった。

時は過ぎ、新年を迎えて一層過酷な訓練に変貌した。伊吹も徐々に加減の程度を引き

下げていく。伊吹の娘と息子の水波と伊織が一才の誕生日を迎え、その二週間後には深雪が二才を迎えた。深雪も成長し、幼いながらも達也に興味を持ち出していた。しかし、深雪の固有魔法に対する解決法が未だ見つからず、解決法が見つかるまで達也とは過度に接する事は控えさせている。部下の報告から日に日に戦闘能力を向上させていく達也を、これ以上放置出来ないと判断した人物が、ある計画を実行しようとしていた。それは達也が三才の誕生日を迎えて暫くしての事だった。遂に達也が分解を「初めて行使する出来事」が起きる。分家の一人が刺客を送り込み、訓練を終えたばかりの伊吹と幼い達也に数人で襲い掛かって来た。伊吹は咄嗟の出来事にも拘わらず、魔法の兆候を察知し古式術式で緊急回避を試みた。しかし、標的の先には達也が居た。伊吹は緊急回避を断念して、達也を攻撃から守る為自身を盾にして達也に覆い被さった。鈍い肉が裂ける音、鉄の匂いが達也を襲う。達也に怪我がない事が分かると伊吹はその場に崩れ落ちた。伊吹の内部から飛び散った血が達也の目尻を紅く染めたと同時に、達也から黒い想子が溢れだし渦を巻いて達也の周りで激しく活性化した。達也の眼は鋭く刺客達を捉えていた。達也が右腕を左胸から右側に勢いよく振り抜くと、達也の領域干渉内に入った刺客達は一瞬にして跡形もなく消え失せた。それは達也が標的にした全方位、領域干渉内に存在する物質を原子レベルまで分解する魔法。圧倒的な魔法力と想子保有量を持つ悪魔サタン、フェアミリアの一族の直系の末裔の達也だからこそ可能な絶対的な魔法ちから。敵を一掃した達

也は切り刻まれた瀕死の伊吹のエイドスを全て読み取って遡った、左手を伊吹に翳^{かざ}し、再生を発動した。激痛が達也の精神と神経に苦痛を凝縮して襲い掛かる。伊吹が意識を取り戻して達也を見上げると、そこには苦悶の表情を浮かべながらも、意識をしつかり保ち伊吹の容態を案ずる達也の姿があった。漸く現状を把握した伊吹は周りを見渡したが敵はいなかった、いや、達也が跡形もなく消し去ったと判断した。真夜から事前に聞かされていた分解と黒い想子、達也の憤怒が黒い想子を活性化させ、尋常ではないほど魔法力（速度、強度、規模など）が向上するらしい。それ故に一度の分解で領域干渉内にいた敵全てに標準を合わせ一掃出来た。聞いていた以上に馬鹿げた能力に伊吹は思わず失笑してしまった。しかし、過酷な訓練を一年継続して来た効果は確実にあったようだった。

伊吹と達也は急いで本邸に戻った。凄まじい魔法の発動兆候を感じ取った真夜達は達也と伊吹を慌てて出迎えた。興奮状態の真夜は達也に異常はないか隅々まで検査していた。伊吹の口から先程の出来事を聞かされた真夜は激しく憤っていた、直ちに報復を行いたかったが、黒幕がハッキリしない。心当たりが有り過ぎて話を聞いただけでは特定は出来なかった。犯人を訊問や拷問をしようにも、達也が跡形もなく消し去ってしまった。今回に限っては、特定するのは困難だった。一方、予定の時間になっても連絡がない事に苛立ちを覚えているのは、今回の黒幕の人物だった。細心の注意を払

い、完璧なタイミングで奇襲を仕掛けたにも拘わらず、計画は失敗してしまつた。今回の失敗で真夜達が警戒度を引き上げるのは明白で、今後、単独で再度試みる事はより困難になつてしまつた。

三才にして実戦を経験する事になつた達也にも幼児らしい夢があつた。其れは達也が真夜と読書をしている時の事だつた。知識欲もこの頃から躊躇になつて来た為、達也がリクエストした凶書を真夜達大人で解説しながら、読書と勉強を兼ねて行つていた。達也に瞬間記憶能力が備わっていると分かつた時には、あまりの高スペックぶりに大人達は感心するより若干呆れていた。ある日真夜と物理の勉強をしていると、達也は幼児らしい壮大な夢を真夜に告げた。それは達也にとつて初めて出来た夢でもある。真夜は笑顔で達也なら将来出来るわよ、と子供らしい発想を口した息子を愛でながら、一緒の時間を過ごす幸せに浸つていた。そんな真夜に達也は一つ約束をした。勿論、おとぎ話のような夢を真に受ける真夜ではないが、達也の夢を壊さないようにお願いする事にした。当の達也は幼いながらも本気だつた。その夜、真夜が昼間達也が口にした壮大な夢を深夜達に聞かせてみた。深夜達は子供らしい壮大な発想と夢を、達也が自信満々に話す姿を想像しながら、達也が将来どんな大人になるのか談笑していた。

各家のある一日～突然の来訪者

―西暦2082年9月3日―【黒羽家】――

達也が真夜に初めて抱いた夢を語り、ある約束をした日から数カ月の月日が経った。黒羽家の文弥と亜夜子も二歳の誕生日を迎え、黒羽家では盛大に双子の生誕の日を祝っている。双子の両親の貢と亜弥も産まれてからこの二年、日々成長する我が子を溺愛している様子だ。重蔵は去年に引き続き双子の誕生日に英作を招いていた。何故、英作が黒羽の双子の誕生日に招かれているかという点、去年の双子の誕生日、英作に魔法解析を行って貰った時の事。

「先代様、文弥と亜夜子を視てもらえませぬか？」

「うむ、よかろう。二人をここへ。」

自身を慕う重蔵の頼みに応え、英作は双子の魔法解析を行う事にした。

まずは姉の亜夜子、結論から云えば魔法力は特段優れてはいなかった。確かに優秀な魔法資質だが、英作は達也も解析していた為どうしても比較してしまう。真夜が母親とはいえ、他を追随させない圧倒的な資質は、やはり悪魔サタン・ファミリアの一族の血筋のお陰と云うしかない。その事を重蔵も悟った為、二人は苦い顔になる。そんな二人の顔を見て、貢と亜

弥は訝しげな表情を見せる。要らぬ誤解を生んでしまった英作は、二人を安心させる為、更に解析を続ける。すると、次の瞬間には英作の言葉に貢と亜弥が飛んで喜んだ。それは「事象改変領域」が四葉でも他を凌駕している事。それは事象を改変することができる領域の広さを示す能力、英作は深雪の解析には立ち会っていない為知らないが、亜夜子は深雪よりこの能力で優れている。そのぐらい亜夜子はこの能力で優れていた。次に弟の文弥、こちらも達也に比べれば劣っているが、基準を四葉に戻せば貢を遙かに超える魔法資質を備えていた。更に精神干渉系の固有魔法まで備えている。堂々と次期当主候補を名乗れる、正に四葉の申し子と云えるほどの逸材。それは新発田家の勝成以上の素質で、子供世代の次期当主候補の資格を持つ者の中では一躍首位に躍り出るほど。英作の解析結果に二人は亜夜子の時以上の喜びようで、端で見守っていた重蔵も歓喜する。

「流石、私と亜弥の子だ。これで将来、黒羽家の安泰ばかりか、四葉家次期当主の座も夢ではなくなったぞ。有難うございます、英作叔父様」

「……農もまさか、勝成以上とは思わなんだ。しつかり教育するがよい、貢よ」
「先代様、宜しければ来年も農らと祝つて下され」

重蔵の提案に、貢も亜弥も頷いて賛同した。三人から打診された英作は結局、今年も訪れる事になった。重蔵はこれ以上真夜と深夜に好き勝手させないよう、まずは英作を

味方に引き入れたい思惑があった。問者の報告で日々凄まじい勢いで成長を続ける達也を、誰よりも危険視している重蔵は、自身の孫があ達也の化物の抑止になり、四葉の未来を担う救世主になると期待し、貢を通して英才教育を双子に施すようになる。

―西暦2083年3月14日―【京家】――かなぐりけ

深夜の出産した日に真夜が伊吹に打診してから約三年、正式に京家が去年の慶春会で分家の仲間入りをして二年以上が経つ。これまで様々な出来事があつた。その中でも訓練を終えた達也と伊吹が敷地内で襲われたと聞いた時は心臓が止まる思いをした。危惧した事が実際に起きてしまったと、冷静では居られなかつた。それでも真夜に忠誠を誓う京家の当主として達也を守つた事は流石だと、改めて夫に着いていこうと思えた瞬間でもあつた。他にも嫌がらせもあつたが、最近では当主の伊吹も大して気にした様子もなく、家族五人は毎日幸せな時を過ごしている。伊万里は四月から中学二年生に進級する。伸長もここ一年で大分伸びて、声変わりも始まつている。肝心の魔法技能も兄、伊吹と稽古が増えて、陰密術、体術、古式魔法も格段に成長している。ただ「水晶眼」の制御だけが中々伸びてこない。最大の武器に成得るだけに、本人も口惜しそうである。二年前、出産した穂波は深夜の守護者ガードマンを解任された。家庭と子供を手にした穂波を案じて深夜が解任した。穂波は反対したが、伊織と水波の双子、夫の伊吹と義弟の伊

万里との時間を大切にしなさいと、真夜にも進言されて解任となった。四葉に養子として来てから四年弱で、自分ばかり幸福を貰っている気がする穂波は、この恩を返す術で割りとは本気で悩んでいる。

そして今日は二卵性双生児の伊織息子と水波娘の二歳の誕生日。少しずつ顔立ちが形成されて来た水波は、とても穂波に似ている。伊織はどちらかと云えば伊吹似、双子だが二人の背格好は全く似ていない。

魔法資質は二人共に充分優秀な範囲で、共に両親を越える魔法師になると期待されている。

―西暦2083年3月25日―【深夜の家】―

四葉本邸の別邸に当たるここ深夜と深雪の家は、二日前からの積雪で深い雪に覆われている。そんな日に深雪は三歳を迎えた。深夜は自身が母親になって、こんなに過保護にまでなると予想していなかった。日々自身に似てくる愛娘は、目に入れても痛くないほど可愛く、頬が緩んでしまう。それは念願が叶って母親になれた為だが、幼き日の妹と無意識のうちに重ねている事も原因の一つだ。研究の成果と自身が倒れるまで魔法を行使した甲斐もあって、望み通り深雪の魔法資質は、自分達双子をも越える才能を有して産まれて来てくれた。深夜は将来、深雪が甥の達也の伴侶になり、困難な道も支えて共に歩んで行けるよう望んでいるが、深雪の固有魔法、コキュートスの存在が悩みの

種だ。毎日、達也とも顔を合わせているが、万が一を考えて過度な接触をさせない事になってる。深雪が感情に踊らされる事がないよう、深夜は淑女としての教育を徹底して今後行うつもりでいる。それでもやはり、つい甘やかしてしまうのは親の性なのかもしれない。深夜以外にも愛されて育っている深雪は少し泣き虫で、凄く甘えん坊。特に真夜の存在がより拍車を駆けていた。シスコンの真夜にとって深雪は、娘と言つて良いほどの存在で、必要以上に可愛がつている。それはまるで自身を可愛がつてくれる双子の姉を彷彿させるかのように。

「あかあさまー、だっこー」

自身の誕生日会が待ちきれない深雪が強請ると、深夜は駆け寄つて悦んで抱き抱える。この先、自身の望み通りの教育をしつかり行えるのか、少し不安になる一幕だった。

ー西暦2083年4月24日ー【四葉本邸】ー

春の日溜まりが温かいこの日は達也四歳の誕生日。既に伸長は120センチを越えて、とても四歳児になったばかりには見えない。伊吹との訓練もかなり激しさが増して来ており、骨折、切り傷、火傷などは日常茶飯事なほどだ。最近まで激しい痛みに涙する事が多かったが、自身の固有魔法、再生の発動や制御もスムーズになり、体術に関しては伊万里に肉薄するまでになっている。更に成長が見られる事がある。それは威力が大き過ぎる【全方位分解】から【分解】、【オブジェクトの分解】、【部分分解】、

ミスト・ディスプレイジョン、グラム・ディスプレイジョン
 【雲散霧消】、【術式解散】が派生した事だ。達也は伊吹との訓練の他にも真夜と訓練を続けており、自身の魔法技能を確実に物にし始めていた。そんな達也は強さだけではない。この歳にして興味を持つ分野と種類が凄まじく広く、余りにも熱心に強請るものだから、真夜は達也専用の研究兼実験を行う施設と機材等を用意する羽目になる。暇を見つけては、達也は其処に籠って真夜と何かを行っている。そんな規格外な勢いで成長を続ける、達也の誕生日を皆で祝いながら、息子がどんどん逞しく育つ様を見て、真夜はベンジヤミンを毎回思い浮かべている。

ー西暦2083年6月某日ー【新発田家】ー

夏の足音と、梅雨の湿った風が入り交じっているこの日の新発田家、達也より五つ年上の勝成は小学三年生、クラスメイト達より頭一つ飛び出ている。理の一人息子でかなりの期待を受けている。魔法力も優秀だが、得意なのは物質の密度を直接操作する収束系魔法の【密度操作】だ。精神干渉系や特異な魔法を得意とする四葉家の中では珍しく普通の魔法を得意としている。体術の稽古も行っており、体格を生かし非凡な才能を見せ始めていた。そんな勝成は、昨年黒羽家の文弥が英作から自分を越える資質を持っていると診断されてから、少し焦っていた。幼いながらもこれまでは自分がいずれ四葉家当主に選ばれ、担って行くものとはかり思っていた。文弥が産まれる前から…そう、穂波が深夜の養女になると発表された慶春会から父、理にも焦りが見られ、稽古も

厳しくなった様に感じていた。勝成も父に触発され稽古に励んでいたが、文弥の才能が発覚してから自身も焦り、苛立ちが増している。そんな勝成を時には諫め、慕うのが、新発田家が困っている一つ年上の【堤琴鳴】、三つ年下の弟【堤奏太】の調整体【楽師シリーズ】の第二世代の姉弟だ。いずれは弟も姉と同じく勝成の守護者になる予定。正確には琴鳴も見習いであるが、自覚を持たせる為に、数年前から守護者だと聞かされている。楽師シリーズは【振動系】、特に音波に干渉する魔法を得意とする戦闘用に使われた魔法師。未だ実戦経験は無いが、琴鳴は攻撃魔法より【索敵】や【幻惑】、【探知妨害】、【ダメージ軽減】を得意とする【戦闘補助型】である。特に自分自身と自分を取り巻く空気の層に音の【情報教化】を掛けることで、肉体的に有害な音波攻撃から身を守る常駐型の防御魔法を弟の奏太と共に得意としている。奏太の方は攻撃魔法の素養も充分伺える。将来はこの二人で勝成を守護し、支えていく事になる。

ー西暦2083年8月某日ー【津久葉家】ー

真夏の日射しが照り付けるこの日の津久葉家、当主の彩歌の娘【冬歌】は今年で二十六歳になり、精神干渉系魔法を得意としている。婿養子の【青司】との間に一人娘の【夕歌】を二十歳の時出産した。娘の夕歌は自身よりも広範囲で【精神干渉系全般】に適性がある資質を備えている。二年前母の彩歌から【半永続的に精神活動を制限する】効果を持つ精神干渉魔法の開発という無茶苦茶な命令を受けた。理由を聞いても話しては

くれず、一族の未來、いや、世界の為だとは明かさねずにいる。彩歌は達也の出生を公表されてから対策を練っていた。母親の真夜の承諾が得られ、尚且つ、達也の能力を制限出来る方法を。そこで一つの策を思い付いた。それは達也の精神活動を制限し、能力を封じ込める魔法を新たに開発する事だった。達也の自我を維持させつつ、マインドコントロールする魔法なら、真夜を説得出来る可能性があった。そこで自身より精神干渉系の魔法を得意とする娘の冬歌に命じる事にしたのだ。自分でも無茶を云つてるのは重々承知している。が、他の分家の当主同様、達也を今のまま野放しには決してすべきではないと考えているのだ。ここは冬歌には是非開発して貰わねば困る、彩歌は何時、内乱に発展するかとかなり本気で心配していた。内乱になれば娘の冬歌や孫の夕歌も巻き込まれると危惧している。新たに加わった京家は確実に敵になる、当主の伊吹は近接戦闘になれば厄介な相手になるし、深夜と真夜、あの双子を本気で敵に廻すと無事では済まないと悟っていた。彩歌は他の当主達より、双子の能力と覚悟を重く見ている。それは四葉の魔法師として、そして子を持つ母親としての確信にも近い直感である。だからこそ何が何でも冬歌に開発させ、他の分家の当主達が本格的に反旗を覆す行動を起こす前に、真夜を説得する必要があるのだ。彩歌の憂いはまだ暫く続きそうだ。

—西暦2083年10月某日—【椎葉家】——

秋の色が随分、周りの景色を染め上げて来たこの日、椎葉家の英嗣のもとに真柴家の

真佐、静家の陽人、武倉家の藍霞が集結していた。この場にはいない新発田家と集まった四家は定期的に連絡を取り合い、真夜と達也の動向を注視しその対策と情報の有を行っている。重蔵が加わっていないのは文弥の存在と、英作を味方に付けて手柄を黒羽家で挙げたいからである。津久葉家彩歌は、平和的解決を望み、余り乗り気ではないという姿勢から、甘い考えだとして端から切り捨てている。集まっている四家も腹に一物あれど、真夜のやり方と達也の存在を面白く思わない者達である。問者スバイからの報告で、真夜が施設と機材を与えて何やら行っている事や、達也自身の戦闘技能の向上具合と魔法技能も共有された。達也の予想以上の成長速度にかなり危機感を感じており、本格的な暗殺計画ですらも平気で議題に上がる。問題は真夜と深夜、それに伊吹だ、三人を敵にすれば、達也の殺害は出来ても此方が全滅しかねない。更に洗脳された真夜直属の暗殺部隊も本家には存在し、警護体制も近年生半可ではない。計画遂行は容易ではなかった、毎回、最後の一步を踏み出せないでいる。仮りに成功しても此方が全滅すれば、参加する見込みがない黒羽家と津久葉家が漁夫の利を得るという構造も話が纏まらない原因でもある。表面上、真夜が先手を打つ様子は見られない為、決断を遅らせてでも、確実性が求められた。こうした会合は此れからも暫く続く事になる。

―西暦2084年1月1日―【慶春会】――

新年の祝いの席、慶春会だけは、達也は大人しくしてねばならない。本人は理由は知

らされていない。真夜からは時が来たら話すただけ言われ、今日は朝から研究兼実験場にもなっている施設の一室に籠り、最近興味があるプログラミングについて學んでいた。施設の周りには真夜直属の暗殺部隊が息を潜めて、達也を護衛している。

深夜、穂波は、深雪、水波と伊織の着飾った姿を微笑んで眺めていた。あまり着る機会がない着物に少し窮屈そうにしながら、式が始まるの待っている。しかし、真夜だけは顔色が優れない。そんな真夜が深夜にある事を告げて来た。

「姉さん、少し良いかしら？ 催しもよおの後に、二人だけで話せるかしら？」
「どうしたの？ 真夜、急に畏まって」

何故か急に畏まった真夜の様子になった穂波だったが、空気を読んで子供達を別室に連れていく。そんな穂波に対して目線でお礼を告げて二人になった処で真夜が話し出した。

「詳しい話はまた後で話すわ。… さつき【あの方】から電話があったの、今年の新年の挨拶には、四葉よつばに御越しになるらしいわ」

真夜が何時にもなく、深刻な面持ちで深夜に告白した。真夜の告白を聞かされた深夜の眼が一気に鋭くなる。二人にとってあの方は、いや、四葉家にとっても無碍に扱えない人物だ。

「目的については見当が付くけど何故、今年に限って… 何処まで知ってるのあの方は

？」

「達也の出生は知ってるわ、けど、何処まで計画を知ってるかは…… 目的は私も姉さんが考えている通りだと思う、何故、今年なのかは…… 訊ねたけどはぐらかされたわ。けど、私達にとつては間違いなく良くない状況なのは事実よ」

「確かにそうね…… あの方は達也に此れまで何か接触はあったの？」

「実は…… 前から面会を望んでいる様子ではあったわ、それでも今回のように直接的な感じではなかった…… だからこれまで波風立てずに居られたけど、今回は流石に無理のようだよ……」

「何故、どうして私に相談してくれなかったの？」

「姉さんには迷惑掛けたくなかったのよ、出来る事なら一人で解決したかったの……」

此所で真夜を責めても話は進まないと考えた深夜は、慶春会が終わってから詳しい話と、対策を考える事にした。その後一族の皆が待つ広場に向かい、滞りなく催しは終わりを迎える事が

出来た。達也を穂波達に託して、真夜に詳しい話を聞く為二人は書齋に向かう。

話を聞くと、真夜が云うあの方は二日後に四葉よつばに来るらしい。目的は達也と顔合わせをする事と、真夜が感じた限りでは他にも目的がありそうだという事。ベンジャミンの家系の事は話してはいないものの、どうやら情報を得てる可能性が高いらしい。【怪物】

と呼ばれるあの方に対して、二人はどう向き合おうか話し合つて、当日を迎える。

—西暦2084年1月3日—四葉本邸—

今、真夜にとつてあの方と表だつて対立する訳にはいかない。対立を避ける為の戦に赴こうとしている真夜が発する空気は張り詰めている。達也は、いつもと違う母親の様子に大丈夫か尋ねた。

「まや、どうかしたの？顔が怖いよ」

達也は真夜を名前で呼ぶ。喃語なんごが抜け始めて、言葉を発し出してからずっとそう呼んでいた。何度か、名称で呼ばせようとしたが、何故だか頑なに拒むのだ。真夜自身は達也の中に変な拘りがあるのが可笑しくて、達也が望むように呼ばせている。そんな達也の問い掛けに真夜は決まりが悪そうに苦笑いで答えた。

「御免ね、そんなに怖い顔してた？」

「うん、それに何かソワソワしてるみたい」

「達也には分かっちゃうのね、流石ね、達也……今日はね、達也に会いたい人が来るの、良い子に出来る？」

「僕に会いたいの？分かった、いいこにしてる」

達也はそれ以上、真夜に質問などはしなかった。少し察しが良過ぎるまだ幼い息子を、真夜は少し心配していた。荒事の話だった場合、察しの良過ぎる息子は大胆な行動

に出やしないかと、懸念していた。

真夜が達也の行動を懸念してから一時間ほど経ち、一台の黒塗りの車が本邸に到着して、一人の老人男性が葉山の案内のもと応接室に通された。待ち構えていた真夜が立ち上がり、部屋に入って来た人物に一礼して、挨拶する。

「謹んで新春の寿ぎを申し上げます。陛下」

「うむ、急に参つて余計な気を使わせたか、真夜よ」

真夜の出迎えに対して、そう返答した人物は、

【東道青波】頭は僧形であり灰色の太い眉にどんぐり眼。眉目秀麗というわけではないが風格のある顔立ち、白く濁つた左目が相対する者の足を竦ませる。もとは【第四研究所】オーナーであり、現在は四葉のスポンサーでもある実業家。しかし、その影響力は単なるスポンサーの域を越えて、政財界にも多大な影響力を有する、言わば、日本を陰から動かす【黒幕】とも云える怪物だ。

「滅相も御座いけません、ご配慮痛み入ります。然し、年始のご挨拶でしたら私の方から参るつもりでは居りましたわ」

「まあ、そう邪険にするでない、今日はお主と腹を割つて話したい事もあつた。四葉こでな」

「陛下を邪険に扱うなど、滅相も御座いけませんよ。さて？ 依頼の件以外には、今の処特段

思い至りませんわ」

「この東道青波に向かつて、そのような恍惚とぼけた話は不要ぞ。小娘」

「あら？ お気に障りましたの？ ほんの戯れでしたのに」

「否、儂にその様な口を聞ける小娘など、他にはお主の姉ぐらしか思い付かん。悪くないが、出向いた理由わけは察しが付くだろう？」

「…… 息子の顔を拝むこと以外にですか？」

「惚ける必要はない、お主が獲物を始末しようとしてる事ぞ」

東道の発言に真夜は眼を見開く。それは誰にも、姉の深夜にさえ、まだ口にしてない計画だったからだ。しかしこの怪物にはお見通しである。

「…… その事は誰にもまだ話してはおりませんが、何処から情報を仕入れられたのです？」

「簡単な事、お主が獲物にしておる者達の動向から推察したまで」

「…… なるほど、彼らが私と息子の周りで嗅ぎ回つてる動きとその計画に、私が気付いていると察しられたわけですね？」

東道は無言で頷く。真夜は達也の殺害を目論む分家の当主達が、間者スバイを使って情報を仕入れている事を知っていた。逆に真夜は刺客を放ち、敵の情報を入手している。以前達也が襲われた時の反省を踏まえて、獲物を狩る準備を整えて、わざと情報を入手させ

ていた。そして一週間後、達也の殺害を目論む分家の当主達を、一掃する計画を実行しようとしている。

「儂が今日参った理由わけはこれで分かつたろう、但し、止めようと、お主が簡単に意見を変えらとも思えぬ。其処で提案だが、計画を八年ほど前倒して四葉を出てはどうか？」

何処まで真夜の計画を知っているのだろうか、この怪物は。東道が真夜に提案した通り達也が十三才になれば、真夜は共に四葉を出ていく計画を建てている。何故十三才かと云うと、悪魔サタン、ファミリアの一族では成人の儀があり、十三才で成人とする慣わしがあると云う。真夜は遺言としてベンジャミンが一族についての歴史、魔法、慣わしなどの情報を詰め込んだ【記録媒体】を受け取っていた為に知っていた。そして達也にも同様に成人の儀を執り行い、満を持して四葉を去るつもりでいたのだ。が、何故、この怪物は真夜がその通りに行動すると思ったのか。

真夜は無言で東道の顔を覗く。白く濁った左目からも眼を逸らさず、逆に鋭い眼光を飛ばす。何分もこの状況は続き、漸く真夜が口を開く。

「陛下、その提案を為さる目的は何ですか？」

「目的か……二つある。一つは四葉を存続させる所以、二つめはお主の倅を守る為だ」「何故、達也をお守り頂けるのでしょうか？」

「儂はもとは四葉よつばの所有者だった、それは研究によって【最高作品】を造りたいという願

望からだ。しかし今は儂の手を離れておる、四葉直系のお主と悪魔サタン、ファミリアの一族の直系の子である倅はまさに究極と云える存在だ。その行く末を見届けたいというのが儂の思いぞ」

東道は真夜に面と向かつて魔法師を作品だと言いつつ、自身の事より息子を作品扱いされた真夜の蛭谷こめかみが一瞬、動いた。殺意が一瞬沸き上がったが、直ぐに冷静になり、対応を続けた。確かに魔法師は兵器として開発された歴史がある、それは事実なので第四研究所を所有していた東道の価値観がそうだとしても不思議ではない。問題はこの怪物が達也をどう利用しようとしているかだ、真夜の意識は其所に向いていた。

「達也を使って何を企んでおられるのでしょうか？」

「企みか、不粋なことを申すな、お主の倅が己のしたいように生きれば、儂の想いも成就するだろうて」

「達也の望む通りですか？息子は縛られるのは嫌いますよ、ベンジヤミン父の家系は世界に抗う者ですから」

「それでも良い、お主の倅が突き進む覇道を見届けようではないか」

東道の言葉は真夜を驚愕させた。ある意味、この国を裏から守護している人物の言葉セリフとは思えなかった。然し、その表情はいずれ来る新しい時代を楽しみにしている顔であった。この日の会談は此にてお開きとなり、後日、返答する事になった。話が終わった真夜は、東道の目的の一つである達也との面通しを行うため、葉山に連れて来させた。

部屋に入つて来た達也は真つ直ぐに怪物を見詰めていた。ここで初めて怪物と怪物が顔を合わせた。

「達也、此方は東道青波陛下よ、ご挨拶さない」

然し、達也は真夜の命に答えず、そのまま暫し、見詰めたまま動かない。其れはまるで相手を値踏みするかの様に。流石に、真夜が注意しようとした時、達也は口を開いた。

「初めまして、青波おじちゃん、四葉達也です」

達也の碎けた口調を、真夜が慌てて注意しようとした。達也は四歳だが、もう少しまともな言葉使いで挨拶出来る。最低限度の挨拶の仕方は心得ているはずだが、わざと碎けた口調で挨拶した様に真夜には見えた。東道もその事を察したのか、珍しく大声を上げて、笑い出した。真夜が何事かと思つて、東道に目を向けると、左手を差し出して、真夜を制した。

「実に生意気、且つ、面白い童ぞ！この東道青波を敢えて無碍にするか、こいつは大した大物よ。おい、童、そのまま育て。自由を求めてな」

一言、達也に告げて、東道は帰つて行つた。達也とあの怪物の間で、何が起こつたのか真夜には理解出来なかつたが、予想通り息子の達也が大胆な行動を起こした時は少し肝が冷えた。然し、達也は至つて冷静で何事もなかつたかの様に真夜の腕を掴み、自身の為に用意された施設に真夜を連れて行くのであつた。

棘
～
新生活

真夜は東道との会談を終えて、達也の研究兼実験所がある施設に来ていた。真夜を引つ張つて来た達也が何やら話しているが、上の空で全く頭に入つて来なかつた。

真夜は悩んでいた、自身の予定に大幅な修正が求められるかもしれない今の状況に。四葉が出るのは、達也の「成人の儀」を目安にして、あらゆる準備と計画を進行させてきたからである。それでも分家の当主達の想像よりも早く当主の座を降りて次期当主を発表する事になる。準備に関しては、一族の目を欺いて計画を完了させるには充分だと真夜は考えていた。達也が十三才を迎える年の慶春会で次期当主を発表し、四ヶ月という短い期間で引き継ぎを行う事で此方の思惑を探る時間よゆうなど与えるつもりもなかつた。しかし先程の東道との会談により、計画に大幅な修正を加えなければならぬかもしれない。達也殺害を目論む分家の当主達、反乱分子の一掃は四葉家内の問題、何時強行するかも分からない輩をそのまま放置する事は出来ない。かといつて東道の忠告に反して強行してしまえば、あの怪物を敵に廻してしまう恐れが生じる。姉と京家が味方についても少数の戦力だけでは、あの怪物の魔の手から達也を守りきる確信は持てなかつた。東道の思惑に乗るにしても、その後の収入源がまだ定まっていな。ここ数年

伊吹や直轄の部下を使い私的な資金調達を行つて来たもの、新しい生活を営む際の資金であつた。それは計画実行の年まで続けるつもりでいたのだが、それが八年も早まれば予定していた金額に狂いが生じるのは至極当然である。真夜は大事な選択の岐路に立たされていた。

深夜は妹とあの無碍には扱えないスポンサーとの会談の様子が気になつていた。達也の父親について既に知られているとすれば、妹にとつて良くない状況に陥るのは目に見えている。達也に受け継がれている遺伝子は、伝説上の遺伝子と言つても過言ではない。それだけではなく相手は魔法師を兵器としか考えない思想の持ち主。深夜はその事を元蔵から聞かされて知つていただけではなく、実際に話してみても同じように感じた。そんな相手がただ達也との面会を求めてきただけとは考えられない。達也は深夜にとつても息子同然に可愛がつている存在であり、自身が唯一愛した男性の血を受け継ぐ者でもある。深夜は自身が選ばれなくとも、それでも想いを募らせ続けた。いや、亡くなつた今も尚想い続けている。

その夜、真夜に会談の内容を詳しく聞くべく真夜の書齋で二人だけで密談していた。真夜の話では相手はかなり此方の情報を得ているらしい、悪魔の一族の事から此方の計画と実行時期に至るまで。流石にそこまでは想定外だつた深夜だが、まだ他にもあるの

か切り出し難そうな真夜を見かねて、会談の全てを話すよう詰め寄った。すると、真夜が達也殺害を目論む分家の当主達を近々一掃しようとしていた事を告げられる。それを東道に計画を見破られ、思い止まるよう説得されたばかりか、代案として四葉から出る計画の前倒しまで勧められて決断を迷っているという内容だった。深夜は真夜の計画よりも何の相談もなく全てを一人で背負おうとしている事を責め、真夜の頬を平手打ちで打った。

「真夜、私が怒っている理由が分かる？」

真夜は打たれた頬を押さえ深夜の質問に対し、無言で頷いた。自身が何故姉に怒られているのかしつかり理解していた。それでも深夜の身を案じて話さなかった、矛盾してようが、同族殺しの汚名を自身で全ての責任を取る覚悟であった。

「貴女が達也を出産した時に、言った事は覚えてるでしょう？」

「それは、覚えてるわ。…それでも極力姉さんには辛い思いはして欲しくないの」

深夜があの日、「何があっても守るから安心しなさい」と宣言してくれた事は嬉しかったし、心強かった。信頼も頼りにもしているが、どうしても苦難な道に引きずり込んでしまう姉に対しての罪悪感が拭えない。深夜を出産した時の幸せそうな姉の顔がいつも瞥ちらいてしまう。心の何処かで姉と深雪は四葉家に残した方が幸せじゃないのかと思いはじめていた。

「真夜、私の眼を見なさい。…この際だから告白させてもらうけど」

深夜に促され、真夜は目線を深夜に合わせる。すると深夜が告白した。

「私は今でも彼の事を愛してるわ。それは彼が貴女を選んだ時も、亡くなったと聞かされてからも、この気持ち色が褪せた事は唯の一度も在りません。…妹の貴女に嫉妬した事は数えられない程あるし、涙で枕を濡らした日も一度や二度ではないわ。真夜、私はね、貴女の息子だからという理由だけでなく、愛した人の子供だから守りたいという女としての願望もあるの。私の想いを余り甘く見ないで頂戴」

深夜の想いを綴った告白に真夜は何も言えなかった。確かにその通りだった。女としての幸せを自分は少しの間だが確かにベンジャミンから貰った。それに対して深夜は一度もそのような経験はないのだから。自身の身勝手ばかりで振り回していたとばかり思っていた真夜は、深夜の覚悟の意味を初めて知った。

「…分かったわ、姉さん、此れからは辛い決断も一緒に背負って頂戴」

「ええ、望むところよ、彼へのこの想いは真夜にも負けないもの」

「ふん！幾ら姉さんでもそれだけは譲れないわ！私の方が彼を愛しています」

「いえ、私よ」

「私！」

子供の様に二人で張り合う内に、何時しか重苦しい空気は消えて二人は笑い合った。

約二十年お互いが話題を避けて来た為、知らず知らずの内に胸の奥に棘が突つ掛かつている心境だったが、それが今日取れたような気がした。暫く笑った二人は今後の方針を決めるべく本音で話し合う。まずは達也護衛の強化の為、人員の増強と一日のスケジュールを決めた。次に分家の当主達の処遇と東道からの代案についても話し合った。二人の話し合いは難航し、揉めに揉めて朝方近くに話は一応の纏まりを見せた。続きはまた夜に話し合う事になり、一端此処で中断された。達也の護衛強化に関しては、この日から実行に移された。

そしてその夜、二夜続けて二人の密談は続く。その次の夜も、その次の夜も……四夜続いた密談は此れからの方針に決着を着ける事になった。流石に四日続けての徹夜に、双子は疲労の色が隠せない。そして真夜は深夜と話し合つて決めた方針を、東道に連絡し、自分達の決断を伝えた。その際に真夜は東道に対して支援と協力を求めた。東道は真夜からの要請に頷き承諾し、日時について話を聞いた。

東道との電話を終えた真夜は、深い溜め息を溢して椅子に腰掛けた。暫くまともに寝ていない真夜は自身の書齋でそのまま寝てしまった。

翌日、真夜達が新たに方針を固めて決意新たに行動を起こそうとした矢先、葉山から知らせが入った。其れは黒羽重蔵の訃報であった。二時間前に突如苦しみ出した重蔵はそのまます息を引き取つたとの事で、死因は心筋梗塞だという。幾ら現代の医学が発達

したと云つても、其れは決して万能ではない。後日重蔵の計報により一族総出で重蔵を見送つた後、その場で真夜から黒羽家の当主に貢が任命されたと同時に、集まつている者達に衝撃な発表が真夜の口から告げられた。そして一週間後再び一族に対して本家への召集が掛かった。余りの急な展開に誰もが言葉を発する事が出来ないまま、真夜は本邸に帰つて行つた。真夜の発表の真意を確かめる為、英作は真夜と話し合う事にした。そこで真夜の真意と決断を聞かされた英作は頭を悩ませた。説得を必死に試みたが、東道がこの話に絡んでいると解ると眼を見開き無言になる。其れでも納得出来ない英作は、理由について尋ねると分家の当主達の計画を知らされた。話終えた真夜の眼は此れでもこちらは譲歩したと言わんばかりの表情であつた。英作は具体的な解決案が直ぐに思い付く筈もなく、真夜の決断を黙認する形になつてしまう。こうして一週間が経ち、再び本家に一族が集つた。この場には真夜に召集され子供達も、執事もメイド達も集められている。真夜が軽く挨拶も済ませると、直ぐに本題に入つた。

「それでは、本日お集まり頂いた理由の次期四葉家当主を発表します」
真夜の言葉を遮り、其れを口に出したのは新発田理であつた。

「御当主様、幾らなんでも急過ぎるではありませんか？何故、このタイミングなのですか？その理由もお聞かせ頂きたい」

近頃では既に真夜に対しての尊敬も畏怖すらも分家の当主達からは余り感じられず、

こうした不躰な言動が目立って来ている。真夜は何時にもなくそんな理を睨めつけた。重苦しい空気が辺り一面を覆うが、分家の当主達は其ほど臆した様子は見られない。しかし両者の関係を知らない分家の家族や、執事とメイド達の顔は強張っている。そんな中、真夜の代わりに深夜が口を開いた。

「理さん、四葉家の当主が話しています、口を閉じて黙って聞いて下さいな」

深夜はそう告げると、自身の精神干渉魔法の起動式を組み上げた。以前、理自身も行使された魔法に思わず身構える。いきなりの展開にその場にいる者達は各々の反応を見せる中、英作が理を諫め、理は唇を噛み締めて押し黙った。深夜と英作の援護を受けて、真夜が再び本題に入る。

「余計な茶々が入りましたが、改めて次期四葉家当主を発表します。次期当主は津久葉冬歌さんに任せたいと思います。師族会議にも津久葉家の存在を明かし、正式に冬歌さんを後継に指名する事をお伝えしたいと思います」

「え、私ですか?」

此処までの話の流れにもついていけない冬歌は、自身が次期当主に指名されるなど微塵も思っていないかった。逆に内心で期待していた理を始め、他の分家の当主達は冬歌が指名された事に納得がいかない。すると、真夜の一声でその場に達也が登場した。これまで秘匿されていた達也の登場に分家の当主達の顔は苦い顔に変わり、素性を知らな

い者達は訝しげな表情と困惑の顔に変わっていく。騒然の中、真夜から自身の息子だと紹介されて、明かされた者達は絶句していた。そして冬歌を指名した理由として達也殺害を目論んだ分家の当主達の名が明かされ、辺りが夜に包まれた。自分達の動きを知られていると思っていなかった反逆者の一人が、自分達がこれから迎える結末に抗うべく反撃に出る。しかし、その魔法が発動される事なかった。

グラム・デイスバージョン

術式解散、達也が魔法を発動させようとした理の発動兆候を真つ先に感知し魔法式

を消し飛ばした。魔法が魔法式ごと消された理が達也を睨むと同時に、理の右腕の肘から下が分解される。血が飛び散り、理が悲鳴を上げた。真夜に向けて攻撃しようとした理を、達也はまるでゴミを見るような目付きで眺めていた。達也の能力など知らされていない者達は怯えて悲鳴を上げる者や、反撃態勢に入ろうとする者など各々の反応が見られたが、突如黒い想子が達也の回りで渦を巻き激しく活性化した。達也の干渉強度が著しく上がった領域干渉内で魔法を維持出来ず、真夜の流^{ミレテイア・ラン}星群が強制的に解かれた。真夜を含め、皆が眼を見開き無言で達也を見つめる。達也はこの場にいる者の心境など気にした様子もなく真夜の側に腰掛けた。真夜が想子を抑えるように達也に告げて漸く達也は黒い想子を収めた。津久葉彩歌は想定以上の成長を見せる達也に臆しながら、理の止血に向かった。父親の理を攻撃された勝成は怒りで反撃しようとした一人だったが、得体の知れない者への恐怖から何も出来ず、結局睨み返す事しか出来なかった。

彩歌が理の止血を済ませると、真夜は達也殺害を目論んだ者達を肅清するつもりだった事を告げた。しかし深夜と話し合った結果、東道の提案通り予定を早め、四葉を去る事を決めたと発表する。東道の名と、四葉を去るといふ事を決断した事を告げられた大人達は放心状態であった。そんな放心状態の者達へ向けて真夜は宣告する。

「今回は姉の温情を汲んで肅清は行いませんでしたが、今後私達に干渉する事があればその時は容赦はしません。それだけ理解してもらえれば此方から皆様に対して干渉する事は在りません。その事を肝に命じて下さい」

直系が二人も四葉から脱退する事など有り得ない話だが、一同は平伏するしかなかった。東道の協力を受けているとなれば、四葉としてもこれ以上の足掻きは無意味であった。下手に刺激して一掃される事に比べれば、二人が荒らした秩序を正して四葉家を再興する事の方がメリットは大きかったのである。

こうして冬歌は四葉冬歌に名を改め、四葉家の当主に就いた。暫くは真夜から引き継ぎを受けて日々を過ごす。英作にも助力を貰いながら四月を迎え、何とか完全に冬歌に業務が引き継がれた。真夜達が去った後は、引き続き英作の助言は行つて貰う事になった。

西暦2084年4月18日、魔法師界を震撼させる出来事が起きる。真夜から師族会議に対して津久葉家の存在が明かされ、次期当主に冬歌が就任した事が発表された。各

家から詳しい説明を求める声と驚きの声がかかる中、七草家の弘一だけは新たな野望に胸を膨らませていた。

達也五才の誕生日を迎え、真夜達は三家纏めて引越しを行った。真夜は以前から新居については用意していたが、暫くは東道が用意した住まいに御世話になる事にした。理由は予定以上の大人数になった為、隣の家も買取り改装し、地下通路で互いの家を繋ぐ工事と、達也の為の施設を新たに地下に造る工事を行う為だ。

それから半年ほどが経ち、工事も完了した新居への移動が決まり総勢九人での移動が決まった。その際、新たに家政婦を二人雇う事になる。葉山達は四葉家の執事という事からそのまま残して来た為、新しい生活に執事はいない。

この半年で真夜と深夜はエステサロンを開業、新しい化粧品も開発し、美しい双子の姉妹が営むお店と化粧品は瞬間に大好評となった。二人には経営の才能もあり、新居へ移る頃には二つ目の店舗もオープンするまでになっていた。裏の稼業も引き続き東道からの依頼で行われ、伊吹が此れまで通り担当する事になった。この為、生活していく資金に困ることは結局無かった。そんな真夜に接触しようとして来たのが七草弘一である。再婚した妻にも先立たれ、再び独身となった弘一は今度こそ真夜と婚姻を結ぼうと、四葉の庇護が及ばない真夜に迫ろうとした。しかし弘一が接触を図ろうとする、正体不明な勢力に邪魔される。実は弘一の行動を先読みした深夜から東道へ助力が

求められていた。そうした経緯もあり弘一は接触出来ずにいた。

それから一年の歳月が過ぎ、英作の訃報が葉山によって知らされる。真夜達は分家達からの反発を受けて葬儀には出席出来なかった。英作の死去により新生四葉は、激しい権力闘争が内部で起きる事になる。その為、此れまで以上に四葉の悪名が世間を轟かせる事になった。

更に二年の歳月が過ぎた。この頃になると伊吹でも体術の相手をするのに苦勞し始めていた。そんな達也の相手を東道が九重寺の九重八雲に体術の指南を依頼する。世捨て人の八雲にとっても、東道は無下には出来ない。それに四葉の情報を探っていた八雲にとっても、達也の存在は興味深いものであった。八歳にして果心居士の再来として【今果心】の異名を持つ九重八雲の最年少の弟子となった。

双子の生き甲斐く達也の成長

西暦2092年4月24日、達也は十三才の誕生日を迎え真夜達に盛大に祝福を受けていた。四葉を出てから色々な事があつた。八才の時八雲の弟子になり、十一才の秋まで毎日稽古に励んだ。真夜達の事業も年々拡大し、全国に二十店舗を構えるまでに成長した。四十二才になった真夜と深夜だが、その美貌はたゆまぬ努力も相まって二十代にしか見えない若さを保っていた。

二人が美容に気を掛ける最大の理由は達也の存在である。達也は年々凛々しく成長を続け、今では真夜達の身長を越え、その見た目も父親の中学時代にそっくりに育つていた。そんな達也は帰国した際に二人をデートに誘う。それは二人にとって生き甲斐でもあつた。達也は十一才の秋に【MIT】(マサチューセッツ工科大学)に通う為に渡米した。達也の護衛には東道が手配した部下が二十人現地入りし緊急時に備えている。その為、休みの期間しか日本には滞在していない。

今回の誕生日には真夜から達也へ遂に全てが語られる事になっている。この春休みを利用した帰国は、達也にとつてそれだけの意味ではなかった。勿論八雲や東道へ挨拶に出向くが、真の狙いはある人物のスカウトだった。真夜と深夜にも協力をしてもら

い、手筈をある程度は整えてある。達也は自身が考案したループキャストシステムを実現すべく、水面下で新会社設立を目論んでいた。その為にはその人物の協力が不可欠なのだ。

誕生日会を終えて、達也と真夜、深夜の三人はリビングにいた。深雪は京家に預け、いよいよ全てが語られた。父親の事、事件の事、家系の事、名前の由来、真夜の野望……話を黙って聞き終えた達也は微笑みながら、泣いている真夜を抱き締めた。

「真夜、よく今まで耐えて来たね。親父はこんなにも想われて幸せだ思うよ」
達也は泣いている真夜をあやしなから更に深夜にも声を掛けた。

「深夜もこっちにおいで、深夜もよく頑張ったね。此れからは俺が二人も深雪達も守るよ。約束する」

達也はそう宣言すると、深夜も一緒に抱き締めた。大事な双子がその腕から零れないように。

その後ベンジャミンから託された記録媒体を受け取り、達也は真夜と深夜に見守られながら、記録されていた通りの手順で成人の儀を執り行った。こうして正式に達也は成人の儀を終えて、十三才にして一家の当主に就く事となった。しかし留学中の為、卒業するまでは真夜が業務を担当する事になる。重大な決定に関しては達也の意思に委ねる形にし、それ以外は引き続き双子で取り仕切る事になった。

翌日、達也は予め真夜を通して面会をセッティングした人物との待ち合わせの店に来ていた。その人物はF L T、C A D開発第三課主任の牛山だった。達也は自身のループキャストを実用化する為、ハード面に優れた人材を自身が一年前に作製した「A I」を人工知能ネットワーク上に放ち、情報を集めて人選を行っていた。あらゆるシステムから情報をかき集めた結果、牛山なら実現可能だと結論が出た。

「初めまして牛山さん。自分は「いのりは祈葉達也」という者です。本日はお越しくださりお礼申し上げます」

「御丁寧にどうも。．．．ん？兄ちゃんが俺に面白いアイデアを披露してくるってか？見た目は日本人には見えないが．．．年は幾つだ？」

「父親が外国の人で母親が日本人です。つまりはハーフですね、年は昨日で十三才になりました」

「十三才でハーフねえ、其れで俺にどんな面白いアイデアを披露してくれるんだ？」

牛山は挨拶もそこそこに本題に入った。それは達也に対して余り良い印象を持っていなかったからだ。いきなり何処かの会社の社長から電話で面会を求められ、今日呼び出された。来てみたら十三才のガキが話の相手だという。金持ちの道楽なら直ぐに席を立つつもりでいた。達也は牛山の心境を悟って早速本題に入る事にした。

達也の話聞いた牛山は眼を見開き、実際に達也が考案したループキャストシステム

の設計図とプログラムを見せて貰う事にした。端末を暫く黙って目を通していた牛山の手がブリブルと震え出す。全てに目を通した牛山は口を開いた。

「これを兄ちゃんが考えてプログラムしたってーのか?…こいつはすげーや。天才だな兄ちゃん」

「…確かに考案して設計したのは僕ですが、実用化するにはハード面を担当してくれる方の協力が不可欠です。ですので牛山さんに是非お願いしたいのですよ」

「何故FLTに勤めている俺に?それにどうやって俺を選んだ?」

「理由はFLT内で不遇な扱いを受けてる第三課のメンバーを引き抜きたいと考えているからです。人選方法はAI人工知能を使い、情報を集めて才能が特化した人物を選定しました」

達也は牛山にそう告げると、「A215、オープン」と口にした。すると、牛山の手元の端末画面がAIにより達也が選定した構成員のプロフィールに切り替わった。牛山はまたもや信じられないといった表情で画面上のプロフィールに目を通していた。其処には何人か知らない人物がいたが、第三課のメンバーが全員揃っていた。

「牛山さん、僕が考えているのはルーピキャストだけではありません。新魔法の開発も新しい技術もまだまだ沢山設計中です。そして僕には大きな夢があります。会社を設立する所から、一から牛山さん達に携わって貰い、存分に暴れて欲しいと思っています。」

如何でしょうか？」

達也の眼は情熱に燃えていた。技術者の牛山にとつては最高の誘いであった。FLTでは不遇な扱いを受け、年々予算や機材も満足に与えられず開発にも集中出来ない状態である。それでも牛山だけではなく第三課全員が奮闘していた。しかしリストラ寸前の者達が幾らアイディアを練つても第一課が手柄を横取りするなど、第三課のメンバーの士気は最悪な状態であった。牛山は現状から脱却すべく達也の誘いを受ける事にした。

「……分かったぜー！兄ちゃんの誘いを受けてやるよ。そして存分に暴れさせて貰うぜー！」

「ありがとうございます、はい、牛山さんがワクワクするような素材を提供し続けますよ」

達也の誘いを受けて牛山は第三課のメンバーを集めて、達也が考案したループキャストシステムや達也の構想、熱意などをメンバーに聞かせた。始めは訝しげな表情を浮かべる一同だったが、実際に牛山がループキャストの設計図を見せながら説得すると歓喜の声が続々と上がる。苦楽を共にして来た彼らは牛山に賛同し、一から出直す覚悟を決めて、第三課全員で辞表を提出した。開発部門の総責任者、司波達郎は厄介者達が自ら退職した事を喜んだ。実は彼らを窓際に追い込んだ人物こそ司波達郎であった。

牛山の勧誘に成功した達也は東道青波と面会していた。達也の新会社設立の資金と設備などは東道から融資して貰ったからだ。達也にしてみれば東道がどのような思惑から協力してようが関係なかった。それはその上で東道を利用する事さえ考えているからである。

「青波、今回も色々世話になる」

「相変わらず餓鬼が生意気言いよって、お前は少しも変わらぬ、達也よ」

達也は事も有るうに東道を名前前で呼び捨てにし、敬語も滅多に使わない。東道がどのような人物か知っている者からすれば卒倒物の態度である。しかし二人の間には緊張した雰囲気は全くない。初めて面通しした日から二人は互いの「本質」を見抜いていた。そんな二人に遠慮の二文字は存在しない。

「今更、青波に畏まる理由がないからな」

「お前は初めて面ツラを見た時からそうじゃ、この東道青波にそのような態度が許されるのはあの【御方おんかた】しかおらん。まああの御方はお前のように下品な言葉使いはせぬがな」

「…比較する相手を間違っているぞ、青波」

「伝説の家系という意味ではあながち間違っではおらんわ、否、確かに身分が違い過ぎるな、お前とは」

達也が青波に指摘すると一旦は反論するが、身分の違いだという意味だと悟り笑いな

がら達也に同調した。そんな東道が達也は少しイラっとしていた。

「其れで、大学の方はどうだ？ お前を渡航させた儂の手に見合う成果は得られそうか？ ？ん？」

「一々恩着せがましいぞ、青波。成果は想定以上だ、後二年も学べば理論は纏まりそう。その時は今までとは桁が違う資金が必要になる。頼りにしてるぞ、青波。」

達也の留学は東道が様々な手を加えて初めてUSNAに送り込めた。戸籍の改竄から住居と護衛の手配、緊急時の帰国ルート確保など有りとあらゆる手段と根回しを駆使して渡航させたのだ。そんな東道は棘のある言葉で達也を少しおちよくってみたが、逆に達也から更なる支援を求められる形になった。

「こんな時だけ頼りにするでないわ。糞餓鬼が」

東道のその言葉で二人は悪い笑みを浮かべ笑い合った。

東道と別れた達也は八雲に挨拶すべく九重寺に足を運んだ。辺りは日が落ち始めており、オレンジ色の空から段々と暗くなり始めている。達也が門を括ると、八雲がいきなり全力の蹴りを達也に繰り出した。咄嗟の事だったにも拘わらず、達也は両腕をクロスさせ八雲の蹴りを防いだ。防がれた八雲は後方に跳んで距離を取り、反撃に備えた。

達也は自身のリミッターを外す一族の直系に継承される秘術を発動した。極限まで筋力が引き出された右足で地面を蹴り、八雲に高速で迫る。一気に間合いを詰めた形に

なった二人は其処から互いに攻撃と防御を高速で繰り返す。最後は八雲の加速術式が加わった正拳突きが決まり決着が着いた。

いきなり始まった勝負に漸く決着が着くと、二人は大の字になり地面に寝転んだ。二人は全身汗だくになり、肩で息をしている。二人の近接戦闘能力はかなり拮抗している所まで来ていた。息を整えた二人は立ち上がり、言葉を交わす。

「いやー達也君、年明けからまた腕を上げたねえー。此れで僕の十の勝ち越しだけどね」
「ここ一年なら、俺の二つの勝ち越しですよ。師匠」

「あれ？そうだっけ？でも確かに達也君と互角に競えるのも、後一、二年だろうね」
「そうですね、大学を卒業するまでには完全に追い越して見せますよ」

「ゆーね達也君。僕もまだまだ修行が足りないかな。其れで今日はどうしたんだい？」
「俺も此処に通い出して五年になりますから、何時までも足踏みしてる訳には行きませ
んの。今日は師匠に帰国の挨拶と、四葉と七草弘一の動向について進展があれば聞か
せて頂きたく伺いました」

九重八雲という人物はかなりの腕前だ。世界中を探しても彼を倒せる者はそうはい
ないだろう。然し達也にとっては体術と近接戦闘の師であっても、あくまで通過点に過
ぎなかつた。

「酷い言い草だね、達也君。まあ僕も本気で稽古出来る相手は達也君ぐらいしかいない

から助かつてるけどね。七草弘一の方は相変わらず閣下が押さえているようだよ。四葉も相変わらず裏の世界で悪名を轟かせているよ。内部の権力争いがますます激化してる様子だね」

「気を悪くしないで下さい、師匠。そうですか、青波が……四葉の方も相変わらずですか、此方まで迷惑な事に巻き込まれなければ良いですが」

「達也君の向上心は知ってるから気にしてないよ。閣下にそんな言動を出来るのは達也君ぐらいだね、全く。今の所は問題は其れほど無さそうだけどね」

「青波に言わせれば俺の他には御方おんかただけだそうですね」

「ああー成る程ね、それはまたとんでもない御方おかたと比べられたものだ」

八雲は東道が達也と比べた相手に納得したと同時に、そんな相手と比べられた達也に苦笑いで同情した。その後軽く雑談して達也は九重寺を後にした。

九重寺から自宅に戻った達也はそのまま風呂に入つて一日の疲れを取り、真夜達が待つリビングに向かった。そこには帰省した達也と一緒に食事を取ろうと皆が揃つていて、二人の家政婦が食事を並べていた。達也は二人も共に食事を取るよう告げて総勢十一人で食卓を囲む事になった。

「達也兄さま、水波の隣にお座り下さい」

水波は満面の笑みを浮かべて達也に席を勧める。一瞬、真夜と深夜のこめかみ蟬谷がピクリと

動いた。双子が水波を牽制するかのように自分達の間座るよう告げるが、

「真夜様と深夜様は、明日達也兄さまとデートに出掛けられるではありませんか！ 昨晚もお誕生日会の後は、お二人で独占して……狡いです」

テーブルを両手で叩きながら水波は抗議する。水波は随分と勝ち気に育った、この双子を前にしても変に臆したりしない。それだけ四葉を抜けてから皆が仲慎ましく過ごして来たからか。

「水波！ その言動は何ですか？ 後で私の部屋に来なさい！ 真夜様、深夜様、おかあさま娘が大変不躋な態度を取りました事、御詫びします」

否、そんな事はなかった。淑女としての教育を普段から叩き込んでいるだけに、流石にこの態度は穂波の怒りを買う事になる。穂波は二人に一礼しながら詫びを入れた。勿論、水波も普段はこのような態度を二人に取ったりしない。只、自身も達也に構って貰いたいという一心が水波の言動の原因だ。

「穂波さん、水波も悪気があつての言動ではないよ。真夜と深夜も水波に意地悪しない。俺は水波の傍に座らせてもらうよ」

「全く、伊吹や伊万里君もそうだけど、達也君も水波に甘いんだから！ 叱る時はちゃんと叱らないと駄目なのよ？」

達也の一言で双子は唇を噛み締め、水波は満面の笑みで喜んだ。この場は水波の味方

に着いた。達也にとつても自身を慕つてくれる水波は妹のように可愛いのだ。達也と巻き込まれた形の伊吹と伊万里に対して穂波が呆れたように注意する。穂波に注意された三人は互いの顔を見合せ、達也は苦笑いし伊吹と伊万里は反省した表情を浮かべた。

その後は会話に花を咲かせながら食事を取り、楽しい時間は過ぎていった。最後に真夜から達也が〔祈葉家〕の当主に就いた事が皆に告げられた。各々が祝いの言葉を達也に掛けるが、深雪だけは余り祝福している様子はなかった。それは深雪が達也に対して言い知れぬ感情を抱えているからである。深雪とつて達也は何か得体の知れない者という認識で、魔法力や体術、勉学も優秀過ぎるといふ印象だ。昔から魔法と体術の訓練、地下に籠つて研究する事に殆んど時間を費やしており、結局小学校も通わなかった。それが深雪が五年生の秋、突如MITに留学してしまふ。同い年なのに何時も自分の遙か先を行く達也に追い付きたくて必死に努力してきた。しかし達也に対しての劣等感はずしも薄れない、それ処か何故か凄く気になる存在であった。その葛藤が達也に対しての態度に表れていた。どう接して良いか深雪自身も解らなくなっており、つい冷たい態度を取つてしまつてゐる。

翌日、早朝から九重寺で稽古を行い帰宅した達也は、昨夜は実家に泊まつた伊万里と久しぶりに手合わせする事になった。伊万里は去年魔法大学を卒業後、普段は真夜達の

会社を手伝いながら、伊吹と共に裏の家業を行つてゐる。水晶眼の制御も一高時代に克服し、今では兄の伊吹を越える逸材に成長してゐた。

場所を地下二階の訓練場に移した二人は向かい合い、一瞬の静寂の後ほぼ同時に動いた。リミッターを外した達也が伊万里の右側頭部めがけ拳を繰り出す。それに対し伊万里は達也の廻りの霊子ブジョンから殺意という不快情動をいち早く察知し、拳を寸前で回避した。その威力は物凄い風圧が物語つてゐる。

「おいおい、お前は僕を殺す気か！」

伊万里の問い掛けに達也は悪い笑みを浮かべ、

「そんな気はないよ。もし頭蓋骨が砕けたら死ぬ前に元に戻すつもりだったよ。其れにたまにはこういう訓練も必要でしょう？」

サラッと洒落にならない事を述べる達也に伊万里は呆れていた。再生を行使すれば結果的に自身も苦痛を被る事になるというのに達也には躊躇いはなかった。そんな達也に対し、伊万里は自身も達也を仕留める気で行く事にした。其処からは互いの殺気がぶつかり合い、まさに死闘と呼べる内容に様変わりする。結果伊万里は顎の骨と肋を六本砕かれ内臓は破裂、更に右膝の靭帯断裂という大怪我、一方の達也は無数の切り傷と左の眼球を潰され、右耳を削がれたが、最後まで立つてゐたのは達也であった。決着が着くと達也が再生を行使し、二人の死闘と呼べる訓練はこうして幕を閉じた。

伊万里との訓練を終え達也はシャワーを浴びてから朝食を皆で取った。伊万里には先程の訓練については口外しないよう口止めしていた為、この場で話題になる事はなかった。

朝食を済ませ、深雪と水波、伊織の三人は登校の為見送り、自身は部屋へ戻り大学で専攻している課題に目を向けていた。

双子の意気込みく気になる相手

この日の真夜は朝から上機嫌な様子。その理由は、待ちに待った達也との【お出掛け^{デー}】の日だからである。真夜が綺麗で居続ける為の努力を惜しまないのは、何時までも綺麗でいたいという女性としての願望であると同時に、達也に綺麗だと褒めて貰いたいからである。その為に今日は仕事を休んで待ち合わせギリギリまでエステに時間を費やす予定である。些か張り切り過ぎな気もするが、真夜にとって達也とのデートは生き甲斐と言つても過言ではなく、達也が綺麗だと褒めてくれる瞬間は何にも変えられない喜びだ。

真夜が此処まで張り切ってしまう原因となつたのが達也の留学である。それは二年前の達也十一才の誕生日に起きた。真夜は毎年のように達也の誕生日を祝うつもりで当日を迎えたのだが、その席で達也から突如留学の意思を告げられ、真夜は物凄い剣幕で猛反対した過去がある。達也を異国に一人留学させる事など当時の真夜にとっては受け入れられるものではなかったが、結局は達也に説得され泣く泣く承諾する事となつた。年々、父親を彷彿させる様に心身共に成長する達也を誇らしくもあつたが、同時に逸物の寂しさも真夜は感じており、達也が留学してからは寂しさで泣いた日もあつた。

留学してからは会えない時間を埋めるかのように真夜はデートを楽しみにしている。

今日の深夜は真夜に負わず劣らず頗る機嫌すじげんが良かった。理由は真夜と同様で、深夜も競うかのように日頃から摂生を心掛けて、美しさを保つ努力を重ねて来た。留学してからの達也は深夜達をより女性として扱ってくれるようになった。今までも真夜と深夜に対して優しかったが、より優しく大事に扱ってってくれるようになった。最初は甥の達也から一人の女性として扱われる事に多少照れもあった。しかし自身の恋心を押し殺して真夜のサポートに徹した結果、青春を謳歌出来なかつた深夜にとつては、達也の優しさに救われる気持ちの方が大きく、今では青春を取り戻すかのように達也とのデートを楽しんでいる。そして少しでも綺麗な姿でデートしたくて、真夜と同じく待ち合わせ前に仕上げのエステに向かう深夜であった。

そんな上機嫌な二人と本日デートする張本人は深雪達を見送った後、大学の課題に目を向けていた。達也は十三時に代官山の待ち合わせ場所に到着しなければならぬ。代官山は真夜達が経営している店舗があり、今日はそこで真夜達はエステを受けている。達也は充分綺麗な双子がデート当日までエステに行く必要はないと思つたが、少しでも綺麗な姿でデートしたいという二人の気持ちを汲んで、望み通りエステが終わる頃に待ち合わせする事にしたのだ。達也は二時間ほど勉強した後、軽くシャワーを浴びてから身支度を整えて、無人コミュニタータクシーで待ち合わせの代官山に向かい、合流した上機嫌の

双子をエスコートしながら久しぶりのデートをスタートさせた。

その日の夕方、達也達三人は夜遅くに帰宅予定な為に、深雪は帰宅後京家にお邪魔していた。家が隣り合わせという事もあって普段から日常的に訪れており、深雪にとつても我が家といった様子で寛いでいる。深雪、水波、穂波の三人がリビングでお茶をしながら話していると、少し水波の機嫌が悪くなっていた。理由は滞在日数が残り少ない達也を、真夜達が今日一日独占しているからである。水波達は既に新学期が始まっている為、只でさえ一緒に過ごす時間が少ない。達也自身も帰省中に行わなければならない事が多く、水波達と一緒に過ごす時間はそれほど多くはなかった。穂波は水波の心情も理解出来るが、真夜達がこの日をどれだけ楽しみにしていたかを知っている為、水波が本格的に御涅る前ごねに言つて聞かせる事にした。穂波が説得している最中も何処か不満げな水波を見兼ねて、深雪が頭を撫でながら優しく微笑んで宥める。

深雪も本当は思う所があるが、中学生になった自分まで不機嫌な態度を露にして、大好きな穂波を更に困らせる結果になる事だけは避けたかった為、深雪は感情を隠して水波を宥めていた。しかし穂波は何か不満げな様子を感じ取っていた。只、何に對して不満を抱いているのか穂波にははっきりとは分からなかった。それは深雪が水波や伊織の様に達也に懐いているとは言えず、寧ろ避けているような印象さえ見受けられる事が

原因だった。達也もそんな深雪にあまり関心がないのか、積極的にコミュニケーションを取ろうとはせずに来た為、二人の仲は良いとは言いがたいのが現状である。只、何かのキツカケさえあれば二人の仲も良くなるかと穂波は考えており、いずれ時が来れば解決する問題だとそこまで深刻には捉えていなかった。

暫く穂波達が話していると伊吹が帰宅して、伊織もリビングに降りて来た。穂波が夕食の仕度を整えた後、五人で夕食を囲む。穂波の料理の腕は中々の物であり、深雪達は穂波の手料理に舌鼓を打ちながら五人での食事を楽しんだ。

その後水波は学校の宿題、深雪は習い事のピアノの練習して過ごした。そうこうしている内に夜が更けてきて、深雪は水波と二人で風呂に入る事にした。日頃から互いの家を往き来している為に、一緒に風呂に入る機会も多く、二人であれこれしている内につい長風呂になってしまいがちだ。互いに髪を洗い合ったり、湯船に浸かりながらガールズトークをしたりと、姉妹のように仲が良い二人は、この日も結局長風呂が原因で穂波に叱られてしまう。

風呂から上がった二人は、既に就寝時間を迎えていた為に水波の部屋へ向かい、二人仲良く同じベットに入った。深雪がお泊まりする時は何時も水波と一緒に寝る。暫くすると水波は寝息を立てて夢の中へ旅立って行ったが、深雪は中々眠気がやって来なかった。妙に冴えた頭で一人深夜達が今頃どうしているのか気になって、何故だか言い

知れない感情が深雪の中に沸き上がって来る。深雪は異性とデートした経験はないが、十三才の少年があゝの二人をエスコートする事が、並大抵な事ではない事ぐらひは想像出来た。普段からU S N A^向でそのような経験を数多く積んでいなければ、あゝの二人の相手は務まらないはずだと深雪は勝手に思っている。達也が U S N A^向で女性とデートを楽しんでる姿を想像した深雪は、ギョツと奥歯を噛み締める。急に心臓が激しく脈打ち、息苦しくなった深雪は胸を押さえた。深雪の胸を締め付けている原因は、嫉妬、怒り、悲しみ、後悔といった感情が、一気に押し寄せて来ているせいであるが、今の深雪には何故こんなにも胸が苦しいのかが理解出来なかつた。ただ正体が分からない感情を認めるのが怖くて、必死に抗う事しか深雪の頭にはない。その事が余計に深雪を苦しめる事となっているのだが、本人にはその自覚がなく、更に負のスパイラルに陥っている。

「どうして？ 私があゝの人の事でこんなに苦しい思いをしなければならないの。」

静寂の中で一人小さく呟いた深雪の言葉は、誰の耳にも届く事はなかつた。涙が深雪の頬を伝う事一時間、枕元を涙で濡らした深雪は漸く夢の中へ旅立って行った。

達也達は久しぶりのデートを満喫して自宅へと向かっている最中であつた。真夜と深夜は自分達の為にコーデイネートしてくれたデートに満足したと同時に、デート中の自分達の扱い方が、予想以上に洗練されて来た事への驚きを感じていた。そこで達也の

USNA^向での女性関係を真夜は尋ねてみる事にした。

「達也、今日はとても楽しい時間をありがとう。達也が考えてくれたプランはとても良く出来ていたわ。エスコートも大分様になって来たけど、USNA^向ではデートをよくしているの？」

「二人が喜んでくれたなら良かった。そんなには機会はないよ、彼女が居る訳でもないしね」

真夜の問い掛けに対して達也が答えると、透かさず深夜が訝しげな表情で聞いたです。

「本当に？達也は外見も頭も良いし、女性のエスコートも上手じゃない？USNA^向でも達也に惹かれる女の子は多いと思うのだけど、本当に特定の相手はいないの？」

予想以上に深夜が真剣な表情で尋ねて来たので、達也は何処まで話そうか一瞬迷ったが二人には真実を話す事にした。

「：：特定の相手がいらないのは本当だよ。只、最近気になる相手が出来た事は確かだけどね」

達也の告白に一瞬眉を潜めた二人は互いの顔を見合わせて、達也に続きを促した。達也が二人に続きを話すと、二人は眼を見開き、真夜が達也にその内容が事実か確認する。

「達也、今の話は本当なの？」

「ああ。まだ本人と会った事もないから確証はないけど、可能性は高いと思っている」
「会った事もないと言ったけど、どうやってその子に行き着いたの？」

「前からネットワーク上で情報を集めていたんだ。幾つか条件を設定して条件が一致する人物の情報をピックアップさせた。相手はお嬢様でネットワーク上にも詳しい情報はあまりなかったけど漸く手掛かりを見つけたよ。U S N A（向）に戻ったら接触してみようかと思ってる」

達也が正直に現状と今後の方針を告白すると、再び真夜が達也に尋ねた。

「…そう、やっぱり達也は伝える前から気付いてたのね」

「ああ、当然気付いていたよ。そして気付いた時から可能性は感じていたんだ」

「流石ね達也、其れでその女の子（レ）を落とすつもり？」

「今の時点では断言は出来ないけど、俺好みの女なら当然そのつもりだよ。構わないだろう？」

ニッコリと微笑みながら問う達也に一瞬迷ったが、真夜は達也の判断に任せる事にした。

「貴方は昔から決めた事を曲げた試しがないじゃない。それに貴方には自由に生きて欲しいもの、好きにすると良いわ」

「ありがとう真夜」

真夜は達也に判断を委ねたが、深夜は一つ気になる事をこの際聞いてみる事にした。

「達也、私も誰を選ぶかは達也の自由だと思うけど……深雪では駄目なの？身贖なしでも深雪は素敵な女性に成長すると思うのだけど」

「深雪？確かに身贖なしで素敵な女性に成長すると思うけど、そういう対象として見た事はないよ」

達也にとっては予想にもしない質問だった為、苦笑いで深夜に答えた。深夜は自身の希望とは裏腹に、薄々そうではないかと感じていた為に、動揺はそれほど大きくはなかった。

「……そう、深雪とあまり仲が良くないのは興味が無いからなの？深雪の態度にも問題はあるけど、あれは達也の秘密を話していないからなのよ」

「確かに深雪は俺の血筋を知らないから、自分と似てない従兄の俺に思う事は多々あるだろうね。だけど今はそれで良いんじゃないのかな？」

「どういう意味？」

「対抗心が成長を促すって事だよ。深雪の魔法資質は素晴らしいよ、ただ世界は広い、深雪の潜在能力を最大限引き出すには、俺に対抗心を抱かせていた方が良くも思っているんだ」

「確かに深雪の魔法資質はまだこれから伸びると思うけど、もう少し仲良くしても問題

はないんじゃない?」

「俺はそうは思わないよ。今の深雪にはこれぐらいの距離感が適切だよ、俺まで甘えさせたら、深雪の成長を阻害する事になる」

言ってる事は理解出来るが、頑なに深雪との関係を改善しようとしないう達也の言葉に深夜は落ち込んでいた。そんな深夜の様子を見て、達也は申し訳なさそうに呟いた。

「深夜、そんなに落ち込まないでくれ。俺は別に深雪の事が嫌いな訳ではないんだから」「本当に嫌いな訳ではないのね? 深雪は私にとって大事な娘だから達也と仲良くして欲しいの…」

「ああ本当だ、深雪の中で何か転機が訪れた時はちゃんと優しく接すると約束するよ」

「…分かったわ、達也を信じる」

「ありがとう、深夜」

達也の言葉を信じてもう暫くは辛抱しようと思いついたが、まだまだ先の事だと思っていた。しかし深夜の見通しに反して、深雪の中で転機となる大事件が数カ月後に起きる事になるのだが、この時はまだ知るよしもなかった。

達也は翌日から牛山達、元FLTのCAD開発第三課メンバーと顔合わせから始め、ルーピキャストの実用化に向けて本格的に始動した。拠点は東道が手配した本社兼開

発、研究施設で達也が先頭に立って、日夜試行錯誤を繰り返した。

会社の代表取締役は達也であるが、代理は深夜が務める事になり、伊万里も一緒に真夜の元から離れた。伊万里は水晶眼を活かして新魔法開発チームに加わる予定だが、基本は事務作業も担当する。設立したばかりなので最小限の人員しか確保していない為、各々がオールマイティーに作業を担当しなければならぬが、文句を発する者は一人もいなかった。

五月に入り一週間が過ぎていた。既に大学が再開している達也は、明日の便でポストンに戻る予定である。暫くは牛山達設計した試作機を達也の元へ郵送し、達也がプログラムを組みながら試行錯誤する方向で進められる。実際にプログラムを組めるのは達也しかいない為、暫く効率面は目を瞑るしかない。

「それでは皆さん、俺は明日ポストンに戻りますので引き続き宜しくお願いします」
「任せて下さい、しっかしボスがM I T生だとは思いませんが。これだけ優秀なら納得は出来ませんがね」

牛山が感慨深そうに呟くと、その他のメンバーも頷きながら同調した。その後、各々の役割を確認しながら指示を出して、達也は家路へと向かった。

その夜、帰宅した達也を真夜達が出迎えて、達也の送別会が開かれた。毎回帰国する度に行われる送別会で真夜は泣いてしまう。そんな真夜を達也が優しくあやすのが恒

例行事となっており、この時ばかりは達也も申し訳ない気持ちになつてしまう。何とか泣き止んだ真夜は、早くも次の帰省の予定を提案して来た。

「次、帰つて来た時は皆で旅行でも行きたいわ。夏休みだし、沖縄なんてどうかしら？」

「そうだね。折角だし、そうしようか」

達也が承諾すると、真夜は満面な笑みを浮かべて喜んだ。真夜は寂しくなる期間を乗り切る為に、達也と旅行に行く事を励みにするつもりだ。真夜の提案は皆にも好評で、各々が来る夏を楽しみにしていた。

翌日、真夜、深夜、穂波の三人に空港で見送られて、達也はポストン行きの搭乗口へと消えて行つた。

大学生活く突拍子もない予感

約十二時間のフライトを終えた達也は、ローガン国際空港から地下鉄で市街地にある自宅へと向かった。家の間取りは3LDKで、一人暮らしとしては十分な広さだ。

渡米時、護衛役の他に家政婦も同行しており、約二週間留守にしていたが綺麗な状態に保たれていた。家政婦の雨宮に軽く挨拶を済ませると、達也は汗を流す為に浴室へと向かった。

汗を流し終えた達也は、雨宮に用意してもらった朝食を一緒に取り、朝食後、無事に到着した事を伝える為に東京の真夜へ電話を掛けた。ボストンとの時差は十四時間あり東京は夜の九時を回っていたが、真夜は夕食も取らずに達也からの連絡を待っていた。

真夜に帰宅の報告を終えた達也は、今後の行動方針とスケジュールを見直す事にした。

これまでは大学で講義、研究、実験に勤しみ、家ではループレキャストを始めとした新技術、新魔法の開発とプログラムの組み上げ作業を行って来た。今後はそれらを実用化

すべく、機器ハードを担当する牛山チームとの打ち合わせや、漸く手懸かりを発見した相手女の子と、接触を図る為の手筈と時間も確保しなければならない。

更に達也の頭を悩ませているのが、魔法の訓練を行う場所と戦闘訓練相手の確保だ。
パーソナル・データ個人情報を改竄してまで留学している現状では、この二つを確保するのは非常に困難である。これらの問題を解決し、更に円滑に進めるには効率性を重視したスケジュールと他者の協力が不可欠だ。

(儘ならないな……)

達也は腕組みしながら瞼を閉じる。どのくらい時間が経つただろうか、思考を巡らしていた達也が時刻を確認すると、家を出る時間を過ぎていた。飛行機の中で睡眠を取っていた達也は、早々に講義に出席する。思いの外時間が経過していたらしく、慌ただしく支度を整えて急ぎ家を出た達也であったが、大学へ向かう道中もその事で頭が一杯であった。

履修している講義の教室に、何とか遅れずに到着した達也を見つけた一人の男が、手を左右に振りながら声を掛けて自分達の方へ達也の視線を向かせる。

「…… やつと出てきたか、おーい！ 達也、此方だ、此方」

聞き覚えのある声に釣られて声が出た方向へ視線を向けると、声の主とは違う人物が

達也の元へ勢いよく駆け寄つて来た。

「ターツィヤ！久しぶり！元気にしてた？」

「やあニコ、久しぶり。俺は元気だよ、ニコはどうだい？」

「どうだい？じゃないよ、全然連絡着かないから心配してたのよ？」

再会の挨拶と共に抱擁ハグと頬レディーに接吻キスを要求するのは、ニコラ・ローレンス。ブロンド色の長髪と蒼い瞳が綺麗な女性である。達也はニコラの挨拶に応えて、心配させた事を謝罪した。

「悪かった、向日こ本うで忙しかったとはいえ、折り返すべきだったな」

「本当だよ、全く。けど、赦してあげる。その代わりに今度食事デートしよ？」

（流石に今回は受けた方が良さそうだな）

「畏まりました、御嬢様」

達也があつさり食事の誘いを受けると、誘った本人が何故か驚いていた。ニコラは北米切つての美女で、ミスUSNAを決める大会の最終候補者になった経験がある。当然異性から交際の誘いアプローチを数多く受けているが、ニコラはその誘いを全て断っている。そんなニコラがここ半年デートデートに誘い続けたのが何故か達也であるが、これまで良い返事を貰った事はなかった。

それ故に、一瞬達也の言葉に驚いてしまったニコラは、自身の聞き間違いではない事

を確認した。

「ほ、本当？ 私の聞き間違いじゃないよね？」

「ああ、本当だとも。俺が約束を破った事はないだろ？」

「う、うん。勿論」

聞き間違いではなく確かに言霊を取ったニコラは、高揚して緩みきった顔を両手で覆いながら席へ戻っていく。ニコラの後を追ひ、もう一人の女性に声を掛ける。

「おはよう、ジェシカ」

「おはよう達也、久しぶりね」

榛色の瞳、艶やかな黒髪を靡かせ、ニコラ同様に抱擁と接吻を求めるのは、ジェシカ。

ヴァシレヴァ。旧ベラルーシ出身で新ソ連からの留学生の彼女もニコラに負けず劣らずの美女である。その証拠にミスUSNAの最終候補者のニコラよりも、ジェシカの方

が異性から人気があるのだ。妖艶な雰囲気から醸し出される色香を纏う彼女は、才色

兼備を地で行く女性である。

「ああ久しぶり、ジェシカも元気だったかい？」

「私は何時も変わらないわ。貴方と連絡が着かなくてもね……」

（此方は更に露骨だな…… どう対応しようか）

ジェシカは少し意味ありげな視線を達也に向けながら、棘ついた言葉を並べた。そ

う、ジェシカも大学が再開しているのにも拘わらず、顔を見せない達也が気になって連絡を取ろうと試みていた。

「悪かったよ、ニコラにも伝えた事だが、連絡を貫った時に折り返すべきだったと反省している」

「ふーん。私からの電話を無視したって事で良いのね？」

「まあ……簡潔に云えばそうだな」

「言い訳はしなくて良いの？」

「ああ、不要だ。無視した結果になったのは事実だからな」

（本当、生意気なんだから）

最早、開き直っている様にさえ見える達也にジェシカは少し苛ついたと同時に、自身と同様の理由で無視されたニコラが、何故か顔を綻ばせて戻って来た理由が気になった。

「そう、で、ニコラが気持ち悪い顔を覆って戻って来たのは何故なの？」

ジェシカの酷い物言いに、聞き捨てならないニコラが噛み付いた。

「ちよ、ちよつとジェシカ！気持ち悪い顔って何よ？それは酷くない？」

「事実でしょう？自覚があるから緩みきった顔を覆って戻って来たのでしょ？」

（そろそろ潮時だな、観念するか）

雲行きが怪しくなつて来た雰囲気を感じて、ジェシカの意識を達也が自身に戻す。

「ジェシカ、ニコラに嘯み付くのは止せ。御詫びにジェシカが頼んでいた研究の手伝いをするよ。それでどうだ？」

「…了解よ。それで手を打つわ」

以前から頼まれていたが、多忙を理由に断っていた研究の手伝いを行う事でジェシカは一応納得して見せた。この教室に辿り着くまで今後のスケジュールに頭を悩ませていた達也にとつて、これはかなりの痛手だ。

「おい。達也、最初に声を掛けたの俺なんだけど何で俺への対応が最後のの？」

「なんだカーティス。悪い、今はお前の相手はしてやれない」

「何それ!? 酷くない? 俺だつて心配して連絡を入れた筈だが…」

「……」

(コイツは平常運転だな)

「ちよ、お前! マジでその態度はないぜ」

カーティス・ウォルソン、薄紫の瞳に焦げ茶色の髪、達也の親友で校内でも人気が高い色男。

気心知れた仲のカーティスを、構っている気分ではなくなった達也は敢えて無視する事にした。

三人とは歳が七つ離れているが、達也と三人は入学当初から互いを認め合い自然と一緒に行動するようになった。この一帯で有名人の四人が連むと必然的に目立つ存在となり、周りからは羨望と嫉妬の眼差しが向けられている。

その日の夕日、最後の講義を終えた達也は借用している研究室で作業を行っていた。此所では達也の夢に関わる研究、実験が行われている。ボストンは六十を越える大学が犇めく街であり、ハーバード大学、タフツ大学、ボストンカレッジ B、ボストンユニバーシティ C、B、U など名だたる名門が数多く存在する。

それでも此処MITを選んだのは、自身の研究に専念出来る環境が最も整っていたからである。

達也の研究は既存の工学技術や幾何学を用いているだけに見えるが、所々に新技術や独自の理論を取り込んでいる。全体像を把握しにくい達也の研究は多大な評価をされている訳ではないが、達也には終着点までの道筋がはつきりと視えていた。

戻つて来てからの達也はこれまで以上に多忙を極めていた。ニコラとの約束デットは早々に片付いたが、ジェシカの研究に予想以上の苦戦を強いられる事になった。一旦自身の計画を停止させて、議論を重ねながら作業を続けて、漸く目処グが着いた時には既に六月

に入っていた。

本来は五月には後期の授業が終了し三ヶ月の夏休みに入るのだが、四月に起こった事件のせいで約二週間休校になってしまい、休校になった二週間分の講義が六月に入ってからも続いていった。

遅れていた後期も無事に終了を迎えたこの日、四人は達也の自宅に集まっていた。

長い夏休みに入ると各々予定がありこれまでのように集まる機会も少なくなる。カーティスはワシントンへ帰省し、その後家族でクルーズ旅行を予定している。

ニコラはコンテスト後モデルとしても活躍している為、ニューヨークを拠点として世界各地を飛び回る予定だ。ジェシカは特に夏休みの予定はない。生家がある旧ペラルーシはここ数年、政情が不安定となり治安が悪化している。その為帰省の予定はく寮に残り研究を続ける。

「まずは乾杯でもしようか」

カーティスの一言でグラスに発泡葡萄酒シャンパンが注がれた。皆がグラスを掲げた所でジェシカが呟いた。

「達也、何故貴方のグラスにも発泡葡萄酒シャンパンが注がれているの？」

「ああ、言っただけじゃなかったか。俺の家系は十三を迎えると成人として認めらるんだ。だから

ら酒を呑んでも問題ない」

(なんだその家族ロイカルルールは!?)

(本当、呆れた人。：。今更ね)

(そんな理由で良いんだ!?)

達也の言い分に三人は呆れながらも、四人だけの場なら問題ないと判断して乾杯した。宴が進むにつれカーティスが用意した酒が次々と飲み干されていく。微酔い気分の四人は色々な話題で盛り上がり気付けば明け方近くになっていた為、宴は此処でお開きとなった。

達也の朝は早い。戦闘訓練は出来なくても身体を鍛える事は出来る。ランキングや筋力トレーニングは毎朝の日課だ。夏休みに突入して二週間が経過し真夜達からは帰省を求められていたが、事情を説明して七月中は此処USNAに残る事に決めた。沖繩旅行は八月に延期された為、帰省後は拗ねているだろう真夜達のご機嫌を取る必要がある。(帰ったら多少の我が儘には目を瞑るか。：。それより今は)

帰国を渋った最大の目的はお目当ての人物と接触する事だ。達也は自身の素性を包み隠さず明かし、面会を求める内容を綴った手紙を目当ての人物に出していた。

手紙を出してから一週間が経過し、遂に目当ての相手から返事が届いた。手紙の内容

を簡潔に纏めると、言い分は理解したが信用するには値しない、確認の為に記載している番号へ一度電話を掛けろという内容だったので、達也は迷わず記載されている番号へ電話を掛けた。

(随分と慎重だな、まあそれも仕方がないか)

電話が繋がりに執事らしき人物が電話に出た。達也が身分を明かし、ある人物へと取り次がれる。電話口の相手はダニエル・エドワーズ、エドワーズ家はUSNAでも有数の大富豪であり、ダニエルはエドワーズ家当主だ。

「お待たせした、私はエドワーズ家当主のダニエル・エドワーズだ」

「改めまして、私は祈葉家当主の達也・ルキフェル・祈葉です。今日はお話の機会を頂きたくご連絡させて頂きました」

「君の娘への手紙は読ませて貰ったから手紙の内容は把握している。その上で君の手紙が本当かどうか先ずは確認したい、映像電話ヴィジホンで顔を見て話したいが良いかな？」

「構いませんよ」

達也はダニエルの要求を承諾し映像電話ヴィジホンに切り換えて、画面越しに顔を見合わせながら話を再開させた。画面越しに達也の容姿を確認しながら話を続けていたダニエルは、達也が手紙に綴られていた通りの人物か見極めようとしていた。ダニエルが質問し達也が答える、そんな問答を暫く続けている内にダニエルは亡き妻オリヴィアと、ある約

束をした会話を思い出していた。

それはオリヴィアの命の灯火が尽き欠けていたある初夏の事だ。悪魔サタン・ファミリアの一族の血を引くオリヴィアは長年後悔している事があつた。それは達也の父親、ベンジャミンの力になれなかつた事だ。傍系のオリヴィアは大分血は薄まつていたが、それでも一族の歴史は父親から伝承されてオリヴィア自身も誇りに思つていた。それ故に同族を助けられなかつた事を死期が迫つて尚、後悔している。

「ねえ、ダニエル。私の最後のお願いを訊いてくれる？」

「ああ勿論だオリヴィア。言つてごらん」

「ありがとうダニエル。頼みつて言うのはね、クリステイーナの結婚相手はあの娘自身に選ばせてあげてほしいの、私が貴方を選んだ時のように」

「オリヴィア……」

暫し二人の間に沈黙が流れる。オリヴィアは遠く見透すような表情を浮かべて言葉を紡ぐ。

「漠然となんだけど予感みたいなものがあるの……あの娘はきつと選ばれるわ」

「選ばれる？ 話が見えて来ないな、一体何にだい？」

「勿論あの娘の運命の相手によ、その相手は運命に抗い続ける者のような気がするの」

（まさか、そんな筈は……）

「：： 君達の他にも血を引く者がいて、その男にクリステイーナが惹かれると言うのか
いっ。」

ダニエルの問いにオリヴィアは苦笑いを微かに浮かべて、続きを話し出した。

「：： 何故かしらね、自分でも突拍子もない事だと解っているのにそんな予感がするわ。
だからお願い、あの娘が選んだ相手がもしも私の予感通りでも祝福してあげて」

「ああ、約束するよ」

当時ダニエルは、オリヴィアの言葉^{予感}を真に受ける事は無かった。しかし愛する妻の最
後の頼み事を断るなどダニエルには出来なかった、それ故にオリヴィアの遺志^{願い}を尊重
し、愛娘には自分で相手を見つけるよう伝えている。

（オリヴィア：： 君の予感した通りになるかもしれない。恐れ入ったよ：：）

達也との会談中に過去の記憶が過ったダニエルは、一度クリステイーナに達也の話し
相手をさせて反応を伺う事にした。執事にクリステイーナを呼びに行かせ五分程経過
した処で書斎の扉が開いた。クリステイーナに軽く事情を説明すると、ダニエルは席を
外し書斎を後にした。

手紙を貰った時からクリステイナは達也と話す事を楽しみにしていた。幼い頃に母が亡くなり、自分の血筋については父から聞かされた。決して公には出来ない秘密、その秘密を共有する相手がどんな人物なのか物凄く興味があった。

(はあー、少し緊張する…)

緊張した面持ちで画面の前まで来ると、画面の向こう側には見惚れるほど顔立ちが整っていて、何処か大人びた雰囲気醸し出す少年がいた。動揺から一瞬変な間が空いてしまい、気恥ずかしくなってしまったクリステイナは赤面した顔を伏せた。

(今、絶対変な女だと思われたよ。すっかりしなちゃ、私の方が歳上のお姉さんなんだから)

クリステイナが一人脳内で葛藤していると、達也が先に声を発した。

「初めまして、達也・ルキフェル・祈葉です。宜しければ美しいお顔を上げて頂けますか？」

先に挨拶を受けたクリステイナはルキフェルという言葉に反応して現実に復帰した。

(やつぱり落ち着いた人ね、ルキフェルか… 私もちやんと挨拶を返さなくちゃね)

「失礼しました、私も名乗らせて頂きます。クリステイナ・ルキフェル・エドワーズと申します」

「ご丁寧にありがとうございます、それにしても瞳の色がお綺麗ですね。翠玉色の方を拝見したのは初めてです」

「ありがとうございます、実は私も同じような事を思っていました。赤みがかつた黄金色ですよ？髪は近い色をしてますが達也殿の方がより白みがかつておりますね」

「瞳の色は父親譲りだと母に聞いてます、髪は一族の血を継ぐ者の特徴ですよ、直系に近いほど白みが強くなるんです」

その後二人の談笑は二時間程続き、次第に堅苦しい言葉使いも無くなっていった。初めは少し緊張していたクリステイーナだが、話している内に自身でも信じられない程に打ち解けているのに気付いた。会話が弾んだせいか思いの外時間が経過していた為、続きは翌日に持ち越された。こうして悪魔サタン・ファミリアの一族の血を継ぐ二人が出会った事で、物語は更に複雑になっていく。

八年振りの再会く感觸

ダニエルが書齋を出てから二時間が経過していた。娘の希望もあつて連絡が来た際には話す機会を与えるつもりでいたのだが、想像以上に会話が弾んでいるようだ。達也に対しての印象は非常に聡明な男だという事、大学での様子や成績も調査してその事に疑いはない。只、何処か釈然としない、その理由は彼が優秀過ぎる点だ。立场上、政財界の重鎮や軍関係者にも顔見知りは多いが、その猛者達よりも油断ならない相手だと直感した。若くして何とも頼もしい限りではあるが、娘には少々荷が重い相手だと感じたと同時に、やはり根本的な諸問題が数多く存在している。

(オリヴィア、やはりあの娘には…)

二人の仲が必要以上に進展することを危惧し始めたダニエルは、心の中でオリヴィアに謝罪し辛抱しきれず書齋へと向かった。書齋から聞こえて来た娘の楽しげな声に嫌な汗が額に浮かび、一瞬扉を開くことを躊躇した。そのタイミングで、何やら約束を取り付けて電話を切ったことが外から窺えた。そこでダニエルは書齋へと足を踏み入れ娘の元へと近付いた。いきなり扉が開き、一瞬驚いたクリスティーナがダニエルを見据えて言葉を発した。

「……パパ、もしかして会話を盗み聞きしてたの？」

クリステイーナが訝しげな顔で尋ね、ダニエルは誤解を解く為に弁解する。

「誤解だよ、クリス。丁度今来たところだよ、余りにも長いから問題でもあったのかと思ってるね」

（嘘は付いてないようだけど、何か引つ掛かるわね）

「……御免なさい、話に夢中でこんな時間に時間が経っているなんて思ってたの」

「そうか、問題ないなら良いんだ。それで彼と話してみても印象はどうだい？」

「彼は年下とは思えないほど優秀だわ。己を貫き通す意志の強さも感じたし、何より他の男の人にはない不思議な魅力のある人ね、一度直接会って話してみたいわ」

（娘なりに分析はしているようだが些か樂觀的のようだな。やはりクリスは彼に対して好奇心を擽られている、どうしたものか……）

完全に向こうのペースに引き摺^ずられている娘を見てダニエルは頭を抱えなくなった。娘では彼の相手をするのは力量不足だと感じているが、好奇心に火が点いた娘を説得するのは容易ではない事をダニエルはよく知っている。何故なら母オリヴィアに娘はよく似ているからだ。

「クリス、彼の事を悪く言うつもりはないが父さんは心配だよ。彼との接触を続ける事で秘密が露呈した時はクリスまで巻き込まれてしまう。彼の祖父と祖母の事は前に話

しただろう？」

「：。パパが心配してくれるのは嬉しい、確かに私達の血筋が公になれば同じような危険が迫るかもしれないし、彼ともその件は話したわ。だけど彼は私の身に危険が迫った時は必ず助けると約束してくれた。ルキフェルの名に誓ってそう宣言したの、彼の言葉は何故か心から信じられたわ」

「まさか：。クリス、彼に交際を申し込まれたのかい!？」

「ち、違うわよ、何でそうなるの。パパ！彼はただ自らの名において、過去の悲劇の様な事を二度と起こさせないと伝えたかったの！それに女性の扱いに慣れていそうな彼が映像電話越しに交際を迫るなんて粗相をする筈がないわ」

クリスティーナは呆れながら早とちりしたダニエルへ言葉を返した、と同時に一瞬でもそれならそれで良かったと思ってしまう事が自分でも恥ずかしくなった。

翌日、昨日の内に携帯番号フライベートナンバーを交換していたクリスティーナは昨日の今日で一刻も早く話したくなり、約束の時間よりも早く達也の携帯端末へ電話を掛けた。昨日の話の続きと一晩置いて思った事などを話していると、話は夏休みの予定へと話題が移った。達也の予定を聞いたクリスティーナは思い切った事を達也へ告げた、流石の達也も動揺の色を見せ眼を見開いたがそれは一瞬で、少しの沈黙の後クリスティーナの計画を承諾した。

八月四日、今私はお母様や叔母様、かなぐり京家と家政婦の総勢十人で前から凄く楽しみにしていた沖縄旅行に來ている。大所帯でも問題なく滞在出来るようにと、お母様と叔母様が大きめな別荘まで用意してくれた。

「凄く立派な別荘ですね、お母様」

「そうですね、これだけの大所帯だとこの位の大きさは必要ね。そうよね真夜」

「ええ、用意するのに結構苦労したわね。でも苦労した甲斐はあったわ姉さん」

お母様と叔母様とで用意したこの二階建ての別荘は、部屋数十三部屋、ダイニングキッチンが二つに浴室とトイレが五つもある。更に大きな庭へと続くテラスではバーベキューも行える、お母様と叔母様が吟味を重ねて購入した物件。

(本当に素敵なお別荘、流石はお母様と叔母様ね)

私は振り分けられた部屋でそんな事を思いながら荷解きを済ませて少し休憩を取っていた。窓から入って來る風が南国特有の匂いを運んで來る。すっかりバカンス気分が私に水波ちゃんを誘って散歩に出掛けようと一階へ向かうと、見知らぬ男の人がお母様達を訪ねて來ていた。

「真夜さん、深夜さん、お二人共お久しぶりです」

「：：貢さん、貴方がどうして此処に：：」

お母様が珍しく驚いた顔でその見知らぬ男の人に尋ね、叔母様は訝しげな表情を向けていた。

「先月から沖繩此方に家族旅行に来てます。丁度此方で仕事もありましたのでついという感じですがね、それにしても相変わらずお二人共お綺麗ですな」

「余計なお世辞は要らないわ、それで今日は何用でお越しになられたの?」

「そんなに警戒為さらないで下さい、お二人が此方にお越しになられていると聞いて今夜の黒羽主催のパーティーにご招待したく参っただけですよ」

「四葉を出た八年前に私達には干渉しないよう忠告した筈ですがお忘れかしら?」

四葉：：私はあまり覚えていないけど、八年前までは四葉の一員だったと最近知った。お母様と叔母様は四葉家の直系で、当然私とあの人もその血を受け継いでいる。四葉を去った理由については教えて貰っていないし、普段は口外しないよう固く口止めされている。私はお母様の口振りから相手の男の人が四葉家の関係者だと容易に推察するに至った。

「勿論、その事は覚えていますよ。只、偶然だとしても折角の機会ですし、久しぶりにお二人とお話する機会が欲しかったのです。それに私の子供達の成長した姿もご覧に

なつて頂きたいですし。： 勿論お二人のお子さんも御一緒に」

「折角のお誘いですけどご遠慮します、ご期待に添えなくて悪いけど、私達は四葉に関するつもりは微塵もないわ。再度申し上げますけど私達に干渉為さらないで下さる？ 您所在的位置がお互いの為にも良くつてよ」

「： そうですか、分かりました。ですが万が一お気が変わりましたら遠慮なくお越し下さい、場所は此方になりますので。それでは私はこれで失礼します」

そういうと男はお母様にパーティー会場を記載したメモを手渡して去って行った。私はお母様の元へ駆け寄り、さっきの男が何者なのか尋ねた。

「深雪はまだ幼かったから覚えてないわよね、あの男は四葉の分家、黒羽家主の黒羽貢さん。私達の従弟に当たる人よ、黒羽は四葉の諜報活動や裏の任務を担っているの。恐らく私達が此方に来る事は事前に知っていたようね」

「四葉の分家。： お母様達の従弟の黒羽貢さんですか。：。そうだお母様、水波ちゃんと少し海辺を散歩して来ても良いですか？」

男の事を話すお母様の様子が何処となく影を帯びていたが、私はその事へは敢えて突つ込むような真似はしなかった。気分が下がらない内に当初の目的だった外出の許可をお母様に求めた。

「そうね、良いわよ。その代わり伊万里に同行をお願いしなさい」
「：： 分かりました、では伊万里さんをお願いして来ます」

近くを散歩するだけなのにと、多少思う処があったがお母様の心遣いを無下には出来ずに大人しく従う事にし、伊万里さんをお願いする為に部屋へと向かった。その途中で穂波さんと鉢合わせし、事情を説明すると穂波さんは何やら企んだ顔を見せた。その後は自分の部屋に連行され全身に日焼け止めクリームを塗りたくられた、幾らお願いしても穂波さんは止めてはくれず私は恥ずかしい思いをする羽目になる。塗り終えて満足した穂波さんは次の獲物の水波ちゃんの前へと向かつて行つた。

気持ちを落ち着かせてから衣服を整えた私は、伊万里さんの部屋に向かうべく部屋を出た。すると又もや一階からお母様達の話し声が聴こえ私の気分は一気に急降下した。理由はお母様達の話し相手に心当たりがあるから、でも到着するのは明日だった筈。自分でも何故か分からないうちに私の足は声のする一階へ向かつていた。

「久しぶり、深雪」

たった三ヶ月なのにこの人の声を聞くのも笑顔を見るのも随分久しぶりな気がした。この人の声も、笑顔も、私の心臓の鼓動を早く脈打たせる。その事がとてつもなく悔しくて、つい衝動的になつてしまふ。

「そうですか？ たった三ヶ月振りです、それよりアナタの都合でこの旅行が今日まで先

伸ばしになったんです。楽しみにしていた私達に一言お詫びの言葉があつても良いのではありませんか？」

「それは済まなかつた、真夜と深夜も悪かつたな」

私に一言謝つたあの人は直ぐ様お母様と叔母様へと視線を戻した。

（それだけ！、私とはもう話す事はないと言うの？、私だつてこんな子供っぽい態度を取りたくはないのに、どうして何時もこうなるのかしら：：）

あの人は此所に向かう途中で先程の男の乗つた車とすれ違つたらしく、お母様達に尋ねていた。お母様達が事の顛末を説明すると一瞬何かを考えた後、そのパーティーにお邪魔しようと言ひ出した。お母様達が理由を尋ねても笑つて誤魔化す、私にはこの人の考えている事がさっぱりわからない。

そんな事を考えていると二階から京家の五人が降りてきて、水波ちゃんと伊織君があの人の人へ駆け寄つて抱き付いた。京家の双子と挨拶を交わして穂波さん達とも親しげに挨拶を交わすあの人の、その光景を眺めていると虚無感が私を襲つて来た。居た堪れなくなつた私に追い討ちを掛けるように水波ちゃんがあの人を散歩に誘う、余りのシヨックに言葉を紡げない中、伊万里さんとあの人が何かを話して付き添い役を交代してしまつた。どうしたら良いか分からなくなつた私は、水波ちゃんを引つ張り足早に外へと飛び出した。

別荘を飛び出して暫く経つと海岸沿いに出た、海風がとても気持ちよく、沈んだ気分を盛り返してくれる。

(日焼け止めを塗つてて良かった、これなら気兼ねなくお散歩出来そう。強引な穂波さんには困つたものだけど、我慢した甲斐はあつたわね。)

私はそんな事を思いながら瞳を綴じた。海鳥の鳴き声や波が浜に打ち寄せる音が心地良い、それに混じつて後ろからあの人の足音が聴こえる、何時しか私の意識はあの人の足音に奪われていた。水波ちゃんが呼び止める声を発したので咄嗟に瞳を開くと何か大きな物に打ぶつかつてしまった。

すると後ろから腕を引っ張られてあの人の胸に顔を埋めている状態になり、隣には水波ちゃんがいた。

(何!?! 一体何が起きてるの? あの人の腕の中に私がいる?)

「あの、離して下さい」

「駄目だ、俺から離れるな」

「……はっ」

真下から覗き見たあの人の真剣な顔つきと声に背筋がゾクリとする、全身が一瞬で火照つた事が自分でも分かった。しかしその余韻に浸る暇もなく現実に引き戻される。

「オイオイ、痛いじゃねーか！何処見て歩いてんだ？あ？」

そう突つ掛かつて来た大柄の黒人の男に続いて残りの二人も私達に罵声を浴びせる、するとあの人が溜め息をついて言葉を発した。

そういうえば沖繩観光の注意書きで見かけた事があつた。素行が良くない者が多いと言われる旧沖繩駐留アメリカ軍遺児の第二世代……取り残された血統。

「はあー、詫びを求めつもりはない、来た道を引き返せ。その方がお互いの為だ」

「……んだと!？」

「聞こえていた筈だが？」

（何で態々挑発するような事を言うの？これ以上挑発しないで！）

「地面に頭を擦り付けて許しを乞いな、今ならまだ青痣ぐらいで許してやる」

「土下座という意味なら頭をではなく、額をと言うべきだ」

遂に堪忍袋の緒が切れた黒人の男が拳を思いつきりあの人がかけて振り抜いた。私はず目を見つめたが、相手の驚いた声で目を開いて状態を確認した。あの人は右手一つで大柄の黒人の拳を受け止めていた。

（……嘘!? あんな大柄な男の人の攻撃を片手で簡単に受け止めた?……けど魔法の兆候は感じなかった、いくらこの人でもこんなに近くでそれも一瞬で、私に悟らせないで魔法を使える訳がない。だとしたらやっぱり生身で……この人はこれ程までに強いのか?）

私が目の前で起こった出来事を一人分析していると、あつという間にこの騒動に決着が着いた。

「面白い、単なる悪ふざけのつもりだったがいい獲物が見つかった」

「良いのか、ここから先は洒落じゃ済まなくなるぞ」

あの人はそう言うのと相手の鳩尾に拳を打ち込んだ、大柄な男は失神して膝から崩れ堕ちた。残りの二人はその場に立ち竦んでいる。既に三人から興味がなくなつたあの人は他の二人には目もくれず私と水波ちゃんへ手を伸ばす。

「二人とも、そろそろ帰ろうか」

「・・・はい」

「はい、達也兄さま」

笑顔で一言発して躊躇なくあの人の手を握る水波ちゃん。私は一瞬戸惑つたが何故か拒めず恐る恐る手を繋ぐ。別荘までの帰り道、私は一度もあの人の顔を見ることが出来なかつた。赤くなつた顔と耳を隠す為帽子を深く被り、必死に平常心を取り戻そうとしていた。

手を繋いで帰宅した私達をお母様達がお母様達が驚いた表情で出向かえた。あの人が事情を説明する、然しお母様達は微塵も心配した様子はなかつた。それでも何時もと違う私の様

子を感じ取って声を掛けてくれた。

「深雪さん、大丈夫ですか？」

「お母様、大丈夫です。私は少しシャワーを浴びて来ます」

精一杯平常心を心掛けた笑顔でお母様に答え浴室へと向かった。シャワーを浴びて身体を綺麗にした私はゆつくりと湯船に浸かった。頭の中はあの人のことで一杯になった。

（あの人に抱き締められた感触も手を握った感触もまだ残っている。凄く男の人だった、一つしか歳は変わらないのに凄く頼もしかった…）

何をしてもし敵わない、何時も私の遙か先を歩く人。お母様達や穂波さん達が、あの人と私を比較している訳ではない。けど私自身は追い付きたくて必死に努力して来た、それでも全然届かなくて…それが凄く悔しくて、いつの間にかどう接すれば良いかも分からなくなつて…

（私はあの人の事が嫌いではない…、私はあの人の事が好きではない？…答。あの人を認めたくない、こんなにも気になつて心臓の鼓動が早くなる事を認めたくない…どうしたら良いの？）

湯船に浸かりながら私は自問自答していた。